

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第181集

# 井 通 遺 跡 II

## 井伊谷川流域の遺跡 III

平成8~19年度 二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第181集

# 井 通 遺 跡 Ⅱ

## 井伊谷川流域の遺跡 Ⅲ

平成8~19年度 二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 8

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第181集として『井通遺跡Ⅱ』をここに刊行する。

井通遺跡は、静岡県浜松市北区細江町に所在する。この周辺は銅鐸分布圏の東端にあたることで著名であり、東海地方において歴史的に重要な地域である。

静岡県埋蔵文化財調査研究所は、井伊谷川河川改修工事に伴い、井伊谷川流域の遺跡を1996年度より継続的に調査を実施してきた。特に井通遺跡では律令期の建物群や大溝、墨書き土器等が確認され、引佐郡家が直接管理する港湾施設としての機能を有していたことが判明した。

本書は、2001年から2004年にかけて井通遺跡で実施した弥生時代中期～古墳時代前期の発掘調査成果を報告するものである。これらの調査成果が、静岡県西部における本格的な農耕社会成立の解明に寄与されることを願って止まない。さらに、本書が多数の方々に活用され、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば、誠に幸甚である。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県浜松土木事務所、細江町教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった調査員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表す次第である。

2008年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 斎藤 忠

## 例　　言

- 1 本書は静岡県浜松市北区緑江町広間に所持する井通遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は井通遺跡における弥生時代中期～古墳時代前期の調査を報告するものである。  
古墳時代中期以降の調査は、『井通遺跡』本文編1・本文編2・図版編・文字資料編として報告している。
- 3 調査は、二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う理藏文化財発掘調査として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、緑江町教育委員会の協力を得て、財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 4 本書で報告する現地調査、及び一部の資料整理は、藏本 俊明 調査研究員を担当者として実施した。  
なお、調査体制・調査期間等については第1章に記した。
- 5 本書の執筆分担は次の通りである。

平塚 哲久	第1章・第2章
丸杉俊一郎	第3章・第4章
- 6 現地の基準点測量、空中写真測量、空中写真撮影は、株式会社 フジヤマ、及び大成エンジニアリング株式会社に委託した。また、石標の実測・トレースを株式会社 パスコに委託した。  
なお、理化学的分析結果は付載として掲載し、実施複数は文中に記した。
- 7 遺構の写真撮影は、藏本 俊明 調査研究員が行った。遺物の写真撮影は、当研究所写真室担当者が行った。
- 8 現地調査において藤原和大氏（静岡大学准教授）からご指導を得た。  
また、石器制作について鶴宣田佳男氏（文化庁）からご指導を得た。記して謝意を表します。
- 9 本書で使用した座標値は、日本測地系（旧測地系）に準換した。
- 10 本書に掲載したは、発掘調査段階の名称を変更した。本書をもって正式名称とする。
- 11 本書の現地は、財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 12 発掘調査資料、及び出土遺物は、静岡県教育委員会が保管している。
- 13 本書作成以前に井通遺跡の内容について中間的な報告を行ったが、それらと内容が異なる場合は本書をもって正式報告とする。

# 井通遺跡 II

## 目 次

序  
例 言

第1章 序 論	1
第1節 調査経緯	1
第2節 調査組織と調査経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査成果	11
第1節 調査概要	11
第2節 遺 構	12
第3節 遺 物	17
第4章 総 括	23
第1節 都田川流域における弥生時代中期の諸問題	23
第2節 井通遺跡の歴史的変遷	28
引用・参考文献、図出典	
付 載 理化学的分析	
図 版	
写真図版	
報告書抄録	

# 図版目次

- PL.1 井邊道路 全体図  
 PL.2 共通歩道 道幅割合付  
 PL.3 精進区北部 掘出遺物図  
 PL.4 調査区南部 掘出遺物図  
 PL.5 掘出遺物図 (1)  
 PL.6 掘出遺物図 (2)  
 PL.7 掘出遺物図 (3)  
 PL.8 敷出遺物図 (4)  
 PL.9 乾燥槽構造 (5)  
 PL.10 SH4001・4005共通図  
 PL.11 SH4002～4004共通図  
 PL.12 SH4006・4007共通図  
 PL.13 SH4008～4010共通図  
 PL.14 SH4011～4013共通図  
 PL.15 SH4014～4016共通図  
 PL.16 SK4001～4003共通図  
 PL.17 SK4001～4005, SD4001・4002共通図  
 PL.18 SH4017共通図  
 PL.19 SH4018共通図  
 PL.20 ST4009・4020共通図  
 PL.21 SH4021・4022・4025共通図  
 PL.22 SH4023～4025共通図  
 PL.23 SH4027共通図  
 PL.24 SH4028・4029共通図  
 PL.25 SE4028・4031共通図  
 PL.26 SH4032・4033共通図  
 PL.27 SH4034～4036共通図  
 PL.28 SH4037共通図  
 PL.29 SH4038～4040, SK4005共通図  
 PL.30 SK4006～4008, SD4003共通図
- PL.31 SH4001他出土土器実測図  
 PL.32 SH4018 (1) 出土土器実測図  
 PL.33 SH4018 (2)・SH4009 (1) 出土土器実測図  
 PL.34 SH4019 (2)・SH4009 (1) 出土土器実測図  
 PL.35 SH4020 (2) 敷出出土器実測図  
 PL.36 SH4027出土土器実測図  
 PL.37 SK4009他出土土器実測図  
 PL.38 SK4036他出土土器実測図  
 PL.39 SK4005他出土土器実測図  
 PL.40 SD4002出土土器実測図  
 PL.41 SX4001・4002附土器実測図  
 PL.42 SX4003他出土土器実測図  
 PL.43 佐倉崩壊土土器実測図 (1)  
 PL.44 佐倉崩壊土土器実測図 (2)  
 PL.45 石壁実測図 (1)  
 PL.46 石壁実測図 (2)  
 PL.47 石壁実測図 (3)  
 PL.48 石器実測図 (4)  
 PL.49 石器実測図 (5)  
 PL.50 石器実測図 (6)  
 PL.51 石器実測図 (7)  
 PL.52 石器実測図 (8)  
 PL.53 石器実測図 (9)  
 PL.54 土器品実測図 (1)  
 PL.55 土器品実測図 (2)

# 写真図版目次

- PH.1 1 井邊道路と浜名湖 (南西から)  
 2 浜名地区放水渠 (南から)  
 PH.2 1 井邊道路 北部全景 (北から)  
 2 井邊道路 南部全景 (北から)  
 PH.3 1 SH4001・4003 (西から)  
 2 SH4005 (東から)  
 3 SH4006 (北から)  
 PH.4 1 SH4007 (東から)  
 2 SH4008 (東から)  
 3 SH4009 (東から)  
 PH.5 1 SH4012 (後田状況 (東から)  
 2 SH4013 (東から)  
 3 SH4015・4016 (西から)  
 PH.6 1 SH4017 (西から)  
 2 SH4018 後田状況 (東から)  
 3 SH4018 (西から)  
 PH.7 1 SH4019 桃山状況 (東から)  
 2 SH4019 (東から)  
 3 SH4020 (西から)
- PH.8 1 SH4022・4023 (北から)  
 2 SH4022～4025 (北から)  
 3 SH4022～4025 (北から)  
 PH.9 1 SH4022・4025 (西から)  
 2 SH4027 牧田状況 (西から)  
 3 SH4027 (西から)  
 PH.10 1 SH4027 (東から)  
 2 SH4030 (西から)  
 3 SH4031 (西から)  
 PH.11 1 SH4032 (東から)  
 2 SH4033 (北東から)  
 3 SH4034～4036 (北から)  
 PH.12 1 SH4037 検査状況 (西から)  
 2 SH4037 (西から)  
 3 SH4039 (東から)  
 PH.13 1 SK4002 亂層出土状況 (北から)  
 2 SK4003 亂層出土状況 (東から)  
 3 SK4004 亂層出土状況 (東から)

Ph.14	1 SK4006 亂物出土状況（東から）	Ph.17	昌土土器（1）
	2 SK4008 亂物出土状況（北東から）	Ph.18	出土土器（2）
	3 SK4009 亂物出土状況（南から）	Ph.19	出土土器（5）
Ph.15	1 SD4001（東から）	Ph.20	昌土土器（4）
	2 SD4002（東から）	Ph.21	昌土土器（5）
	3 SD4003（東から）	Ph.22	出土石器（1）
Ph.16	1 SX4003（北東から）	Ph.23	昌土石器（3）
	2 SX4004（南西から）	Ph.24	1 出土石器（3）
	3 SX4005（東から）		2 出土石器（4）

## 挿 図 目 次

Fig. 1	井通道路の位置	1	Fig. 6	那田川流域出土青銅製品集成	9
Fig. 2	グリッド設定期	3	Fig. 7	井通道路延辺道路分布図	10
Fig. 3	調査区の位置（1）	4	Fig. 8	西条江出土主要石器	23
Fig. 4	調査区の位置（2）	5	Fig. 9	堅穴建物集成	25
Fig. 5	井通道路の立地環境	7	Fig.10	四石炉の諸例	26

## 表 目 次

Tab. 1	井通道路調査体制	2	Tab. 5	出土石器觀察表	21
Tab. 2	那田川流域出土青銅製品一覧	8	Tab. 4	戸三河・瀬江笠石炉一覧	26

# 第1章 序論

## 第1節 調査経緯

井通遺跡は1993（平成5）年12月、静岡県引佐郡細江町（現静岡県浜松市北区細江町）広岡字井通において伊伊谷川の河川改修工事に伴う工事掘削により土器が出土したことから、初めて存在が明らかになった遺跡である。

この工事の契機となったのは、1974（昭和49）年7月7日における台風8号、いわゆる“七夕豪雨”である。細江町では連続降雨量299mm、時間最大降雨量73.5mmの激しい雨に見舞われ、町域中央部を流れる二級河川・都田川の流域では、死者1人、負傷者5人、全壊21戸、半壊31戸、流失5戸、床上浸水681戸、床下浸水1,678戸、流失田畠124.87ha、冠水田畠759.15ha、決壊道路506箇所、堤防決壊20箇所、山崩れ915箇所の記録的な被害が生じた。

この災害により静岡県土木部では、新堤防の建設、流路付け替え工事などを中心とする都田川の全面改修工事を計画し、1976（昭和51）年より着工した。隣接して都田川水系に属する井伊谷川の下流域においても整備計画が進められ、都田川との合流付近の新堤防建設に付随した河川幅を拡張工事が行われた。井通遺跡の存在は、その工事の最中に確認された。

そこで、静岡県浜松土木事務所と静岡県教育委員会・細江町教育委員会が協議した結果、1994（平成6）年から1995（平成7）年の間に計5次にわたり範囲確認調査、及び新堤防の工事に伴う事前調査を実施し、その成果に基づき1996（平成8）年より本調査が実施されることになった。調査は静岡県教育委員会文化課の指導のもとに細江町教育委員会の協力を得て、財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が行うこととなった。

本遺跡の古墳時代以降の現地調査は2002（平成14）年をもって完了している。計画的に配置された掘立柱建物や大甕等を検出し、多数の墨書き器・硯等の出土を確認した調査成果は、古代遠江国引佐郡家の郡律につながるものとして2007（平成19）年に報告書を刊行している（丸杉ほか2007）。本書は一連の事業に伴い、弥生時代の調査成果を報告するものである。



Fig.1 井通遺跡の位置

## 第2節 調査組織と調査経過

### 1 調査組織

現地調査は1996（平成8）年から2004（平成16）年まで9カ年にわたり実施された。古墳時代以降の調査成果については2007（平成19）年に報告書が刊行されている。

本書では、2001（平成13）年から2004（平成16）年にかけて行った、主に弥生時代の発掘調査成果を報告する。調査組織はTab.1の通りである。

### 2 調査方法

調査の進展を考慮して、調査区全体に10m四方のグリッドを設定した。グリッドは日本測地系に準拠し、グリッド名称は北西角のポイントに従って呼称した。全調査区は古墳時代調査終了後に埋め戻しを行ったため、その土壤は重機（バックホウ）を用いて除去（以下、盛土除去）した。重機のバケットには平爪を着装し、包含層の上面まで掘削した。包含層は人力で主に鍛筆を用いて掘り下げ、遺構検出に努めた。包含層及び遺構検出面、遺構埋土の土質は極めて似通っており、調査には大きな困難を伴った。そのため遺構検出に多くの時間を割かざるを得ず、今回の調査結果にも様々な影響を及ぼすこととなった。主要な遺構にはセクションベルトを設定するなどして埋土の把握に努めながら掘り下げた。

遺構の全体図は1/100で作成した。個々の遺構図については1/20を基本とし、出土状況が良好な遺構は1/10の図面を作成した。写真撮影は中型カメラを用い、フィルムにはモノクロ・カラーリバーサルの双方を使用した。また必要に応じてローリングタワー・ラジコンヘリコプターを用いた撮影を行った。作業工程記録写真には35mm判カメラで対応した。なお、現地調査と並行して基礎整理事業（出土遺物洗浄・注記等）を現地事務所にて進めた。

Tab.1 年度別調査部会体制

所長	副所長	常務理事兼 事務局長	常務理事兼 審査部長	部会員			監督	担当		
				次長	次長	次長				
				次長	次長	次長				
平成13年度	斎藤 忠	山下 真	栗山哲幸				山本広子	未定		
平成14年度	斎藤 忠	栗山英夫	栗田健嗣					鈴木典生		
平成15年度	斎藤 忠	氣田義夫	栗田雅彦					鈴木利生		
平成16年度	斎藤 忠	栗山英夫	平松公夫	鈴田英巳	鈴田英巳			鈴木耕生		
平成17年度	斎藤 忠		平松公夫	鈴木大二郎	鈴木大二郎		野崎尚紀	横川高史		
平成18年度	斎藤 忠		平松公夫	鈴木大二郎	鈴木大二郎			横川高史		
平成19年度	斎藤 忠	清水 哲	大場伸夫	鶴見保雄				豊川高史		

\*1 平成10年度より斎藤忠 \*2 平成19年度より事務局長より栗山英夫 \*3 平成16年度より斎藤忠

部長	次長	調査部会			調査専務員（◎は弥生時代調査の主たる担当者）	
		担当課長	監査長	監査員		
		第6	第7	監査員		
平成13年度	佐野道雄	栗野克己 及川 司	新藤修二	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		
平成14年度	山本昇平	栗野克己 佐野五十三	尾立順司	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		
平成15年度	山本昇平	栗野克己 佐野五十三	尾立順司	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		
平成16年度	山本昇平	栗野克己 佐野五十三	尾立順司	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		
平成17年度	石川泰久	栗野克己 佐野五十三	佐野五十三	◎森下俊明 丸川俊一郎		
平成18年度	石川泰久	佐野五十三 及川 司	及川 司	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		
平成19年度	佐野五十三	佐野五十三 及川 司	及川 司	◎藪本俊明 小川和彦 丸川俊一郎		

\*4 平成19年度より栗野修二  
\*5 平成19年度より事務局長

\*6 平成19年度より栗野修二  
\*7 平成19年度より西脇調査長

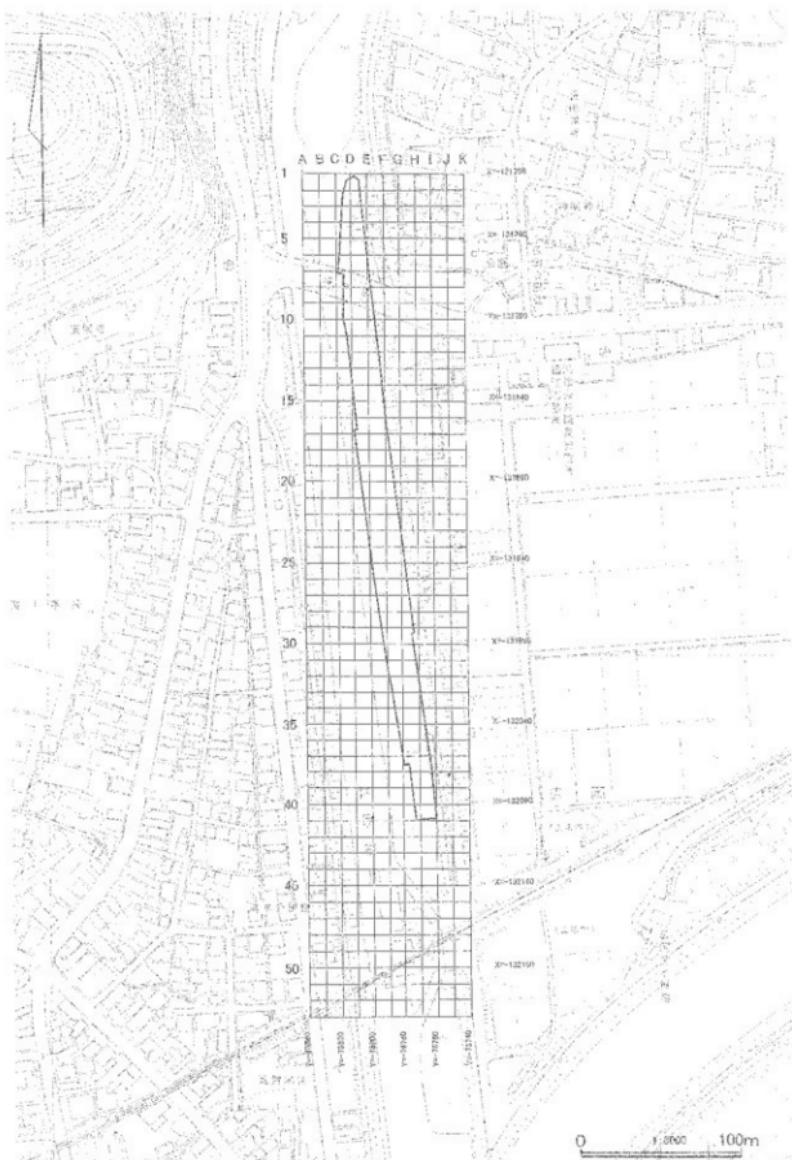


Fig.2 グリッド設定図

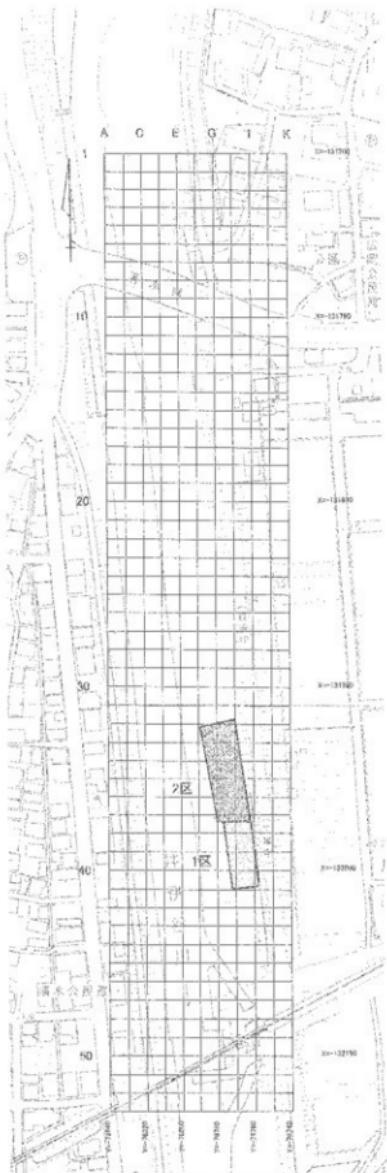


Fig.3 調査区の位置(1)

### 3 発掘調査の経過

#### 平成13年度

調査担当 ○森本 (◎は主たる調査担当)

調査期間 平成13年8月6日～平成14年1月17日

調査面積 220m<sup>2</sup>

調査対象 1区

弥生～古墳時代の調査は、調査区南端の区域から進めた。各種の制約から調査予定区西半で調査を中断することとなり、集落が展開する東半区は遺構検出作業のみとして、本格的調査は次年度に持ち越した。作業の概要は以下の通りである。

8月6日～ 基礎工

8月10日～ 盛土除去。この間、台風のため作業は度々中断する。

8月29日～ 遺構検出、実測、写真撮影等

9月3日 グリッド坑打設

9月20日 湘北市立恵美小学校 発掘体験

10月5日～12月2日 失墳跡の調査に重点を移したため、この  
期間では基礎整理等の作業を進めず

12月3日～ 調査再開。遺構検出、実測、写真撮影等

12月3日 三重大学名誉教授 八賀 香氏 現地来訪

1月17日 調査完了

#### 平成14年度

調査担当 ○森本、小川、岡部

調査期間 平成14年10月7日～平成15年3月31日

調査面積 1,500m<sup>2</sup>

調査対象 1区（東半面）、2区

前年度の調査で残された1区の東半面と2区の調査を進めた。多数の竪穴建物跡を検出し、溝・土坑等を確認した。

10月7日 調査開始

10月15日～ 遺構検出、遺構取り上げ、実測、写真撮影等

10月15日～ 盛土除去

10月25日～ 包含層掘り下げ

10月28・29日 グリッド坑打設

12月25日 湘西市立図書館小学校教諭1名、児童4名遺跡見学

2月7日 三重大学深教授、藤原和人氏 現地指導

2月25日 駆逐機関 現地公開。向坂廣二氏 現地指導

3月14日 爰知県内民間市民歴史公開講座 遺跡見学（約40名）

3月27日 村立写真撮影

3月31日 調査完了

## 平成15年度

調査担当 ◎藏本、小川

調査期間 平成15年4月9日～平成16年3月29日

調査面積 3,550m<sup>2</sup>

調査対象 3・4・5区

3・4・5区の調査を実施した。前年度に統計多数の建物跡の存在が予想されたが、弥生～古墳時代の大規模な旧河道が検出されたのみで、明確な居住施設は検出できなかった。

## (3区)

- 4月9日～ 盛土除去
- 4月28日～ 包含層掘り下げ
- 5月23日～ 遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等
- 5月13日 浜松市立初生小学校児童 体験学習
- 7月7～11日 降雨による冠水のためベルトコンベアー等が被害を受ける。復旧に時間を使やす
- 7月31日 稲江町立中川小学校教諭3名 遊歩見学
- 8月1日 空中写真測量
- 8月4日～ 焼め戻し

## (4区)

- 9月2日～ 盛土除去
- 9月12日～ 包含層掘り下げ
- 10月3日～ 遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等
- 10月14日 グリッド坑打設
- 12月11日 空中写真測量
- 12月15日～ 焼め戻し

## (5区)

- 1月6日～ 盛土除去
- 1月20日～ 包含層掘り下げ
- 1月20日～ 遺構検出、遺構掘り下げ、実測、写真撮影等
- 1月27日 グリッド坑打設 2月10日 空中写真測量
- 3月8日～ 焼め戻し
- 3月29日 調査完了

## 平成16年度

調査担当 ◎藏本、中村

調査期間 平成16年4月1日～平成16年10月29日

調査面積 3,080m<sup>2</sup>

調査対象 6区

6区は井通跡の北端部に相当する。遺構の遺存状況は良好で、堅穴建物跡、土坑・土器格墓等を検出した。検出に当たっては弥生時代遺構検出面の上面において遺構プランの把握を試みている。しかし、

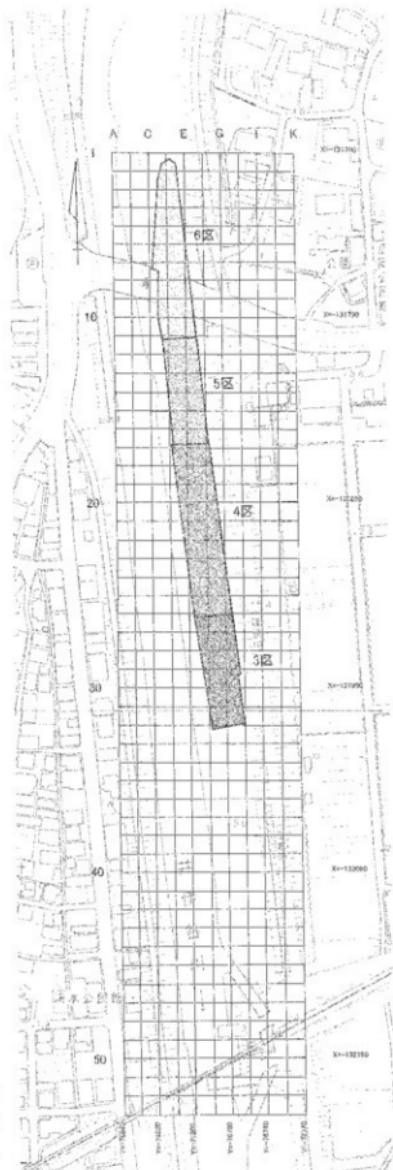


Fig.4 調査区の位置(2)

他の調査区と同じく包含層と遺構検出面・遺構埋土の縦別が困難であり、精査を繰り返すこととなった。多くの遺物が出土しており、撹乱内から出土しているが鳥形土器を確認している。

- 4月1日～ 準備工
- 4月5日～ 墓上除去
- 4月5日～ 包含層掘り下げ
- 4月8日～ 遺構検出、遺構振り下げ、実測、写真撮影等
- 4月22日 グリッド状打設
- 5月17日 浜松市立初生小学校 発掘体験
- 5月19日～ 包含層掘り下げ
- 6月14日 空中写真測量
- 3月10日～ 包含層掘り下げ
- 8月27日 浜松市立天竜中学校教諭1名 遊説見学
- 9月16日 静岡県立公園への現地公開
- 9月19日 説明会 兼説明会 約220名参加
- 10月18日 絶江町教育長他 約15名 遊説見学
- 10月29日 著作完了

#### 4 資料整理・報告書作成の経過

平成17年度 平成17年4月～平成18年3月（資料整理）◎蔵本

平成18年度 平成18年4月～平成18年10月（資料整理）◎蔵本

平成18年11月～平成19年3月（資料整理）中村

平成19年度 平成19年7月～平成20年3月（資料整理、報告書作成）丸杉、平塚

井通遺跡の現地調査は平成16年10月をもって終了し、平成17年4月から静岡県周智郡森町一宮に所在する財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所森現地事務所において資料整理を開始した。

それに先立ち資料整理を効率よく進めることができるよう、現地事務所において調査記録・出土遺物等の基礎整理を始めた。現地における発掘調査によって作成された図面・写真等は番号等を付加した上で分類し、台帳を作成して保管した。また出土した遺物は水洗し、遺物1点ずつに遺跡名・取り上げ番号等の注記を行った。

平成18年3月までは、遺物の接合など基礎的な作業を中心に進めた。その後、平成18年4月から平成18年10月まで静岡県島田市旭町に所在する財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所島田整理事務所において分類・仕分け・接合・復原と遺物実測を行った。また、石器の実測・トレース委託、理化学的分析の契約を締結した。平成18年11月から平成19年3月は、現地で作成した調査図面の整理を中心に遺構図版の作成に努めた。さらに遺物実測を本格的に開始し、石器は実測・トレース委託、理化学的分析の成果品検査を行った。

平成19年7月に再開された報告書作成作業では、遺物実測、各種版組・トレース、原稿執筆、編集作業を行った。遺物写真撮影は静岡県駿河市駿河区谷田に所在する財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所本部において行った。遺物や図面・写真是それぞれ台帳を作成し、必要に応じて検索することができるよう整理して収納した。報告書刊行とともに静岡県教育委員会文化課に資料の引き渡しを行い、作業を完了した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

井通遺跡が所在する静岡県引佐郡細江町（現静岡県浜松市北区細江町）は、静岡県西部の浜名湖北岸に位置する。面積約34.18km<sup>2</sup>、人口22,072人（平成17年12月現在）を擁し、浜松市北区役所が所在する浜名湖北岸の政治的中心都市となっている。細江町の年間平均気温は約15℃と温暖であり、隣接する浜名湖では1年を通してマリンスポーツが楽しめる穏やかな気候の地域である。

町域の北には三岳山（423.8m）を中心とした引佐山地、南は緩やかに遠州灘に向けて傾斜している平坦な三方原台地があり、この二つに挟まるように東西約10km、南北約2kmの沖積平野が広がっている。この平野部は古くから水田が広がる地域であり、現代においても広い範囲で耕作が営まれている。平野部中心には東から西へと都田川が大きく蛇行しながら流れ、流域の広範囲に自然堤防を築造させている。周囲の地勢に大きな影響を与えてきた都田川は、引佐山地北部にある鳴尾山を源流とする全長約50kmの二級河川である。天候によって流水量が大きく変化するため、かつて流域住民の生活は度々水害に脅かされていた。本遺跡調査の契機となったのは治水を目的とした河川改修事業であるが、同様の事業は戦前にも大規模に行われている。

都田川は、市街地東側において井伊谷川が合流し、浜名湖最奥部の支湖・引佐細江へと注ぐ。井通遺跡はこの合流地点において両川に挟まるよう立地している。



Fig.5 井通遺跡の立地地理図（国土地理院発行1：50,000地形図「浜松」に加筆）

## 第2節 歴史的環境

**縄文時代** 浜松市都田町から細江町に広がる都田川の沖積平野の周囲に発達した河岸段丘面において、縄文時代中期から晩期に営まれた遺跡が見られる。三方原台地北縁部の段丘上には岡の平遺跡、宿名遺跡が存在する。岡の平遺跡では縄文時代晩期後半の資料が報告されている（栗原2005）。引佐山地南麓では石岡遺跡、北に位置する引佐町では井伊谷遺跡、桶畠南遺跡において縄文時代中期の環状集落跡が、前原II・IV・V・VI遺跡では縄文時代中～後期にかけての住居跡が検出されている（太田1989）。都田川流域の沖積平野最東部の段丘上に位置する川山遺跡では打製石斧・磨製石斧・石器等の石器類が出土している。（向坂・辰巳1991）。向山遺跡では櫛式王式に比定される土器棺墓が確認されている（漆畑1982）。こうした遺跡の存在は沖積平野周辺の段丘部が中心であり、平野部における生活の痕跡はほとんど確認されていない。

**弥生時代** 前期から中期にかけての都田川下流域では、わずかに土器の出土が報告されるのみであり、その全体像は明らかではない。中期以降になると集落遺跡が自然堤防上に成立し始め、後期には数多く展開する。都田川流域においては、川久保船渡遺跡・森遺跡・茂塚遺跡・梶花遺跡・祝田遺跡・椿野遺跡などの集落跡が確認されている（辰巳1981b）。段丘面を中心としていた生活圏が水稻耕作の拡大とともに都田川流域や平野部へと広がる様子が看取できる。椿野遺跡では方形周溝墓が検出された他、銅鏡の出土数においても際立った存在である。段丘面においては向山遺跡や岡の平遺跡において集落が展開し、向山遺跡では磨製石器・岡の平遺跡では遠賀系土器が報告されている（漆畑1982、栗原2005）。

都田川流域は銅鐸・銅鏡などの青銅製品が数多く出土することで著名な地域である。静岡県西部は銅鐸分布圏の外縁部と指摘されており、これまでに約20点の銅鐸の出土が確認されている。さらに、破片・伝承まで含めると29点にのぼる。そのうち10点が前原・船渡・小野などの都田川流域であり、特に岡の平遺跡・宿名遺跡を入り口にもつ奥行き2.5kmほどの谷には、鹿ヶ谷銅鐸・竜巣七重り1号鐸・同2号鐸・不動平銅鐸・穴ノ谷銅鐸・滝峯才四郎谷銅鐸の6点の出土が確認されている。これらの銅鐸は、近畿式銅鐸4点・三造式銅鐸が5点である。銅鏡は椿野遺跡の9点をはじめ、川久保船渡遺跡1点、岡の平遺跡2点の出土が報告されている（足立・佐野1985、鈴木1986、栗原ほか1993）。

**古墳時代** 古墳時代中期以降は既に概要を記しているので（丸杉ほか2007）、ここでは古墳時代前期の

Tab.2 都田川流域出土青銅製品一覧

銅 鐸 名	種 別	開 着	遺 著 名	種 别	開 着		
穴ノ谷銅鐸	奥縦紐3式	近畿式	II C	1	椿野遺跡	銅鏡	9
滝峯七重り1号銅鏡	奥縦紐3式	近畿式	II A	2	椿野遺跡	銅鏡	10
不動平銅鐸	奥縦紐3式	近畿式	II A	3	椿野遺跡	銅鏡	11
滝峯才四郎谷銅鐸	奥縦紐3式	近畿式	II C	4	椿野遺跡	銅鏡	12
小野出掛	奥縦紐3式	三造式		5	岡の平遺跡	銅鏡	13
忍ヶ谷銅鐸	奥縦紐3式	三造式		6	岡の平遺跡	銅鏡	14
滝峯七重り2号銅鏡	奥縦紐3式	三造式		7	椿野芝苔	銅鏡（單孔銅鏡）	15
前原銅鐸	奥縦紐2式	三造式		8	椿野遺跡	銅鏡（單孔銅鏡）	16
船渡1号銅鐸	奥縦紐3式	三造式			椿野渡部	銅鏡（單孔銅鏡）	17
船渡2号銅鐸	奥縦紐3式	三造式			川久保船渡遺跡	銅鏡（單孔銅鏡）	18
					椿野遺跡	銅鏡（多孔銕）	19
					椿野遺跡	銅鏡（多孔銕）	20
					椿野遺跡	銅鏡	21

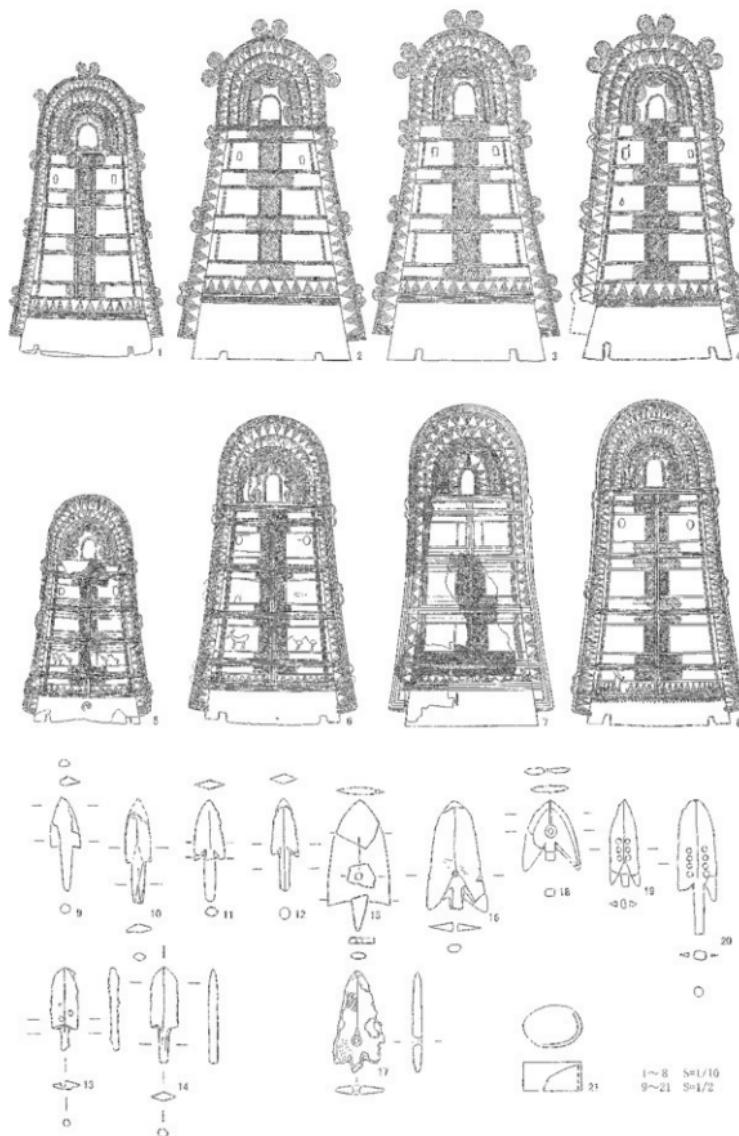


Fig.6 鹽田川流域出土實銅製品集成



1 非遼遺跡	16 永田遺跡	31 白岡遺跡	A 小舟指挥跡古土堆
2 川久保船渡遺跡	17 小野遺跡	32 正寺寺南遺跡	B 朝霞御陣原古土堆
3 川久保古墳	18 小野山遺跡	33 正寺寺北遺跡	C 素ヶ谷御陣原古土堆
4 真達跡	19 宮道遺跡	34 大加茂跡	D 沢原七曲り御陣原古土堆
5 五坪遺跡	20 老ヶ谷遺跡	35 北仲吉寺遺跡	E 不納平御陣原古土堆
6 桜花遺跡	21 四甲遺跡	36 井伊谷遺跡	F 六ノ台御陣原古土堆
7 岩手山遺跡	22 合之西跡	37 新鹿谷遺跡	G 沢原才四郎谷御陣原古土堆
8 御田遺跡	23 國の平遺跡	38 前原大森跡	
9 宮木遺跡	24 阿子ヶ谷足跡	39 大町水道跡	I 北岡大塚古墳
10 市場遺跡	25 天溝平遺跡	40 北柄遺跡	J 馬場平古墳
11 犬舟遺跡	26 半尾軒遺跡		K 馬場平3号墳
12 犬舟跡	27 石崎遺跡		L 谷津古墳
13 上原遺跡	28 「山」遺跡		M 鹿原ヶ谷古墳
14 宮廻遺跡	29 鶴野遺跡		
15 宇都御跡	30 片瀬遺跡		

Fig.7 井通遺跡周辺道路分布図(国土地理院電子図：1:25,000地形図「伊平」「氣賀」に加筆)

み記す。

この地域の古墳は井通遺跡の北に位置する井伊谷盆地周辺において、前期古墳の存在が確認されている。井伊谷盆地北東丘陵には前方後方墳である北岡大塚古墳が築造される(辰巳1981a・1996)。井伊谷盆地東側丘陵上には5世紀初頭の前方後円墳である馬場平古墳、5世紀前半頃の馬場平3号墳、さらに南に5世紀中葉頃の谷津古墳が継続的に築造されている(辰巳1983・1988)。都田川下流域では、井通遺跡南側の三方原台地上に阿子ヶ谷古墳が築造される。このほか岡の平遺跡・川久保船渡遺跡では同時期の集落が確認されている。しかし地域全体の様相は調査例が少なく明らかではない。

# 第3章 調査成果

## 第1節 調査概要

**基本層序** 井通遺跡の基本層序はすでに報告している（丸杉ほか2007）。ここでは古墳時代に関するこれまでの成果の他、本書に関連する事項・新たな知見を記す。

IV層は調査区全域に及ぶ堆積層であり、古墳時代中期～8世紀代にわたる遺物を包含している。調査においては構成粒子・色調などの差異からIV a～IV c層に大きく分層し、それぞれ第3調査面の遺物包含層と判断した。

第3調査面であるV a層は、調査区中央部に向かい標高が高まる。V a層上面では各種遺構が顕著に確認でき、古墳時代中期～8世紀にかけて安定した微高地を形成していたことが窺える。V b層は褐色粘質土であり、32～42グリッドに認められる。古墳時代前期～中期前半の遺物を含む。

VI層は暗褐色粘土であり調査区中央部を中心に認められ、VI層上面で遺構検出を行っている。VI層は粘性が非常に強く、V a層とは対照的に北側に向かい標高が緩やかに低くなることから、V a層とは異なる要因により形成されたものと捉えられる。

VII層は黒褐色粘質土で、構成粒子・遺物包含状況からVII a層とVII b層に細分した。VII a層上面が第3調査面となり、遺構検出を行っている。VII b層は粘性がやや強い傾向にある。

VIII層はVII層より砂質が強く、色調が暗い黒褐色粘質土である。VIII層上面で第3調査面の遺構検出を行っており、遺物・土坑など諸遺構が確認される。

弥生時代の遺物を包含する土層は、北部では黒褐色粘質土のⅩ層・南部では褐色粘質土のⅪ層である。これら下層のX a層上面で弥生時代～古墳時代前期の遺構検出を行っている。X a層は褐色粘質土であり、調査区北側から南側に向かい傾斜して堆積している。調査区中央部と44グリッド以南では、自然流路の影響で流出しているため、調査区北部・南部において確認される。調査区中央部では、青灰色粘土であるX b層の上面で遺構検出を行っている。

Ⅻ層上層は褐色粘質土のV b層であり、古墳時代前期の遺物包含層である。多数の上器が出土しており、第3調査面で出土した内行花文鏡片は時期的にV b層に帰属するものと推定される。

**遺跡の概要** 本書で報告する遺構には弥生時代中期後葉を中心としたものと、少数ではあるが古墳時代前期の遺構がある。

弥生時代の遺構は、竪穴建物・土坑・溝・自然流路・土器棺墓などを検出した。遺構群は古墳時代中期以降と同様、調査区北部と南部に集中して検出されている。周辺地形とこれまでの調査成果から勘案すると、調査区中央部の自然流路を挟み、北部は遺跡北側の丘陵部・南部は都田川微高地に展開したものとみられる。

竪穴建物は北部・南部ともには全域にわたり検出されている。溝は北部のS D-4001・4002、南部のS D-4003がやや規模も大きいが、帰属時期・位置関係などから機能は判然としない。土器棺墓は北部から主に検出されている。遺構群が示す集落の形成時期は、弥生時代中期後葉を中心としたものと捉えられる。

自然流路は調査区中央部と南部に確認されており、特に南部では弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により、弥生時代中期の多くの遺構が失われている。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は、調査区中央部・南部から多量に出土している。これらは遺構に伴うものではなく、包含層出土遺物として捉えられている。都田川微高地に立地する集落の中心域は、この時期に微高地の高位面に移動したものと推定される。

## 第2節 遺構

### 1 北部遺構群

#### (1) 壁穴建物

S H4001

C・D-4・5グリッドに位置する壁穴建物であるが、建物西側は古墳時代中期以降の自然流路により失われている。平面形は隅丸長方形と推定でき、短軸は5.4mである。主柱穴は判然としない。壁溝は南側を除いて確認されており、中央部東側で焼土が検出されている。

S H4002・4003・4004

S H4002・4003・4004はC・D-4・5グリッドに位置している。遺構検出状況・古墳時代中期以降の自然流路やS D4001により失われた部分も多いため、建物の詳細を知り得ない。S H4002・4003は壁溝が検出されたことにより平面形が隅丸長方形と推定でき、S H4003は短軸5.5mの規模である。柱穴は不明瞭であり、焼土が検出されているが、いずれの建物に帰属するか判然としない。S H4004はわずかに壁溝を確認したのみで、規模など壁穴建物にかかる諸属性を提示することはできない。

S H4005

D-6グリッドに位置する壁穴建物であるが、建物東側は調査区外である。平面形は隅丸長方形を呈するとみられる。検出状況から判断して、建物の全体規模を明確に窺うことができない。炉の痕跡が中央部に分散して確認されている。

S H4006

C・D-5・6グリッドに位置する。壁溝の一部を検出したことによって存在を確認した壁穴建物である。平面形は隅丸長方形と推定されるが、全体の規模は判然としない。切り合い関係からS H4005が新しいと判断できる。主柱穴・炉跡は不明瞭である。

S H4007

C・D-8・9グリッドに位置する長軸6.9m・短軸5.6mの隅丸長方形を呈する壁穴建物である。建物南東側はS D4002により失われている。主柱穴は不明瞭であり、貼床は認められていない。建物の四周には壁溝が明瞭に巡る。炉の痕跡とみられる焼土が中央部西側2箇所に分散して確認されている。

S H4008・4009・4010

C・D-6・7グリッドに位置する壁穴建物である。S H4010→S H4009→S H4008の前後関係と判断したが、詳細な特徴を窺うことは難しい。

S H4008は長軸推定6.0m・短軸4.5mの隅丸長方形を呈する壁穴建物である。壁溝は全周しており、中央部には焼土が確認されている。S H4009は長軸8.6m、平面形は隅丸長方形と推定される壁穴建物である。南東部・南西部で壁溝が複数巡る部分があり、建替えがあった可能性がある。中央部西側には炉とみられる位置に素が設置され、南東部には白色粘土が検出されている。S H4010は北半部が礫化により失われているが、壁溝が検出されたために壁穴建物と認定されている。平面形は隅丸長方形と考えられ、長軸は5.6mである。いずれの建物も検出状況からは主柱穴が判然としない。

S H4011

D-3グリッドに位置するが、壁溝が確認されたのみで、規模など壁穴建物にかかる諸属性を明確に提示することはできない。柱穴・焼土を検出しているが、建物に帰属するものであるか明確ではない。

S H4012

C-7グリッドに位置しており、壁溝の検出によって存在を確認できた壁穴建物である。建物の大半は古墳時代中期以降の自然流路により失われたものと捉えられている。壁溝が建物東側に巡存している

ものの、規模・柱穴など建物の諸属性は明確ではない。

#### S H4013

C・D-7・8グリッドに位置する長軸5.7m・短軸4.5mの隅丸長方形を呈する竪穴建物である。主柱穴は判然としない。壁溝は全周するが、一部で重複する部分があり、建替えがあった可能性がある。中央部西側で焼土と甕が検出されており、石置炉と考えられる。

#### S H4014・4015・4016

S H4016→S H4015→S H4014へと変遷したものとみられるが、検出状況から断定することは困難である。3軒とも西側を弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われているため、規模の詳細を明確に提示できない。いずれも平面形が隅丸長方形を呈すると推定される。

S H4014は短軸4.4m、壁溝は南辺・東辺の一部に確認されている。S H4015は短軸5.2m、壁溝が二重に巡る部分があるため、建替えがあった可能性を指摘できる。建物中央部で焼土が広範囲に散在して検出されている。S H4016は短軸3.4m、壁溝は西辺を除き検出されている。いずれの遺物も主柱穴を判断することができない。

### (2) 土 坑

#### S K4001

D-3グリッドに位置する土坑である。平面形は円形を呈するが、やや不定形である。規模は直径18m程である。遺物は土坑西側で散在して出土している。

#### S K4002

D-3グリッドに位置する平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸2.8m・短軸2.0mである。遺物は土坑北側を中心に散在して出土している。

#### S K4003

C-7グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸円形を呈するが、北西部は造構の輪郭を捉えきれていない可能性を指摘できる。規模は長軸1.8m・短軸1.5mである。

#### S K4004

D-8グリッドに位置する平面形が長軸円形を呈する土坑である。規模は長軸1.9m・短軸1.3mである。土坑東側を中心に遺物が多く出土している。

### (3) 溝

#### S D4001

C・D-4グリッドにおいて検出された溝である。検出された規模は長さ約8.0m・幅約2.0mである。溝の底面は比較的幅広いため、横断面は逆台形状を呈する。切り合い関係からは、S H4002・4004より新しいことが判明する。

#### S D4002

C-E-8・9グリッドに位置する溝である。西側は弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われたものと捉えられており、検出できた規模は長さ約14.2m・幅約2.0mである。切り合い関係から、S H4007よりも新しいことが判明する。

### (4) 土器棺墓

#### S X4001

D-1・2グリッドに位置する。土坑は不整形な円形を呈し、規模は0.6m程である。頭部から肩部ま

での壺痕片以外出土遺物がなく土坑も小規模であることから、別の性格である可能性が高い。

#### S X 4002

C - 7 グリッドに位置する土器棺墓である。土坑は不整形な長楕円形を呈し、規模は長軸1.0m・短軸0.9m程である。土器棺の身は壺を使用しており、壺の口縁部側を北東に向かって設置されていた。壺の側部付近にやや扁平な石材が検出されている。

#### S X 4003

C - 7 グリッドに位置している。土坑は不整形な円形であり、規模は直径0.7m程である。土器棺の身は壺を使用しており、やや南西方向に傾けて設置されたものと推定できる。

#### S X 4004

D - 8 グリッドに位置する土器棺墓である。土坑は西側のみ検出できた。土器棺の身は壺を使用しており、口縁部側を東側に向かって設置されていた。土器棺の蓋も壺を使用している。

#### S X 4005

D - 9 グリッドに位置している。土坑は不整形な円形を呈し、直径0.7m程である。口縁部側を南東に向け横位に設置されており、出土した壺を土器棺の身として使用したものと捉えられている。

## 2 南部遺構群

### (1) 壺穴建物

#### S H 4017

F - 33・34グリッドに位置する長軸6.7m・短軸4.4mの隅丸長方形を呈する壺穴建物である。床面には貼床は認められなかった。主柱穴と捉えられる位置に柱穴は検出されているが、やや不明瞭である。壁溝は南辺の一部を除き存在する。炉の痕跡は分散して確認されている。

#### S H 4018

現地調査ではS H 4019と重複し、切り合ひ関係からS H 4018が新しいと判断している。しかし、炭化材検出状況・遺物出土状況・出土土器から不自然な点を否定できないが、ここでは現地調査段階の認識のまま報告する。

F - G - 33・34グリッドに位置する長軸6.7m・短軸5.4mの隅丸長方形を呈する壺穴建物である。床面に貼床は認められず、柱穴も不明瞭である。建物北西部の柱穴からは柱根が検出されたが、対応する柱穴は判然としない。壁溝は西辺の一部を除き存在する。中央やや東側で炉縁に砾が検出されており、石置炉と捉えられる。

#### S H 4019

G - 34グリッドに位置する長軸5.2m・短軸3.6mの隅丸長方形を呈する壺穴建物である。主柱穴は判然としない。中央やや西側で石置炉が検出されている。

前述したように、本来はS H 4019がS H 4018よりも新しいと判断できる。

#### S H 4020

F - G - 34グリッドに位置する長軸5.3m・短軸4.2mのやや不整形な隅丸長方形を呈する壺穴建物である。柱穴は不明瞭であり、壁溝は検出されていない。中央やや西側で焼土が検出されている。

#### S H 4021

現地調査における所見ではG - 33・34グリッドに位置し、柱穴・壁溝の一部を検出したとされている。しかし、壺穴建物にかかる諸属性・切り合ひ関係を明確に提示することに躊躇せざるを得ない。

#### S H 4022

F - 34・35グリッドに位置し、建物主軸は南北方向を採用するものと捉えられている。柱穴は不明瞭

であり、壁溝は検出されていない。焼土が建物北側の壁際で検出されているが、SH4022に伴うものかは判断としない。

#### SH4023・4024・4025

F・G-34・35グリッドに位置している。切り合い関係からSH4025→SH4024→SH4023へと変遷したものと判断したが、対応関係を明確に提示できる調査資料は得られていない。

SH4023は東半部分のみが検出されたものと推定されている。SH4023に帰属する柱穴・焼土は明確に捉えられない。壁溝が複数検出されており、壁替えが行われたとも考えられる。SH4024は長軸推定7.0m・短軸5.6mの隅丸長方形を呈する堅穴建物である。主柱穴は判然とせず、炉の痕跡も確認されていない。建物四周には壁溝が明瞭に巡る。SH4025は壁溝の検出によって確認できた堅穴建物である。この他、壁溝とみられる遺構を検出しているが、現地調査段階で得られた成果からは建物の存在を復原できない。

#### SH4026

G-34・35グリッドに位置しており、東半は調査区外である。やや不整形な堅穴建物で、明確な柱穴・炉跡は検出されていない。南辺の一部に壁溝が確認されている。

#### SH4027

F・G-35・36グリッドに位置する長軸6.7m・短軸4.9mの隅丸長方形を呈する堅穴建物である。主柱穴は判然としない。壁溝は東辺で一部途切れる箇所が認められている。建物東辺では壁溝が二重に巡る部分が検出されている。炉の痕跡は中央部に分散して確認されている。

建物の外縁、及び内部にも壁溝が検出されており、別の堅穴建物が存在する可能性がある。

#### SH4028・4029

F-35・36グリッドに位置する堅穴建物と捉えられており、西半は調査区外である。検出状況から、SH4028はSH4027よりも古いものと考えられている。SH4028からは壁溝が複数検出されているが、建替えの可能性、若しくは複数の建物の存在を確認できないため、規模等を判断できない。

SH4029もわずかに壁溝を確認したのみで、諸属性を明確に提示できない。

#### SH4030

G-35グリッドに位置する堅穴建物とみられているが、わずかに壁溝を確認したのみで、規模など堅穴建物にかかる諸属性を明確に提示することはできない。壁溝は複数検出されているが、建物との対応関係・切り合い関係などは捉えきれていない。柱穴は不明瞭であり、炉の痕跡も確認されていない。

#### SH4031

G・H-36グリッドに位置している。建物西半のみ検出されており、短軸4.9mの規模である。柱穴は判然とせず、焼土も検出されていない。壁溝は北辺中央部が途切れているが、明瞭に確認されている。

#### SH4032・4033

F・G-36・37グリッドに位置しており、2軒とも隅丸長方形を呈するものと推定されている。壁溝の検出によって存在が確認された堅穴建物であるため、建物の諸属性を明確に示すのは困難である。SH4032・4033とともに柱穴は不明瞭である。SH4032では焼土が検出されている。

#### SH4034・4035・4036

G・H-37・38グリッドに位置する堅穴建物と推定されているが、調査結果から建物の規模等を正確に報告することは躊躇せざるを得ない。壁溝の形状から推測すると、3軒とも隅丸長方形を呈するものと考えられる。柱穴はいずれも不明瞭である。

#### SH4037

G-38グリッドに位置する長軸7.3m・短軸4.4mの隅丸長方形を呈する堅穴建物である。床面には貼床

は認められなかった。主柱穴はやや不揃いであり、規模も他の柱穴との差は見出しづらい。壁溝は全周している。焼土が建物内で散在して検出されている。

#### S H4038

G - 37・38グリッドに位置するが、わずかに壁溝とみられる造構と焼土を確認したのみで建物と認定された造営である。ここでは竪穴建物として報告するが、確実に諸属性を提示できない。

#### S H4039

G・H - 38・39グリッドに位置する長軸5.3m・短軸2.8mの圓丸長方形を呈する竪穴建物である。柱穴は明瞭ではない。壁溝は北・東・西辺の一部に検出されており、焼土は中央北側で確認されている。

#### S H4040

明瞭な壁溝の検出により存在が推定されたG - 39グリッドに位置する竪穴建物である。しかし、柱穴は不明瞭であり、焼土も検出されていない。

### (2) 土 坑

#### S K4005

F - 32・33グリッドに位置する平面形が長椭円形を呈する土坑である。規模は長軸2.7m・短軸1.0mである。遺物は土坑北側を中心に出土している。

#### S K4006

G - 38グリッドに位置する平面形がやや不定形な土坑である。検出された規模は長軸3.0m・短軸1.6mである。

#### S K4007

G - 38・39グリッドに位置する平面形が長椭円形を呈する土坑である。検出された規模は長軸2.9m・短軸1.5mである。遺物は土坑内から散在して出土している。

#### S K4008

H - 39グリッドに位置する平面形がやや不定形な土坑である。検出された規模は長軸1.6m・短軸1.2mである。土坑内から発掘がやや多く出土している。

### (3) 溝

#### S D4003

F・G - 35・36グリッドに位置する溝である。西側は弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路により失われたものと捉えられている。検出できた規模は長さ約15.8m・幅約1.7mである。出土土器として図示できる資料はなく、時期認定に明確な根拠をもちえない。出土した土器頸片と周辺遺構から判断して、弥生時代中期後半でも新しい時期と考えたい。

## 3 自然流路

#### S R4001

調査区中央部、及び南部において自然流路を検出したが、本来は同一の可能性があるため、SR4001として一括した。断片的な調査資料からは造構の詳細な特徴を捉えきれないが、大きく蛇行する流路であることから現在の造跡西側を流れる井伊谷川と考えられる。流路は浸食作用を受けて形成され、氾濫による埋没や再浸食・新たな流路形成を繰り返していたと推定される。出土土器として図示できる資料はないが、弥生時代中期～古墳時代前期頃の土器が出土している。

### 第3節 遺物

#### 1 土器

出土した土器は弥生時代中期が中心である。以下からは集落変遷の指標となる主要な遺構の出土土器に重点をおいて報告する。出土遺物が少なく、帰属時期を明確に捉えられない遺構については割愛した。北部堅穴跡出土土器 S H 4001からは1の広口壺、2の台付壺の脚台部が出土している。3の壺はS H 4007、4の台付壺脚台部と5の壺はS H 4009から出土している。S H 4013からは6の受口壺、7の壺が出土している。8は口縁部が突帯状となる壺であり、S H 4015より出土している。S H 4016からは9の広口壺、10の鉢が出土している。10は口縁部に2個一対の浮文が遺存部分では5箇所、復原すると6箇所付するものと推定される。

S H 4018出土土器 S H 4018からは11～21に図示した土器が出土している。11～19は壺であり、11は受口頸壺、12は受口壺である。13～18は広口壺と捉えられ、口縁端部に面をもつものが多い。19の細頸壺は波状文を鞍方向に垂下させて施文されている。20は口縁端部に面をもち、刻目が施される壺である。21は無頸壺に類似するが、器形から鉢と推定される。

S H 4019出土土器 S H 4019からは22～34に示した土器が出土している。22は広口壺、23は口縁部から頸部が欠損しているが細頸壺とみられる。24の細頸壺は口縁部が浅い受口状となる。25～27の壺は胴部の張りが弱く、口縁部が緩やかに開いているため台付壺の可能性がある。28は台付壺の脚台部である。29は口縁端部に面をもち、刻目が施される壺である。30・31は体部が内側して開き口縁部が緩やかに外反する高杯である。32は胴部が張り、口縁部が短く外反する鉢である。33・34も鉢であるが口縁部が外反する33と、直線的に聞く34がある。

S H 4020出土土器 S H 4020からは35～45の上器が出土している。35は広口壺、36は細頸壺である。37・38はいずれも広口壺の胴部・底部と推定される。39～45は壺である。口縁部の形態により、突帯状の突出をもつ39～41・44・45、外下方に拡張される42、端面をもつ43に分類できる。

S H 4026出土土器 46～49がS H 4026から出土した土器である。46は広口壺、47・48は細頸壺である。49の壺は、口縁部が突帯状に突出している。

S H 4037出土土器 S H 4037からは53～64に図示した土器が出土している。53は細頸壺、54・55は広口壺である。56・57の壺は腰部がやや張る形態である。58は壺底部であり、56・57と同様に腰部が張る形態と推定される。59は比較的高い脚台部をもつ台付壺である。60～64はいずれも口縁部が緩やかに外反し、端部に刻目を施す壺であるが、台付壺が含まれる可能性がある。

南部堅穴跡出土土器 50はS H 4031、51・52はS H 4032から出土している。いずれも壺であり、口縁部には突帯状に突出する50、外下方に拡張される51、丸く収める52がみられる。

S K 4006出土土器 S K 4006からの出土土器は73～85である。73～76は壺肩部片、77は細頸壺、78～81は広口壺である。82は口縁部が受口状となり、外側に棒状浮文・端部に刺突を施した広口壺である。83は口縁部を丸く収め、内側に断続的な短い横線文を施す壺である。84・85の壺・口縁部は、端部が外下方に大きく拡張されている。

土坑出土土器 S K 4002から65の広口壺、66・67の壺及び68の台付壺脚台部が出土している。69・70はS K 4004から出土した壺、71・72はS K 4005から出土した壺である。71・72はいずれも口縁部が突帯状に突出する。86はS K 4008、87はS K 4007から出土した壺である。88～90はS K 4009から出土した土器であり、88は広口壺、89・90は口縁部が丸く収められ刻目を施す壺である。91はS K 4011、92はS K 4012から出土した受口状口縁となる壺である。92は口縁部内面に有刺棒状浮文・端面に刺突を施しており、履

曲部の外面が頸部へとのびるため、屈曲部の内面が突帯状に残る特異な形態である。93はS K 4015から出土した広口壺、94はS K 4010から出土した長い頸部が特徴の細頸壺である。95はS K 4014から出土しており、腰部が強く張り算盤玉状を呈していることから細頸壺と考えられる。96はS K 4013から出土した鉢であるが、口縁部に複合縞文を施し、相対する位置に2個一対の浮文が付くと推定される。片口となっており、これに対する位置の浮文には横方向の穿孔がみられる。

S D 4002出土土器 S D 4002から出土した土器は97~100に示した。97は腹部が強く張り算盤玉状を呈する壺である。文様は区画沈線とやや乱れた斜格子文が施されている。98~100の壺はいずれも口縁部が丸く求められ、刻目を施されている。

S X 4001~4005土器棺 101はS X 4001の単純口縁の細頸壺である。文様は施されておらず、表面にはハケ隔離が顕著に認められる。調査段階では土器棺と捉えられているが、積極的に評価できない。

102はS X 4002における土器棺の身として使用された壺である。口縁部は受口状となり、端部内面には押圧を加え、屈折部には押引を施す。頸部には3本一単位のヘラ綫文と区画沈線、下位に速渦文を施す。肩部には横縞線文に山形文が施されている。山形文中央部に継位の樹波状文が1箇所確認される。

103はS X 4003における土器棺の身として使用された壺である。口縁部は欠損しているが、頸部が強く張る形態であることから広口壺と推定される。肩部には無文帶を挟んで横縞線文と樹波状文の文様帶が施されている。文様帶には区画沈線が認められない。

104はS X 4004の土器棺として使用されたと捉えられる壺である。

105はS X 4005の土器棺に使用されたとされる細頸壺である。頸部には羽状文を挟んでやや幅広の沈線を施す。体部には条痕調窓が観察できる。形態・文様構成などから横田式の細頸壺と判断できる。

包含層出土土器 106~108は弥生時代中期の包含層出土土器を示した。106は口縁部に凹線文、体部には旗状文・波状文・直線文が施された細頸壺である。107は口縁部に斜格子文が施された受口壺、108は台付壺の脚台部である。

109~126は調査区北部・中央部の包含層出土土器である。

109は口縁部がやや内寄傾向を示す広口壺である。110は柳ヶ坪壺型、111~112は直口壺である。112は内寄傾向が強い、矧い口縁部をもち、瓢壺の系統を引くものとみられる。

113・114は浅い楕型を呈する杯部をもつ小型高杯、115は杯部に弱い稜線をもつ有稜高杯である。116~119は小型器台である。116は受部と脚部が貫通しない、117~119は貫通する小型の器台である。受部は屈曲して立ち上がる116と漏斗状の118・119がみられ、特に119は受部が深い形態である。120~123は鉢である。いずれも扁平な形態であり、底部は丸底である。口縁部には屈曲して大きく開く120と口縁部が2段に屈曲する121~123がみられるが、近畿地方における特徴に比べ屈曲は小さい。

124~126は壺である。124・125はS字状に屈曲する口縁部をもち、脚台部を有するS字壺である。126は外反する口縁部に体部外面に右上がりのタキが施されており、形態・調整の諸特徴から畿内の影響を強く受けた成立した壺と捉えられる。鍛入品の可能性があるが、製作地を限定することは困難である。

127~140は調査区南部包含層出土土器である。出土土器の殆どは褐色粘質土のV b層であり、古墳時代前期の遺物包含層と捉えられる。

127は二重口縁壺、128は広口壺であるが口縁端部を折り返している。

129~131は小型高杯、132は柱状をなす脚部が屈折して外反する屈折脚高杯である。133は受部と脚部が貫通する小型器台、134は内寄する受部をもち脚部が直線的に広がる小型器台である。135~137は鉢である。135・136は平底の鉢、137は扁平な形態であり口縁部は屈曲して大きく開く。

138~140は壺である。138はく字状に屈曲する単純口縁の壺であり、肩部には沈線が施されているが、表現内容は判然としない。139は形態的特徴から北陸系の壺と判断できる。140はS字壺である。

141は大型の広口壺である。口縁端部は折り返し、外面の面取りが明瞭である。球形の体部には縱方向のミガキが施される。遺存した部分では口縁部・口縁部・肩部に焼成前に穿孔が確認できるが、配量は判然としない。色調は浅黄褐色であり、胎土に細かい白色粒子が多量に含まれる。これら諸属性は畿河地域に特徴的であり、一般的に「大廓式」と呼称されるが検討の余地がある。なお、141は調査区北部における古墳時代中期以降の各層位に混入していたが、時期的に帰属する本書で報告することとした。

## 2 石器

**打製石斧**（142～155）打製石斧は142がS D4002から出土した以外は、全て包含層より出土している。石材は142が角閃岩、143・153がホルンフェルス以外は緑色岩を使用している。大型の154・155は短筒形の形態をしており、石製耕作具としての石鋤と捉えられる可能性がある。

**打製石鎌**（156～206）156～159は凹基無茎鎌。156は黒曜石、157・158は下呂石、159はチャートを使用している。出土した石鎌の殆どは有茎式であり、包含層から出土したものが多い。石材はチャートと安山岩が多く、黒曜石・下呂石・凝灰岩・流紋岩などが少數ではあるが使用されている。194・195はS H4018より出土しており、最大長・最大幅の比率は近似した数値を示す安山岩製の石鎌である。S H4018からは安山岩製の192も出土している。

196～206は整形段落の石鎌未製品と考えられ、使用される石材は156～195と同様の傾向を示す。しかし、206は別の機能・用途の可能性がある。

**スクレイバー**（207～209）207・209は包含層より出土した緑色片岩製、208はS K4016より出土し、石材には凝灰岩を使用している。208は明瞭な刃部を有するが、207・209は若干の調整を加えたのみである。

**石錐**（210～212）3点を図示したが欠損部分が多く、形態的にもやや疑問がある。石材には210・211がチャート、212が凝灰岩を使用している。

**石匙**（213）頭部につまみ状の形態を有するが、突起は顯著ではない。S H4018から出土しており、石材には流紋岩を使用している。

**磨製剥片石器**（214）包含層より出土しており、緑色岩製である。静岡県内では大山I遺跡（舞阪町1995）、鶴松遺跡（袋井市1993）などで類例がある。顕微鏡観察の結果では、刃部以外に強い光沢が認められる。機能は判然としないが、何らかの植物を対象とした取穫具（賛1995）・砥石（山田ほか1992）である可能性が指摘されている。

**大型始刃石斧**（215・216）215・216は変玄武岩製。215はS H4039、216は包含層から出土している。ともに破損品であり、刃部周辺部分が出土している。

**柱状片刃石斧**（217～219）いずれも小型の柱状片刃石斧であり、包含層より出土している。

**扁平片刃石斧**（220～225）220は包含層、221はS H4009より出土した。欠損しているが、形状から扁平片刃石斧とみられる。222はS H4005、223は包含層より出土した緑色片岩製扁平片刃石斧である。224は包含層、225はS H4008より出土した。石材は224が角閃岩、225が緑色片岩を使用している。

**磨製石鎌**（226～233）226～228は無茎式磨製石鎌。226はS K4013から出土したホルンフェルス製平基式磨製石鎌。穿孔を片面で貫通しないままである。227・228は包含層より出土した凹基式の有孔磨製石鎌。黒色片岩製であり、穿孔は両側から施されている。228は基部の抉入が発達している。

229・230は有茎式磨製石鎌。229はS H4016より出土した凸基式庭製石鎌。石材は黒色片岩を使用している。230は緑色岩製である。

231は流紋岩製であるが破損が著しい。232・233の石材はともに黒色片岩を使用しており、未製品の可能性がある。

**磨製剥離率**（234）緑色片岩製であり、包含層より出土している。直徑は48mm、厚さは7mmの扁平な形

状を呈し、穿孔部は直径11mmである。

勾 玉 (235・236) 235はS K 4017、236は包含層より出土したが、混入したものと捉えられる。

讃 石 (237・238) ともにS K 4004より出土しており、石材は凝灰岩質砂岩を使用している。

砾 石 (239~244) 石材は239・240・244が凝灰岩質砂岩であり、泥質凝灰岩 (241) ・緑色岩 (242) ・砂岩 (243) が使用されている。

### 3 土製品

台盤状土製品 台盤状土製品については、森泰延氏の分類案（森1996・1998）に従い報告する。

245~256は森分類・A類であり、形状は厚い円盤状である。245はS H 4018、246~249はS H 4020、250はS H 4037、251・252はS K 4006から出土している。253~256は調査区南部包含層から出土している。

257~265は森分類・C類と捉えられ、脚軸を呈するものである。しかし、胸部の器壁が厚く低い257~259の資料も確認できる。これら一群は森分類・B類の片面をやや脚状に意識したものと、森分類・C類との過渡的状況を示すものと考えられる。257はS H 4006、258はS H 4020、259はS K 4006、260はS H 4034より出土している。261~265は調査区南部包含層から出土しており、ここで図示しえなかった資料も含め台盤状土製品は調査区南部に分布が集中している。

土製轡鉢車 266・267は土製轡鉢車である。266は大部分が欠損しているが、267は貫通孔が一部確認できる。266はS D 4003、267は調査区南部包含層より出土している。

鳥形土器 268は調査区北部包含層から出土した鳥形土器である。土器上部に鳥の頭部を表現しており、嘴は粘土塊の貼付・目は竹青状の工具で表現している。腹部以下を完全に欠損するものの口縁部の形状から細頸壺と考えられる。壺頸部には輪描横線文に刺突列点文が施されている。

帰属時期は周辺の検出遺構・出土遺物から弥生時代中期後葉と推定される。愛知県朝日遺跡では、鳥の頭部を除く胴・尾部が表現された鳥形土器が出土している。当資料の機能・性格、器形自体が鳥形である土器との差異については判然としない。

Tab.3 出土石器觀察表

番号	遺跡名	器種	石種	長	幅	厚さ(cm)	重量(g)	測定者
142	SD4002	打製石斧	角閃岩	(7.90)	5.80	1.40	98.9	
143	包含層(北部)	打製石斧	ホルンフェルス	8.75	4.30	0.95	39.6	
144	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	9.20	4.70	1.20	75.5	
145	包含層(南部)	打製石斧	綠色岩	(9.40)	5.60	0.95	60.7	
146	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	9.60	4.70	1.30	76.4	
147	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	10.30	4.50	1.45	107.5	
148	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	10.60	4.90	1.85	125.1	
149	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	10.60	4.40	2.30	146.0	
150	包含層(南部)	打製石斧	綠色岩	11.90	5.40	1.80	143.4	
151	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	11.50	4.10	1.40	85.3	
152	包含層(北部)	打製石斧	綠色岩	12.10	4.60	1.50	100.4	
153	包含層(北部)	打製石斧	ホルンフェルス	(13.30)	5.60	1.70	153.3	
154	包含層(北部)	石錐	綠色岩	20.75	5.70	3.00	431.9	
155	包含層(南部)	石錐	綠色岩	19.40	7.65	2.50	547.9	
156	包含層(北部)	石錐	黑曜石	1.60	1.38	0.27	0.4	
157	包含層(中央部)	石錐	下昌石	1.90	1.30	0.40	0.7	
158	包含層(北部)	石錐	下昌石	2.20	2.05	0.50	1.3	
159	包含層(北部)	石錐	チャート	2.00	1.20	0.45	1.1	
160	SK4001	石錐	チャート	1.85	1.45	0.42	1.0	
161	SH4013	石錐	チャート	(1.90)	1.75	0.35	1.2	
162	包含層(北部)	石錐	チャート	2.00	1.68	0.45	0.8	
163	包含層(北部)	石錐	F呂石	(2.03)	1.32	0.40	1.6	
164	SK4002	石錐	安山岩	(2.05)	1.50	0.38	1.0	
165	SK4001	石錐	安山岩	(2.05)	1.78	0.55	1.9	
166	包含層(北部)	石錐	チャート	2.10	1.49	0.55	1.3	
167	包含層(北部)	石錐	チャート	(2.20)	1.70	0.73	2.0	
168	SH4006	石錐	チャート	2.20	1.80	0.60	1.9	
169	包含層(北部)	石錐	チャート	2.55	1.50	0.50	1.5	
170	SH4007	石錐	チャート	(2.58)	1.65	0.60	2.0	
171	SH4003	石錐	チャート	2.80	1.30	0.50	1.5	
172	包含層(北部)	石錐	滑石凝灰岩	2.85	1.40	0.55	1.8	
173	包含層(北部)	石錐	滑石凝灰岩	2.90	1.70	0.50	1.5	
174	SD4003	石錐	安山岩	(3.00)	1.65	0.60	1.8	
175	包含層(南部)	石錐	流紋岩	(3.00)	1.90	0.68	2.6	
176	包含層(北部)	石錐	チャート	(3.02)	1.50	0.60	2.2	
177	SH4001	石錐	チャート	3.95	1.45	0.60	1.9	
178	包含層(北部)	石錐	チャート	3.10	1.55	0.70	2.4	
179	包含層(南部)	石錐	安山岩	3.20	1.30	0.55	2.1	
180	SK4002	石錐	安山岩	(3.20)	1.28	0.50	2.2	
181	包含層(北部)	石錐	チャート	3.35	2.18	0.70	4.9	未製品?
182	包含層(北部)	石錐	チャート	3.55	1.62	0.70	3.6	
183	SH4027	石錐	安山岩	3.57	1.70	0.53	2.9	
184	包含層(北部)	石錐	綠色片岩	3.78	1.84	0.60	3.5	未製品?
185	包含層(南部)	石錐	滑石凝灰岩	(3.92)	1.75	0.62	3.2	
186	SD4003	石錐	滑石凝灰岩	(3.95)	1.70	0.72	4.5	
187	SH4020	石錐	安山岩	(3.95)	1.78	0.78	4.6	
188	包含層(北部)	石錐	安山岩	4.72	2.00	0.60	4.5	
189	SK4004	石錐	安山岩	4.85	1.65	0.70	4.3	
190	包含層(南部)	石錐	安山岩	4.59	1.26	0.60	2.7	
191	包含層(北部)	石錐	チャート	5.00	1.62	0.95	5.4	
192	SH4018	石錐	安山岩	5.02	1.80	0.72	5.1	
193	SK4001	石錐	滑石凝灰岩	5.22	1.70	0.65	3.7	
194	SH4018	石錐	安山岩	(7.10)	1.62	0.55	5.9	
195	SH4018	石錐	安山岩	7.32	1.58	0.48	3.6	
196	包含層(北部)	石錐	滑石凝灰岩	7.73	1.22	0.38	0.8	未製品?

番号	測定地	岩種	岩性	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	調査者
157	包含層(北部)	石巖	黒褐色?	2.21	1.55	0.36	1.2	未製品?
158	SK4002	石巖	透鏡状灰岩	2.38	1.33	0.55	1.7	未製品?
159	SH4007	石巖	安山岩	(2.60)	2.40	0.45	2.6	未製品?
200	SK4004	石巖	チャート	2.68	2.05	0.59	4.5	未製品?
201	包含層(北部)	石巖	チャート	2.94	1.96	0.61	3.1	未製品?
202	ST4001	石巖	安山岩	3.05	1.80	0.45	2.5	未製品?
203	SK4002	石巖	チャート	3.25	2.00	0.80	5.2	未製品?
204	包含層(北端)	石巖	安山岩	4.04	1.87	0.64	3.2	未製品?
205	包含層(北部)	石巖	安山岩	4.38	2.00	0.94	7.2	未製品?
206	SI4037	石巖	ホルンフェルス	6.97	2.45	0.80	12.9	未製品?
207	包含層(北部)	スクレイパー	緑色片岩	5.00	10.90	1.20	57.1	
208	SK4016	スクレイパー	透鏡状灰岩	4.70	8.20	1.70	41.9	
209	包含層(中央部)	スクレイパー	緑色片岩	4.65	12.24	0.55	43.5	
210	包含層(北部)	石難	チャート	2.58	0.73	0.50	0.8	
211	SE4001	石難	チャート	2.97	1.03	0.65	2.1	
212	SK4004	石難	透鏡状灰岩	3.01	0.91	0.54	1.3	
213	SH4018	石難	透鏡岩	7.10	3.90	2.00	32.5	
214	包含層(南部)	窓板岩片岩岩	緑色岩	7.85	12.55	1.45	22.3	
215	SH4039	太型輪房石斧	麦文武岩	(10.40)	6.70	3.80	48.70	
216	包含層(南部)	太型輪房石斧	麦文武岩	11.50	6.00	3.40	44.06	
217	包含層(南部)	柱狀片岩石斧	ハイアロクラスタイト	3.50	1.20	0.90	7.8	
218	包含層(中央部)	柱狀片岩石斧	緑色岩	4.70	1.20	1.40	12.7	
219	包含層(北部)	柱狀片岩石斧	緑色片岩	5.50	1.60	0.90	15.8	
220	包含層(南部)	扁平片岩石斧	ハイアロクラスタイト	(2.40)	1.70	3.40	3.4	
221	SH4009	扁平片岩石斧	ハイアロクラスタイト	(2.20)	3.20	0.80	9.9	
222	SH4006	扁平片岩石斧	緑色岩	4.00	2.70	0.90	14.7	
223	包含層(北部)	扁平片岩石斧	緑色片岩	(4.90)	4.40	1.10	33.0	
224	包含層(北部)	扁平片岩石斧	角閃岩	11.30	5.20	2.30	23.16	
225	SH4008	扁平片岩石斧	緑色片岩	11.60	5.20	2.10	23.16	
226	SK4013	透鏡石鐵	ホルンフェルス	(4.70)	2.00	0.45	5.0	
227	包含層(南部)	有孔穿孔石鐵	黑色片岩	4.67	2.40	0.30	4.2	
228	包含層(南部)	有孔穿孔石鐵	黑色片岩	(3.61)	2.40	0.30	2.6	
229	SI4016	透鏡石鐵	黑色片岩	5.75	2.28	0.42	6.4	
230	包含層(中央部)	透鏡石鐵	緑色岩	(5.15)	1.75	0.50	6.0	
231	SH4017	透鏡石鐵	流紋岩	(5.35)	0.74	0.40	2.0	
232	包含層(北部)	透鏡石鐵	黑色片岩	(3.20)	1.36	0.32	2.3	未製品?
233	包含層(南部)	透鏡石鐵	黑色片岩	(4.60)	3.30	0.60	12.9	未製品?
234	包含層(南部)	砂礫車	緑色片岩	4.80	4.60	0.70	23.4	
235	SK4017	勾玉	麦文武岩	3.20	2.10	1.1	7.5	
236	包含層(南部)	勾玉	碧玉	1.00	0.60	0.3	0.4	
237	SK4004	青石	義沃特質砂岩	12.30	6.80	3.90	896.1	
238	SK4004	青石	義沃特質砂岩	13.60	5.90	4.80	596.1	
239	包含層(南部)	砾石	義沃特質砂岩	(2.72)	5.47	1.92	55.1	
240	SD4002	砾石	義沃特質砂岩	(6.32)	(7.00)	1.67	106.2	
241	SE4017	砾石	泥質凝灰岩	(5.00)	5.60	1.40	49.3	
242	包含層(北部)	砾石	綠色岩	(28.50)	19.90	16.70	91.9	
243	SH4026	砾石	砂岩	13.70	12.00	5.72	1020.5	
244	SH4018	砾石	泥質質砂岩	(14.30)	3.80	8.20	1019.1	

石材は、愛知県県文化財センター・黒木真美子氏に指定していただいた。

# 第4章 総 括

## 第1節 都田川流域における弥生時代中期の諸問題

### 1 はじめに

西遠江における弥生時代中期については、集落構造を把握できる銅柵事例はこれまで殆ど確認できなかつた。しかし、今回の発掘調査により井通遺跡は弥生時代中期の集落遺跡であることが確認され、当該期の資料を追加することができた。

弥生時代に限らず、集落の動態を窺うには建物・溝など個々の遺構を集合体として捉えるだけでなく、居住以外の生産域・墓域等を含めた有機的関連の中で位置付ける必要がある。

したがって、今回の調査成果は多様な集落構造の一側面にすぎないが、ここでは遺構・遺物にかかわる諸問題を取り上げ、資料の基礎的考察を行う。

### 2 遠江の弥生時代中期集落

西遠江の大陸系磨製石器・都田川・井伊谷川の微高地に立地する井通遺跡においては、弥生時代中期後葉には人為的活動の痕跡が確認できる。また、都田川流域では中期に微高地の各集落が出現・展開し、中川平野の胸拓が本格化した段階と位置付けられる。

西遠江においては弥生時代中期をもって大陸系磨製石器は組成を完成させ、定着すると考えられている。帰属時期が確実に判明する資料は多くはないが、弥生時代中期の沖積地に立地する集落では大陸系磨製石器の組成が完成していることを確認できる。一方、台地上に立地する遺跡とは石器構成において著しい差異が認められるが、これをもって水田稻作の浸透や集落間格差を指摘することはできない。これらは開発型水田稻作を進行するために確立した石器構成であって、生業の類型差を表している可能性も推定できる。また、沖積地に立地する遺跡であっても、石器構成比の特徴を抽出し、大規模開発の可否・中核的集落の存否を検証するには現状の資料では充分ではない。

井通遺跡の大陸系磨製石器からは、



Fig.8 西遠江出土主要石器

開発型水田稲作を展開することが可能である石器組成であったと評価できる。しかし、都田川流域における石器組成の導入段階・集落の相対的位置付け・弥生時代後期への動態については今回の調査では明確に示すことはできなかった。

竪穴建物の形態 井通遺跡で検出された竪穴建物のうち平面形態が判明する建物は、建物長辺が比較的直線状・短辺はやや外に張り出すため隅部が丸味をもつ隅丸長方形を呈する。

竪穴建物の平面形態についてはすでに先学の優れた考察があり（松井1992、岩瀬2001、鈴木敏2001）、弥生時代中期後葉の遠江では隅丸長方形の竪穴建物は一般的に認められる建物形態であることが指摘されている。しかし、東遠江では長辺・短辺ともに丸味をもつ楕円形となり、形態差は天竜川が境界となると考えられている。

今回の井通遺跡の調査では、これらの指摘を追認する成果を得た。遠江における弥生時代中期の集落は、調査事例が少なく未だ検討する段階に到達していないが、西遠江の浜名湖を挟んだ北岸と南岸において竪穴建物の平面形態が共通であったことは少なくとも指摘できるであろう。

三河との関係 一方、中平遺跡では短辺も直線状となり、より長方形を指向する傾向が強い竪穴建物が検出されている。この形態は三河で検出される竪穴建物と類似しており、三河との関連を示すものと捉えられる。しかし、中平遺跡では隅丸長方形の竪穴建物もみられ、同じ丘陵上に立地する坊ヶ崎遺跡でも認められておらず、遠江ではこれまでのところ他に確認されていない。

三河と遠江の弥生時代中期中葉の竪穴建物は方形であったと指摘されており、中期中葉から後葉に到る平面形態の変遷においては同一であったと捉えることが可能であろう。しかし、井通遺跡が位置する都田川流域は地理的な位置から三河と相互に影響を及ぼしていたものと想定されるが、竪穴建物に関しては三河の平面形態を受容していない。したがって、三河と遠江は同一の建築様式に含まれるが、細分が可能な小様式を認めることができる。さらに、遠江でも東遠江は別の平面形態を認めることができるところから、弥生時代中期後葉の竪穴建物には小さな地域性が表出する段階と位置付けられる。

後期への展開 平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は、法ヶ崎遺跡で確認できるように弥生時代後期前半までは受け継がれている。都田川流域でも台地上に立地する向山遺跡において、後期前半の隅丸長方形を呈する竪穴建物が検出されている。向山遺跡では後期後半に隅丸方形の竪穴建物に変化し、法ヶ崎遺跡では隅丸長方形と隅丸方形の建物が同時期に併存している。この動向は、伊勢湾沿岸地域の土器様式広域分布圏の成立と関連づけて理解されている（鈴木敏2001）。

弥生時代中期後葉から後期前半は生活様式の変遷と評価でき、都田川流域における各集落にも影響が及んだものと推測される。今回の井通遺跡の調査では弥生時代中期後葉が中心であり、後期へと連続する集落の社会的動向を窺う考古資料を確認できなかったが、今後とも都田川流域における断片的な資料を精力的に紡ぎ合わせていく必要がある。

### 3 置石炉について

分布・形態・時期 井通遺跡に設置された炉には、置石炉となる竪穴建物が5軒検出されている。

遠江の弥生時代の炉形態は地床炉を中心であり、置石炉の形態をもつ竪穴建物は普遍的とはいえない。また、竪穴建物検出数の多寡を問わなければ、分布はこれまでのところ浜名湖北岸～天竜川流域沖積平原北部と、小笠山北西丘陵周辺の2地域に認められる（註1）。

これら置石炉の形態は、

A類－炉心に礫を置く形態

B類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から短辺に向けて設置されたもの

C類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から長辺に向けて設置されたもの

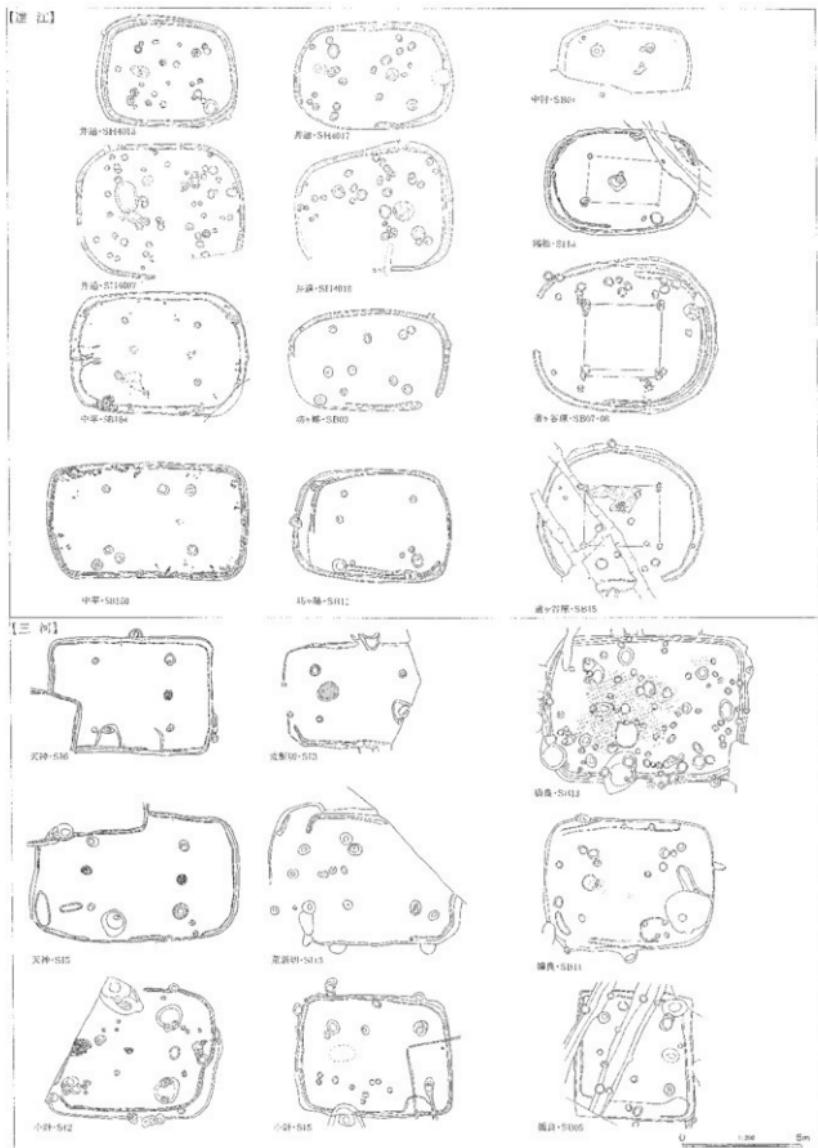


Fig.9 空穴產物集成

Tab.4 東三河・遠江櫻石炉一覧

遺跡名	遺構名	住居形態	置石方向	台付窓	台盤状土製品	時期
橋良遺跡	SB08	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
	SB10	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SB11	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SB13	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
井浦遺跡	SH4005	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SH4009	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SH4013	隅丸長方形	A			弥生中期後葉
	SH4018	隅丸長方形	B		○	弥生中期後葉
	SH4019	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
京原遺跡	SB101	隅丸方形?	A	○		弥生後期中葉
	SB111	隅丸方形	A	○		弥生後期後半
	SB118	楕円形	B?			弥生後期中葉～後半
	SB504	方形?	B?C?			弥生後期後半
	S3516	隅丸長方形	A	○		弥生後期
	SB519	方形?	B?C?			弥生後期後半
	SB533	楕円形	C			弥生後期
掛之上遺跡	SB1	方形?	A	○		弥生後期
愛野向山遺跡	SB22	?	?			弥生後期後半
团子塚遺跡	SB81	?	?	○		弥生後期後半
	SB16-4	隅丸長方形	C			弥生後期
居村遺跡	SB1	隅丸長方形	C			弥生後期
	SB4	隅丸方形	C			弥生後期前半

置石方向 - A : 中央、B : 邊縁・極近、C : 邊縁・長辺

に分類可能である。

各類型の分布状況をみるとA類は各地域で認められるが、B類は浜名湖北岸～天竜川流域、C類は小笠山西丘陵に中心をもつ形態であり、類型と分布に相関関係がみられる。

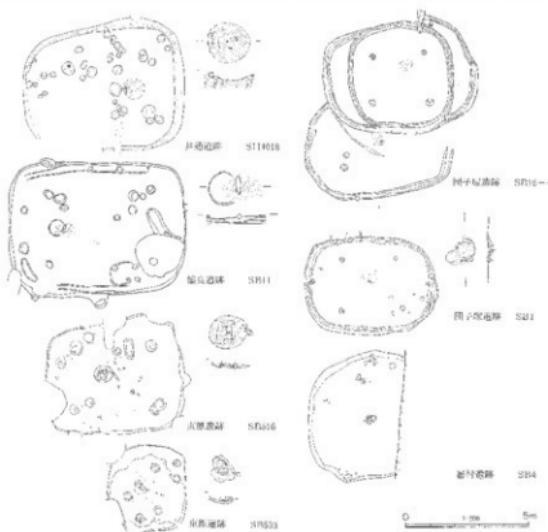


Fig.10 櫻石炉の諸例

置石炉はこれまでのところ弥生時代中期後葉には出現していたものと考えられる。西遠江では弥生時代後期～古墳時代前期の三方原台地上に立地する法ヶ崎遺跡・中平遺跡・坊ヶ崎遺跡などでは置石炉をもつ竪穴建物は確認されていない(註2)。一方、小笠山西丘陵の各集落遺跡では、弥生時代後期にも置石炉がみられる。したがって、置石炉をもつ竪穴建物は天竜川付近を境界として、西側が弥生時代中期後葉頃・東側が後期頃に盛行したものと捉えられる。

**置石炉の機能** 弥生時代中期後葉～後期の置石炉だけでなく地床炉にも関連する遺物として、台盤状土製品と台付壺を取り上げてみる。台盤状土製品はそれ自体が窯を持ち上げて煮炊きを行う役割を担うものであるが（森1996・1998）、台盤状土製品と置石炉がともに確認されたのは井通遺跡における1例のみである。一方、窯を持ち上げて使用するための専用器種である台付壺は、弥生時代中期後葉には出現し、次第に普及していく。台付壺は置石炉をもつ多くの竪穴建物で認められており、置石炉における台付壺は一般的な使用形態であると考えられる。

壺の内容物に対する加熱方法には、半底窯ではオキ主体、台付壺は浅い地床炉において直火主体での加熱方法が熟効率の観点から最も適しているとされている（森1998）。つまり、弥生時代に到りオキを重視した加熱方法から炎主体の加熱方法へ煮沸方法が変化することが指摘されているように（小林1992）、台付壺の使用は強い直火による調理方法への転換を示している。その際、屋内で使用される炎から居住空間を確保する必要があるため、炉縁に磯を設置したことが置石炉に関わる成立要因の1つとみられる。建物中央から必ず外側に向けて窓を設置したのは、その傍証となるであろう。

**置石炉の位置** 井通遺跡において地床炉、若しくは床面上に焼土が複数確認できる竪穴建物は比較的多い。定量的分析を経ていないが、このような竪穴建物は他の遺跡でも相当数確認できるのではなかろうか。しかし、橋良遺跡例を除き、遠江の置石炉をもつ竪穴建物は炉・焼土が複数確認できるものはない。それは、竪穴建物内で炉の位置が固定されたことに他ならない。

置石炉に関しては、磯の部分が薪を浮かせて酸素供給を促進するためとする見解があるが（岩瀬1996・2001）、構造・系譜・片側煮炊きなどの諸点において検討の余地を残している。むしろ、一定方向から煮炊きが行われていたとする指摘がより重要である。つまり、強い炎であればこそ火炎を固定して炎の侵入を防ぐ構造の炉形態であったと理解できよう。それは、竪穴建物内の空間分割を可能にしたものと評価できる。

**置石炉と竪穴建物** 置石炉をもつ竪穴建物は、東原遺跡を除けば隅丸長方形の竪穴建物において認められる。平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は西遠江では弥生時代後期前半、東遠江では後期まで確認でき、遠江における置石炉の存続期間とほぼ合致している。したがって、炎主体の加熱方法により台付壺を使用する、平面形態が隅丸長方形の竪穴建物に置石炉が主に設置されたと捉えられる。

台付壺は弥生時代後期には普遍的な器種となり、直火による調理に比重を増したことが窺えるが、台付壺の使用と置石炉の必要性とは直結しない。隅丸長方形の竪穴建物に設置された置石炉は炎主体の加熱方法に対応する炉形態であったが、次第にそれらは減少していく。代わって隅丸方形の竪穴建物に地床炉を設置する居住形態が主体となる傾向を指摘できる。

#### 4 結語

今回の井通遺跡の調査では、弥生時代中期後葉に集落が形成されたことが確認され、中川平野における本格的な農耕社会の様相を窺える資料を得た。弥生時代後期の都田川流域は、岡の平遺跡・椿野遺跡などの大規模集落のほか銅錫集中出土地域として発展しており、弥生時代中期から後期への展開過程の解明が今後の課題となるであろう。井通遺跡の成果が今後の研究に活用されることを期待したい。

#### 註

1 三河では管見により詳細な状況は知り得ないが、遠江と接する東三河の橋良遺跡では置石炉が実認されている。

2 古墳時代前期においては、これまでのところ大平遺跡SB14において確認されるのみである。この遺物は大平遺跡で最大馬頭の竪穴建物であり、置石炉となる2基の炉は極めて顧客に熱を受けて焼成されている。

## 第2節 井通遺跡の歴史的変遷

1996年に調査を開始してから12年の歳月を経て、井通遺跡の発掘調査はここに完了した。

井通遺跡の調査は地域の歴史を考える上で重要な意義をもつが、今後の調査により解明されなければならない課題も多い。ここでは今回の調査成果と考察内容を要約し、総括とする。

弥生時代中期 弥生時代中期後葉の堅穴建物・土坑などが検出され、多量の土器・石器が出土した。これらの資料から、井通遺跡は中川平野に展開した集落遺跡であると位置付けられ、本格的な農耕社会への移行過程を推察できる遺跡と評価できる。

古墳時代前期 弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、人為的活動の痕跡を遺構から追求することが困難な状況となる。しかし、遺物には内行花文鏡や畿内をはじめ他地域からもたらされた土器類などが出土していることから、集落域は都田川流域の微高地に移動して展開していたものと考えられる。

古墳時代中期 南部微高地において古墳時代中期中葉（5世紀中葉）頃に居住域が成立・展開する。堅穴建物は微高地の全城に及ぶものではなく、高位面に限られる。巨視的に捉えれば、この段階は都田川微高地に展開した集落として位置付けられる。

古墳時代後期 古墳時代後期前半（6世紀前半）には北部微高地に居住域が成立する。南部微高地も堅穴建物が確認されており、中央部低地を挟んで南北の微高地に集落が展開している。

古墳時代後期後半（6世紀後半）になると北部微高地の居住域は拡大し、南部微高地の居住域は継続して営まれていることが確認でき、集落は安定的な発展を遂げた様相が窺える。堅穴建物に庵が普及される状況も看取できる。

飛鳥時代 北部微高地では鍛冶関連遺物が多く出土しており、居住域の近辺に手工業空間が存在したことが窺える。南部微高地では高位面に獨立柱建物・低位面に堅穴建物が配置されている。さらに、有孔把手付中空円筒形が出土しており、奈良時代の官衙遺跡へと発展していく基盤が既に成立していたことが確認できる。また、畿内産土師器が出土しており、この時期には活発な人・物資の交流が行われていたことが窺える。

奈良時代 南部微高地において多数の獨立柱建物群などが検出され、建物配置・大溝とその付属施設の存在から、水上交通と密接な関連を有する機能を果たしていたものと捉えた。墨書き器・陶瓦類・度量衡資料などの出土遺物から、引佐郡家が管理した港湾施設・郡津と歴史的に評価した。さらに大溝埋没後は建物配置が大きく異なり、建物規模の大型化・廂付建物や床東建物などがみられることから、宿泊供給施設の機能を重視した館であったと位置付けられる。

平安時代 南部微高地の選擇群は縮小し、建物造構は堅穴建物に移行する。陶製計量器が出土することから、邊防の機能は維持されるが中心施設は大きく移動したことを確認できる。しかし、都城を除く遺跡では極めて稀少な宝珠鏡が出土していることは特記すべき重要事項である。

中世 北部微高地で獨立柱建物や井戸が検出されており、居住空間が展開したことが認められる。しかし、これらも急速に衰退していき、14世紀以降は集落域として現在まで継続することはなかった。この段階は中川平野に刑部御厨が設置されるが、その具体的様相を示す資料は得られなかった。

中世末～近・現代 北部微高地で検出された中世末の漆は近代の塗籠団と合致するものもあり、現代へと引き継がれる土地区画の始まりをこの時期まで遡ることが可能である。

近世には道筋北側に秋葉街道・南側に本坂道（郡街道）が通過する。近世には道筋西側に氣賀問所が設置され、浜名湖北岸の交通の要衝として近世の交通政策上の重要な位置を占めるようになる。

近代以降、調査で橋脚が検出された軽便鉄道奥山線、国鉄二俣線（現天竜浜名湖鉄道）、国道362号線、県道261号線が遺跡を通過していく。

## 引用・参考文献

- 足立順司ほか 1983 「諫野遺跡 考古57年度先鋒発掘調査」 愛知県博物館・郷土文化財調査研究会
- 足立順司 1984 「櫛野遺跡Ⅰ」 駿河導遊館付属考古遺産文化財調査研究所
- 足立順司・佐野左千一 1985 「櫛野遺跡Ⅱ」 静岡県県立文化財調査研究会
- 清水正明 1990 「高島文化跡」 愛知県県立文化財センター
- 清水工利ほか 1993 「高島遺跡Ⅱ・下巣入遺跡」 愛知県県立文化財センター
- 石川昌也 1984 「『古日本の大陸系陶器石器』『古占美研究 第4回第2号』」 研究会研究会
- 石嶋立人 1995 「富士の『駒形系陶器石器』『考古学ジャーナル No.301』」 ニュー・オイエンス社
- 石黒立人 1997 「愛知県の石器組合の変遷」 「芸術開始期の石器造成4」 国立歴史民俗博物館
- 伊藤信子 1997 「静岡県の石器組成の変遷」 「農耕開始期の石器造成4」 国立歴史民俗博物館
- 引佐野 1991 「引佐野町 上巣」
- 井越聰之 2007 「本原遺跡」 静岡県県立文化財調査研究会
- 吉澤裕利 1995 「説文・弥生時代の表記とその方法」 「説とそのアゼイン」 東海寺山学フォーラム
- 吉澤裕利 2001 「京浜地方中部における余波文類住居の復元」 『三河考古 第14号』 三河考古研究会
- 豊原 陽 2000 「編眞遺跡(日ノ目)」 駿河市教育委員会
- 岩本 貴 2000 「大成式大屋蓋の範囲」 「研究紀 第7号」 静岡県県立文化財調査研究会
- 櫻澤 健 1982 「弓削遺跡、佐古古墳群柴田山古墳」 浜松市教育委員会
- 太田好治 1989 「郡山地区奈良時代墓誌銘」 上巣」 浜松市文化協会
- 太田好治 1990 「郡山地区奈良時代墓誌銘」 下巣」 浜松市文化協会
- 大坪真規・杉浦 康・高見俊彦 1996 「小糸遺跡」 愛知県教育委員会
- 大坪真規・杉浦 康 1997 「小糸遺跡Ⅱ」 知立市教育委員会
- 大坪真規・杉浦 康 1998 「小糸遺跡Ⅲ」 知立市教育委員会
- 大谷宗治 2004 「譜々谷遺跡 大野瀬詩」 静岡県県立文化財調査研究会
- 篠山誠一 1996 「塗穴遺跡の地盤が示す背景」 「平成 平成7年校」 愛知県県立文化財センター
- 勝又廣人 1996 「角江遺跡Ⅱ 遺物編」 静岡県県立文化財調査研究会
- 川口昇介 1991 「春用泥壁に沿る弥生住居に残る一考案」 「森洞遺跡」 漢波神社北邊延 - 愛知県県立文化財センター
- 川口秀哉・鈴木敏郎 1982 「御野通跡」 浜松市遺跡調査会
- 栗原雅也ほか 1982 「川久保遺跡はか花園遺業復興碑」 駿江町教育委員会
- 栗原雅也 1988 「猪子ヶ子遺跡・穴ノ谷遺跡」 横須賀市教育委員会
- 栗原雅也ほか 1991 「岡多子内宮符遺跡発掘調査報告書」 駿江町教育委員会
- 栗原雅也ほか 1993 「川久保船渡遺跡」 横江町教育委員会
- 栗原雅也 1996 「非通路跡」 横江町教育委員会
- 栗原雅也 2005 「西の平遺跡発掘調査報告書」 磐田市教育委員会
- 合田正 1988 「猪子小寺」 「青山考古 第6号」 青山考古学会
- 小林久彦 1994 「『樂真遺跡』」 真鍋市教育委員会
- 小林正史 1992 「愛沢実跡に基づく先史時代の築造方法の研究」 「北陸古代土器研究 第2号」 北陸古代土器研究会
- 佐藤由紀男ほか 1985 「佐野遺跡」 伏見町立郷土資料館
- 佐藤由紀男 1996 「川山遺跡Ⅱ」 浜松市文化基金
- 佐藤由紀男 2002 「川山遺跡Ⅲ」 浜松市教育委員会
- 佐野五十三 1984 「銚田遺跡Ⅱ」 駿河導遊館付属考古遺産文化財調査研究会
- 佐野五十三 1985 「銚田遺跡Ⅲ」 静岡県県立文化財調査研究会
- 静岡県 1990 「銚田史蹟 資料編Ⅰ 古代」
- 静岡県 1991 「静岡史蹟 資料編Ⅱ 古代Ⅰ」
- 静岡県 1990 「勝間原系 墓誌編Ⅰ 古代Ⅱ」
- 静岡県 1992 「静岡史蹟 資料編Ⅱ 古代Ⅲ」
- 柴田 修 1992 「猪子塚遺跡(1)」 滝羽町教育委員会
- 柴田 修 1993 「猪子塚遺跡(2)」 静岡県県立文化財調査研究会
- 鳥取県県立文化財センター・鳥取県古文化センター 2002 「青岸郡猪子塚調査報告書Ⅰ (銅鏡面)」
- 鳥取県県立文化財センター・鳥取県古文化センター 2005 「青岸郡猪子塚調査報告書Ⅱ (武器形青銅鏡)」
- 清水一有 2002 「須武石遺跡」 浜松市文化協会
- 清水一有ほか 2004 「坊ヶ寺遺跡」 浜松市文化協会
- 清水一守・清水政則 1982 「牛平遺跡」 浜松市教育委員会
- 清水一守 1994 「御州遺跡」 滝羽町県立文化財調査研究会
- 清水政則 1996 「『佐野時代の青銅器とその共伴因縁』 須哥分骨室 遺址以東」 駿誠文化財研究会
- 清水敏則 1991 「鳴子遺跡」 浜松市文化協会
- 清水敏則 1992 「佐野湖西岸遺跡」 浜松市文化協会
- 清水敏則 1998 「『豊岡系内部(近江)』における「須武石器の終わり」について」「弥生時代の石器」無文化財研究会
- 清水敏則 1997 「荒海地方の生糸遺跡」「古文化論譲」 伊豫先生古希記念講義集研究会
- 清水敏則 1998 「大山本村遺跡」 浜松市文化協会
- 清水敏則 1998 「鳴子北遺跡」 浜松市文化協会
- 清水敏則 2001 「法ヶ寺遺跡」 浜松市教育委員会
- 清水敏則 2005 「桃子北(三木)・中村遺跡・弥生時代跡」 浜松市文化協会

- 辰巳弘一 1980 「引佐町の古墳文化Ⅰ」 引佐町教育委員会
- 辰巳弘一 1981a 「引佐町の古墳文化Ⅱ」 引佐町教育委員会
- 辰巳弘一 1981b 「福井県麻績の遺跡」 福井町教育委員会
- 辰巳弘一 1982 「引佐町の古墳文化Ⅲ」 引佐町教育委員会
- 辰巳弘一 1982a 「引佐町の古墳文化Ⅳ」 引佐町教育委員会
- 辰巳弘一 1996 「北嶺大塚古墳」 引佐町教育委員会
- 東海廻遊文化財研究会 1986 「久山大塚とその傍縁」 東海廻遊文化財研究会実行委員会
- 東海廻遊文化財研究会 1989 「伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる鉄器問題」 東海廻遊文化財研究会三重県実行委員会
- 寺野纪己 1980 「第3章 弥生時代の造形と遺物について」 中里前原遺跡調査委員会
- 賀元洋 1995 「第3章 石巒石形石灯籠の考察」 大山古墳遺跡 舞阪町教育委員会
- 福井田佳雄 1995 「佐倉の大塚系南越石室」『考古学ジャーナル』No.391』 ニュー・サイエンス社
- 長谷川 雄 1997 「小笠山聯合運動公園内遺跡群」 研究会実行委員会
- 浜松市遺跡調査会 1981 「浜松市天王寺遺跡発掘調査報告書」
- 浜松市遺跡調査会 1983 「西条浜松工場内(横子)遺跡第1次発掘調査報告」
- 浜松市遺跡調査会 1983 「国営浜松工場内遺跡第2次発掘調査報告」
- 寺 弘之・小島 雄 1995 「天國遺跡」 奈良県教育委員会
- 奈良県教育委員会 1983 「勝坂遺跡Ⅱ」
- 姫江町 1986 「姫江町史 古利根六」
- 高歐町教育委員会 1985 「大山古墳跡」
- 堀越町文化財研究会 1997 「弥生時代の石器」
- 黄田清彦・小島 雄 1988 「石垣・溝中・兩谷遺跡」 津川市教育委員会
- 前田哲彦・朴 弘之ほか 1989 「郡中・両谷」 盛岡市教育委員会
- 松井一朗 1992 「勝松遺跡V」 袋井市教育委員会
- 松井一朗 2001 「掛之上遺跡Ⅱ」 袋井市教育委員会
- 松井一朗 2004 「愛野向山古跡」 袋井市教育委員会
- 丸岐俊一郎ほか 2007 「牛込遺跡」本文編Ⅰ・本文編Ⅱ・図版編・文字資料編 埼玉県埋蔵文化財調査研究所
- 河原綱二・辰巳 雄 1991 「川山遺跡跡地調査報告書」 浜松市教育委員会
- 森 審道 1995 「台盤上遺品から付属へ「與」と要そのデザイン」 東海考古学フォーラム
- 森 審道 1998 「台付施の出現」『池崎彰一先生古脊記念論文集』 池崎彰一先生古脊記念論文集刊行会
- 森 審道 2000 「漸える台付施」『S字型を考える』 東海考古学フォーラム
- 山内成洋ほか 1992 「静岡県内出土の「石包丁」の使用分析」『山田美術 遺物編』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 渡辺英樹 1995 「東萩河における布留式銅行燈の検査(後)」『静岡県考古学研究』No.28』 藤桜系考古学会
- 渡辺英樹 1997 「東萩河における布留式銅行燈の検査(後)」『静岡県考古学研究』No.29』 静岡県考古学会
- 渡辺英樹・竹内順一 1999 「大刀式と呼ばれる大刀頭」『静岡県考古学研究』No.31』 静岡県考古学会

## 図出典

- Fig. 6 尾立・佐野1985、鈴木1986、静岡県1992、柴原ほか1993、柴田1993、栗原2006より転載  
 Fig. 8 各報告書を一部改変して転載  
 Fig. 9 各報告書を一部改変して転載  
 Fig.10 各報告書を一部改変して転載

## 謝 辞

現地調査及び本書の作成にあたっては、下記に銘記した方々にご指導・ご高配を賜った。末筆ながら深く感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

- 石黒立人 岩瀬彩利 太田好治 大谷宏治 川添和曉 工藤基志 栗原雅也 佐藤由紀男  
 笹原和大 柴田 雄 鈴木一有 鈴木敏則 辰巳弘一 水井宏幸 植宣田佳男 八賀 晋  
 桐原岳二 平野吾郎 朝木真美子 松井一朗 向坂篤二 森 泰浦 渡辺 誠

# 付 載

## 理化学的分析

井通遺跡における自然科学分析  
株式会社 古環境研究所

- I 井通遺跡における樹種同定
- II 井通遺跡における炭化穀実同定
- III 井通遺跡出土試料の赤色顔料分析  
(螢光X線分析)

# 井通遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I 井通遺跡における樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、井通遺跡より出土した柱1点を含む炭化材20点である。時期は弥生時代中期である。

### 3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

結果を表1に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根據となった特徴を記す。

#### モミ属 *Abies* マツ科 図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。宮嶽高木で高さ45m、径15mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

#### クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科 図版2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、散列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水浸によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など

木など広く用いられる。

#### ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 図版3

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に數列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともに低く、建築材などに用いられる。

#### シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に數列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性ともにやや低く、建築、器具などに用いられる。

なお、シイ属にはスグジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片であり広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどめる。

#### コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～數列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

#### コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～數列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図版 6

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に離隔なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径15m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ブナ科 *Fagaceae*

横断面：大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られる。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属のいずれかである。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったので、ブナ科以下の同定は困難であった。

クスノキ科 *Lauraceae*

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は保存状態が悪く不明瞭な点が多いため、クスノキ科の同定にとどめる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

## 5. 所 見

井浦遺跡出土の炭化材は、コナラ属コナラ節4点、ツブライジ4点、クリ3点、シイ属3点、ブナ科（クリ、シイ属のいずれか）2点、モミ属1点、コナラ属クヌギ節1点、コナラ属アカガシ亜属1点、クスノキ科1点であった。柱1点には、クリが使用されていた。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。重厚で保存性が良く、柱材などの建築材として比較的よく使われる樹木である。

多い順に、コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。シイ属（ツブライジを含む）は、温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で乾燥した台地等の二次林要素でもある。コナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。クスノキ科も照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。モミ属は温帯性のモミであり、常緑高木である。

井遁遺跡の炭化材は大きな材の採取できる高木ばかりであり、台地上等の乾燥したところに生育する二次林性の落葉広葉樹ないし照葉樹が主要となる。遺跡周辺の台地等に二次林が分布し、これらの樹種も遺跡周辺から比較的容易にもたらすことができたと考えられる。

### 参考文献

- 佐治 浩・原田 浩 1955 照葉樹科の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.  
 佐治 浩・原田 浩 1955 広葉樹科の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.  
 高島 肇・伊東邦夫 1986 日本の遺跡出土木根品叢観、桜山編、p.296  
 田中昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、准生出版特別版1号、准生史研完全、p.242

表1 井遁遺跡炭化材 種属表

試料No.	遺標名	結果(学名/和名)
1	SD4002	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i> ツブラジイ
2	<i>Castanopsis</i>	シイ属
3	<i>Castanopsis</i>	シイ属
4	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>	ツブラジイ
5	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>	ツブラジイ
6	SH4016	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i> クリ
7	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
8	<i>Loraceae</i>	クヌキ科
9	<i>Fagaceae</i>	ブナ科
10	<i>Fagaceae</i>	ブナ科
11	SH4018	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i> クリ
12	<i>Abies</i>	モミ属
13	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
14	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>	ツブラジイ
15	<i>Castanopsis</i>	シイ属
16	SH4019	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
17	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
18	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
19	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
20	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>	クリ

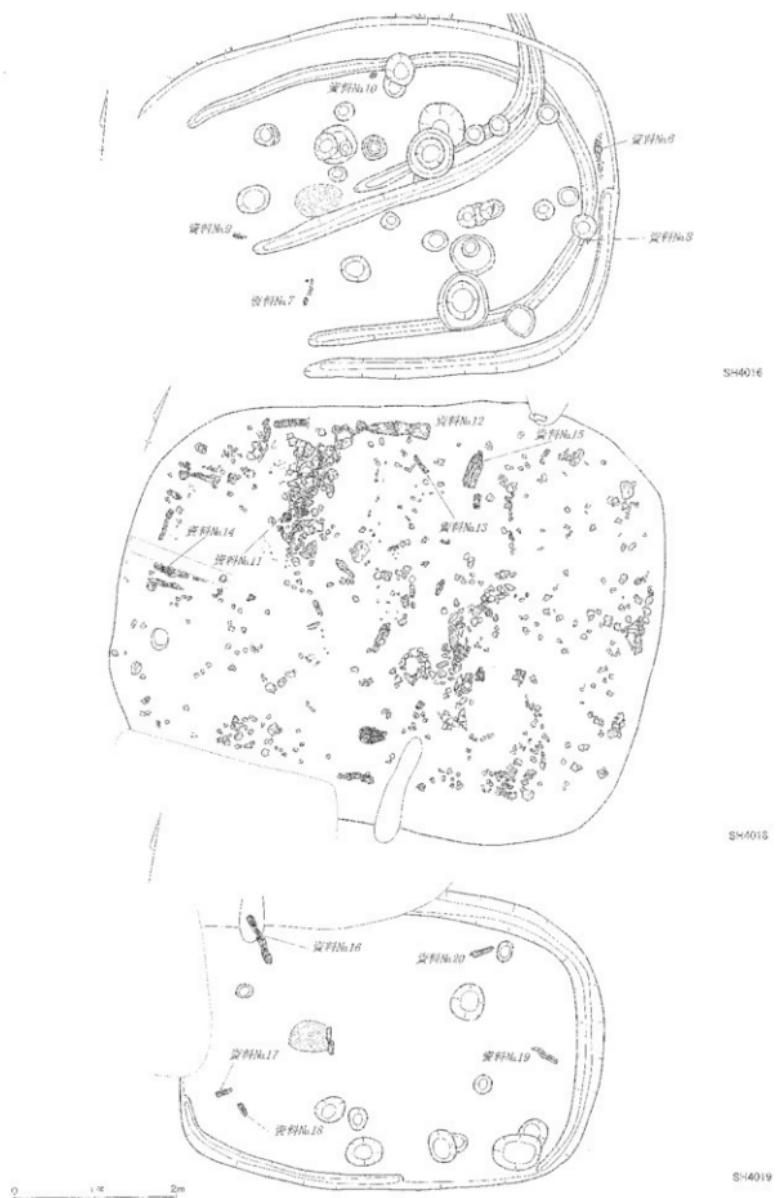
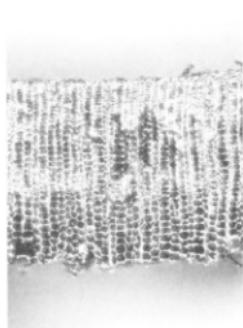


图1 资料採取位置圖

井通遺跡の炭化材 I



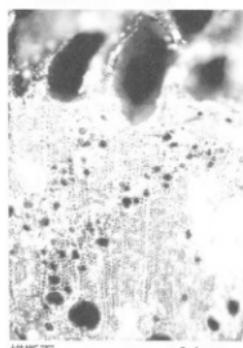
横断面 : 0.4mm  
1. 試料NO.12 モミ属



放射断面 : 0.1mm



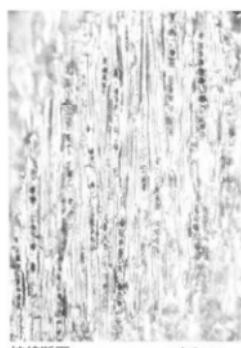
接縫断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm  
2. 試料NO.11 クリ



放射断面 : 0.4mm



接縫断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm  
3. 試料NO.1 ツブラジイ

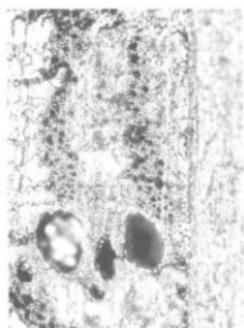


放射断面 : 0.4mm

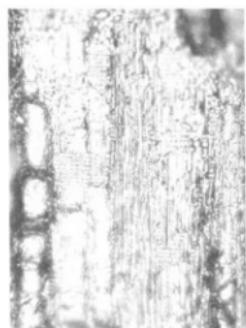


接縫断面 : 0.2mm

井通遺跡の炭化材 II



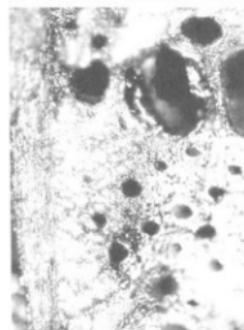
横断面 : 0.4mm  
4. 試料NO.16 コナラ属コナラ筋



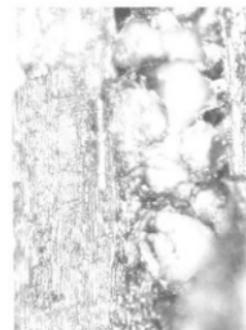
放射断面 : 0.4mm



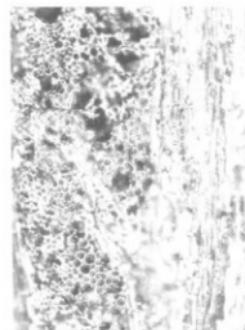
接線断面 : 0.2mm



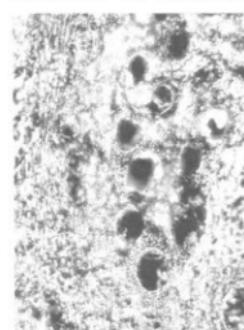
横断面 : 0.4mm  
5. 試料NO.7 コナラ属クヌギ筋



放射断面 : 0.4mm



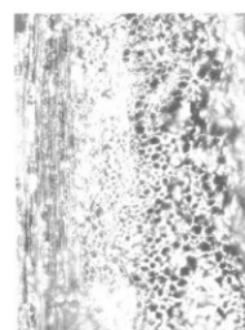
接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm  
6. 試料NO.13 コナラ属アカガシ亜属



放射断面 : 0.4mm



接線断面 : 0.2mm

## II 井通遺跡における炭化種実同定

### 1.はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

### 2. 試 料

試料は、弥生時代中期（約2000年前）の計18点である。いずれも水洗選別済みのものである。

### 3. 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

### 4. 結 果

#### (1) 分類群

樹木4、草本2の計6分類群が同定される。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

##### 〔樹木〕

クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* 種子（破片）・堅果（破片） ブナ科

種子は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。

イチイガシ *Quercus gilva Blume* 子葉（完形・半形） ブナ科

炭化して黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属 *Quercus* 子葉（破片） ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

モモ *Prunus persica Batsch* 核（破片） パラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

##### 〔草 本〕

イネ *Oryza sativa L.* 果実（破片） イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

アサ *Cannabis sativa L.* 種子 クワ科

黒色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の烟作物である。茎皮の纖維は麻糸になり、種子は油を採ったり食用になる。不明炭化物 炭化の度合いが著しく表面模様が観察できない、または発泡し変形しているため種実とは判断しにくいため、不明炭化物とする。

## (2) 種実群集の特徴

- 試料1) イチイガシ6、コナラ属9が同定された。
- 試料2) モモ1が同定された。
- 試料3) クリ10が同定された。
- 試料4) イチイガシ1が同定された。
- 試料5) イチイガシ1が同定された。
- 試料6) コナラ属1が同定された。
- 試料7) コナラ属1が同定された。
- 試料8) イチイガシ1が同定された。
- 試料9) コナラ属1が同定された。
- 試料10) コナラ属1が同定された。
- 試料11) コナラ属1が同定された。
- 試料12) コナラ属1が同定された。
- 試料13) コナラ属1が同定された。
- 試料14) モモ1が同定された。
- 試料15) イネ1、アサ59が同定された。
- 試料16) イネ1が同定された。
- 試料17) 種実類は同定されなかった。
- 試料18) モモ1が同定された。

## 5. 考 察

井通遺跡で検出された炭化種実は、クリ、イチイガシ、コナラ属、モモ、イネ、アサに同定された。クリとイチイガシは、渋抜きなしで優良な食用になる堅果類であり、イネ、モモ、アサは栽培植物である。アサの種子は食用となり、茎の繊維は布地、網、袋などに利用される。各種実は種類ごとにまとまって出土する傾向にあり人為的集積が考えられる。以上、井通遺跡で検出された種実類は、クリ、イチイガシ、モモ、イネ、アサといった栽培植物を含む有用な植物の種実群である。

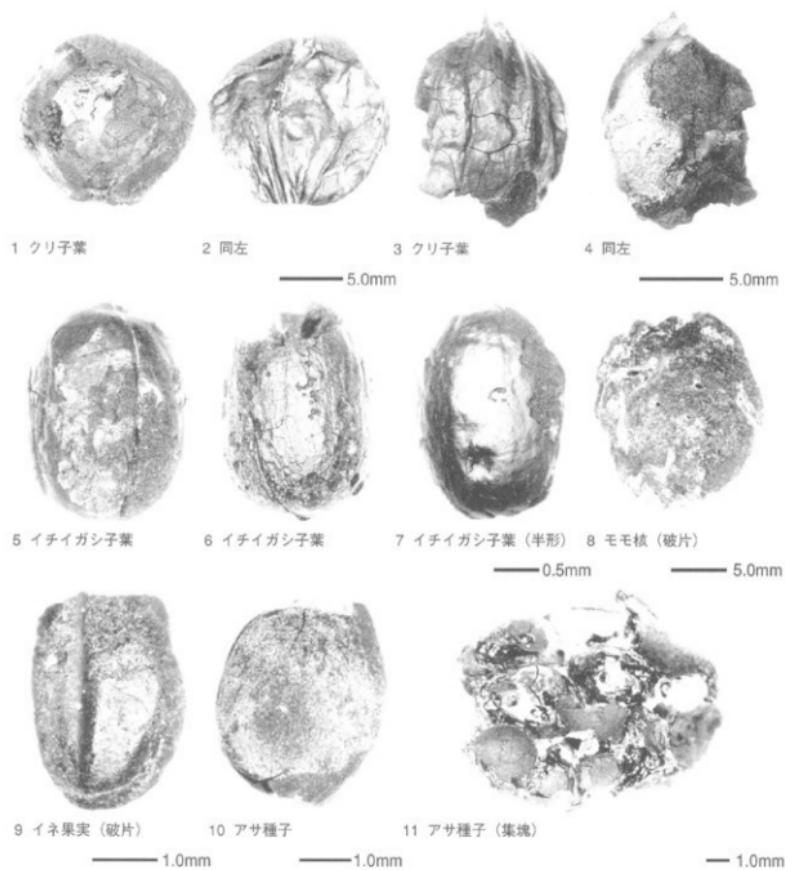
## 参考文献

- 笠原安夫 1985 日本雑草図説、巻賢堂、494p.
- 笠原安夫 1988 作物および田舎雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131-139.
- 金原正明 1996 代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo.409、ニューサイエンス社、p.15-19.
- 南木睦彦 1991 栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版株式会社、p.165-174.
- 渡辺 誠 1975 純文時代の植物食、雄山閣、187p.

表1 井通遺跡における炭化種実固定結果

分類群		部位	試料																	
学名	和名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
<i>Arbor</i>	樹木																			
<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>	クリ	堅果(破片)					5													
		子葉(破片)					5													
<i>Quercus gilva Blume</i>	イチイガシ	子葉(完形)	1													1				
		(半形)	5					2												
<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	9				2									5				
<i>Prunus persica Batsch</i>	モモ	核(破片)	1													11			1	
<i>Herb</i>	草本															1	1			
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果实(破片)														9				
<i>Cannabis sativa L.</i>	アサ	種子(集塊)														50				
		(完形)														(+)				
		(破片)																		
Total	合計	15	1	10	4										6	11	60	1	0	1
	不明炭化物														3			17		
	炭化材片														1	1				

## 井通遺跡の炭化種実



### III 井通遺跡出土試料の赤色顔料分析（蛍光X線分析）

#### 1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀:HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄:Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、鉛丹（酸化鉛:Pb<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）が知られている（市毛1998、本田1995）。蛍光X線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S）、鉄（Fe）、鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

#### 2. 試 料

分析試料は、SH4015から出土したNo1・No2、SK4007から出土したNo3、G-38グリッドから出土したNo4・No5の計5点である。このうち、試料No3～5については赤色顔料付着部分と非赤色部の2箇所を測定して比較検討を行った。

#### 3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間600秒、照射径7.0mm、電圧30kV、試料室内真空である。

#### 4. 分析結果

表1に各元素の定量分析結果（wt%）を示し、付図に各試料（部位）のX線スペクトル図を示す。定量分析の結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記している。

#### 5. 考 察

##### （1）No1・No2

分析の結果、試料No1とNo2では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の含量は、No1では39.9%、No2では48.2%といずれも高い値であり、各試料の主成分となっている。以上の結果から、これらの試料に含まれている顔料はベンガラと考えられる。なお、地下水などの鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラをより確実に同定するにはX線回折分析による結晶構造の解析が必要である。

##### （2）No3・No4・No5（土器付着の赤色顔料）

分析の結果、No3・No4・No5の赤色顔料付着部分では、鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。このうち、No5の赤色部における鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の含量は11.1%（非赤色部は3.8%）であり、比較部分の29倍と明らかに高い値である。また、No3の赤色部における鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の含量は8.2%（非赤色部は5.6%）、No4の赤色部は6.7%（非赤色部は4.9%）であり、いざれも比較部分よりも高い値である。以上の結果から、これらの土器に付着した赤色顔料はベンガラと考えられる。

## 参考文献

- 市毛 熊 1998 新版朱の考古学、考古学選書、雄山閣出版  
 本田光子 1995 古墳時代の赤色顔料、考古学と自然科学、31・32、p.63-79。

表1 井通遺跡における蛍光X線分結果

単位: wt(%)

原子No	試料	1 赤色部	2 赤色部	3 赤色部	3' 非赤色部	4 赤色部	4' 非赤色部	5 赤色部	5' 非赤色部
11	Na <sub>2</sub> O	0.560	0.768	1.163	1.587	1.159	1.220	1.252	1.012
12	MgO	5.078	4.020	1.405	1.285	0.817	1.541	0.435	1.298
13	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	12.795	11.012	16.226	18.445	20.021	21.715	19.351	23.054
14	SiO <sub>2</sub>	34.875	29.661	59.240	62.890	63.863	63.842	61.188	62.449
15	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	1.373	1.298	2.568	2.313	2.559	1.971	2.310	3.218
16	SO <sub>3</sub>	0.000	0.000	4.525	1.473	0.000	0.000	0.037	0.124
19	K <sub>2</sub> O	1.119	1.067	2.690	2.726	2.329	2.215	2.113	2.378
20	CaO	2.168	1.832	2.285	1.774	0.996	1.050	0.800	1.185
22	TiO <sub>2</sub>	1.323	1.168	1.338	1.524	1.218	1.259	1.011	1.178
23	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.024	0.047	0.045	0.044	0.031	0.053	0.030	0.030
24	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.106	0.069	0.033	0.039	0.015	0.054	0.028	0.037
25	MnO	0.464	0.584	0.167	0.121	0.140	0.088	0.170	0.097
26	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	39.889	48.212	8.190	5.649	6.723	4.889	11.137	3.788
28	NiO	0.156	0.162	0.036	0.032	0.039	0.037	0.039	0.050
37	Rb <sub>2</sub> O	0.013	0.012	0.018	0.012	0.015	0.013	0.013	0.018
38	SrO	0.025	0.042	0.029	0.030	0.033	0.021	0.029	0.032
40	ZrO <sub>2</sub>	0.034	0.047	0.043	0.058	0.041	0.030	0.055	0.054



No.3

No.4

No.5

写真1 蛍光X線分析（赤色顔料分析）試料

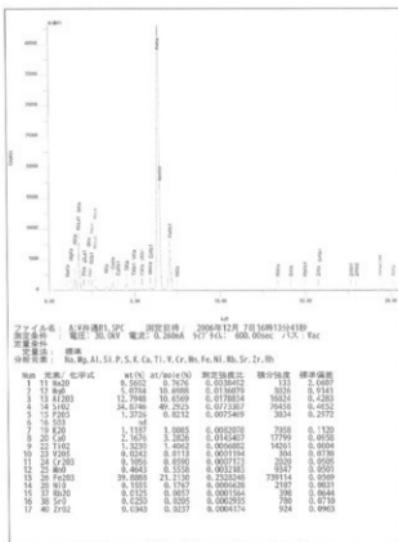


図1 優光X線スペクトル(No.1)

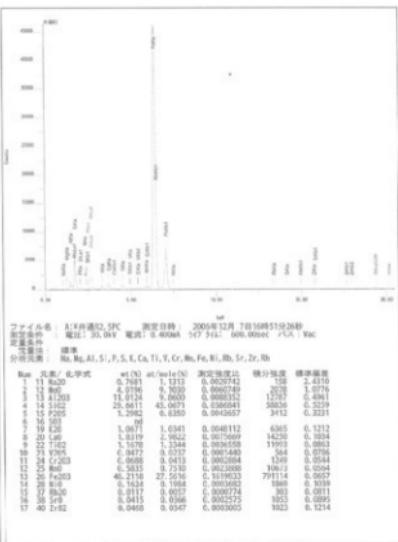


図2 優光X線スペクトル(No.2)

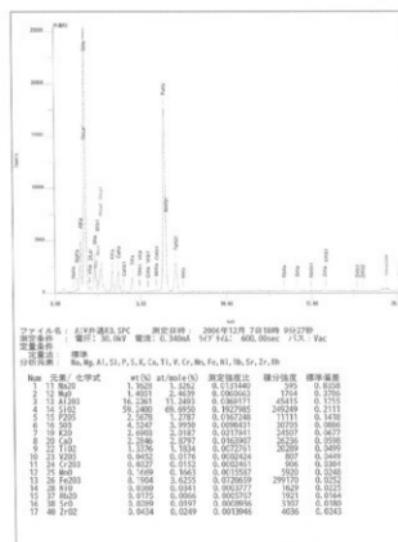


図3 優光X線スペクトル(No.3)

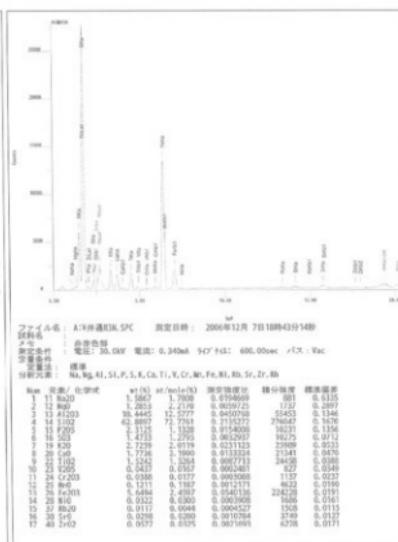


図4 優光X線スペクトル(No.4)

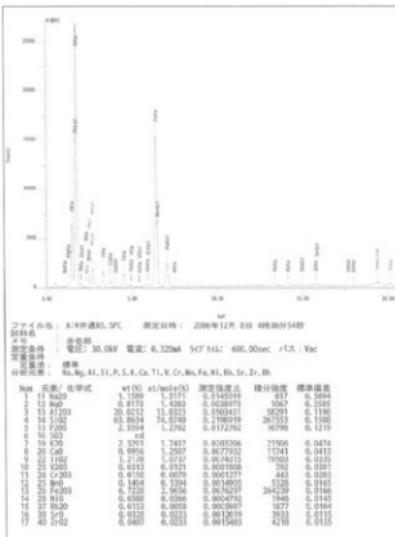


図5 蛍光X線スペクトル (No4)

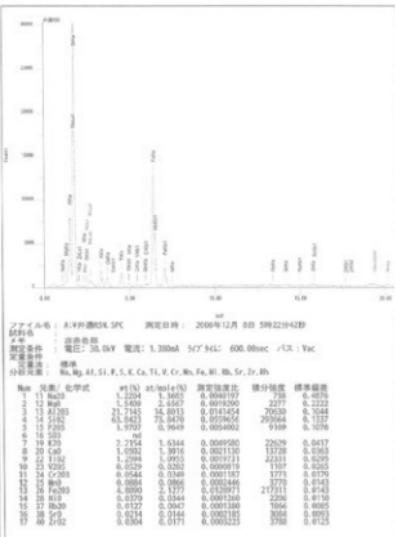


図6 蛍光X線スペクトル (No4+)

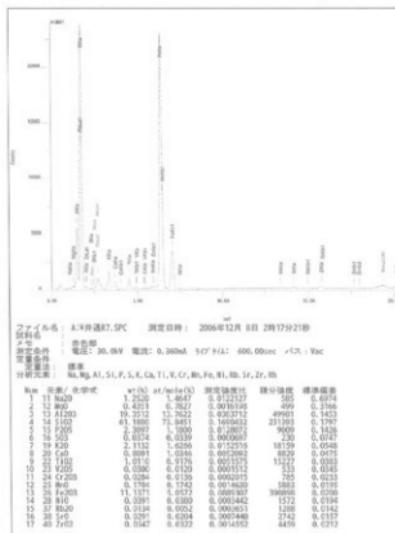


図7 蛍光X線スペクトル (No5)

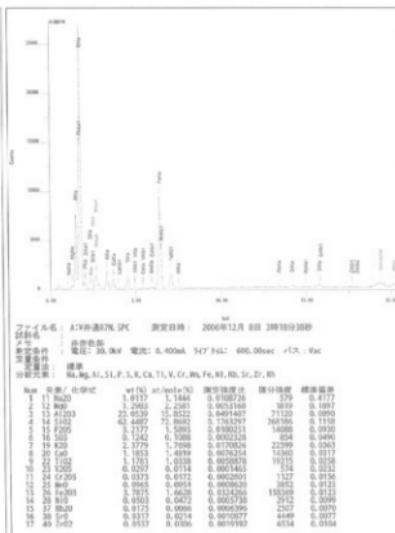


図8 蛍光X線スペクトル (No5+)

図 版

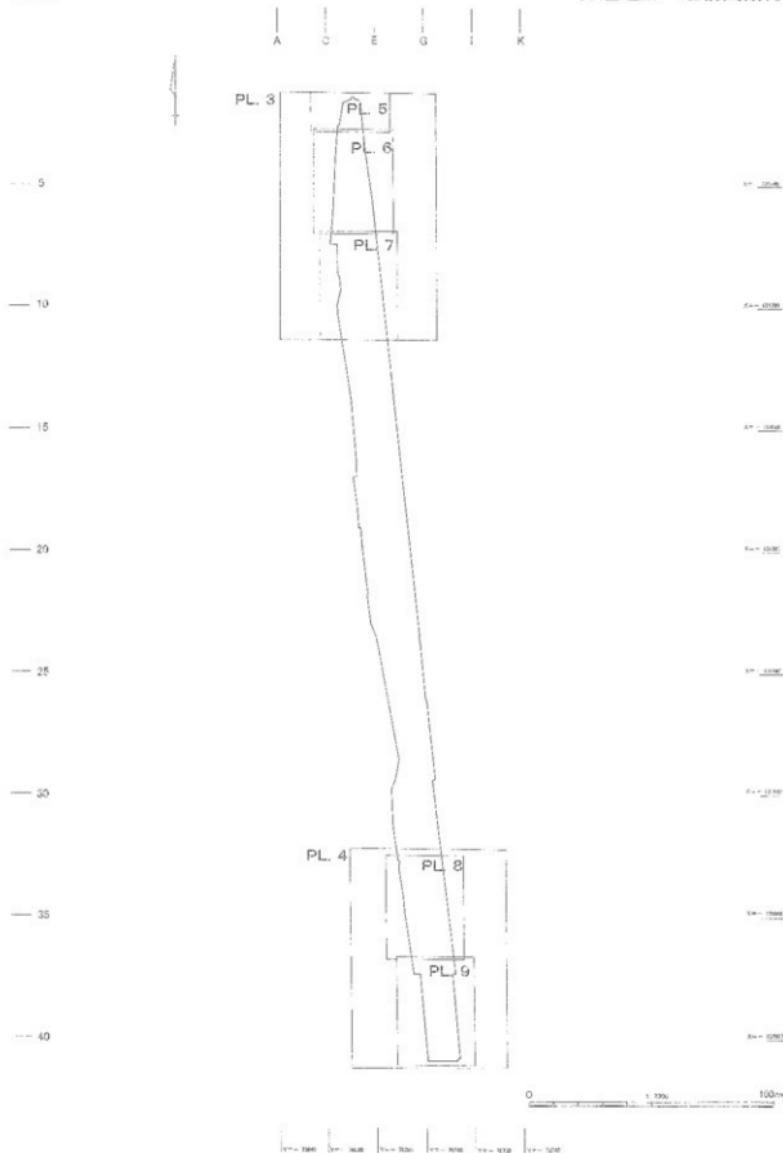
井通遺跡 全体図

PL. 1



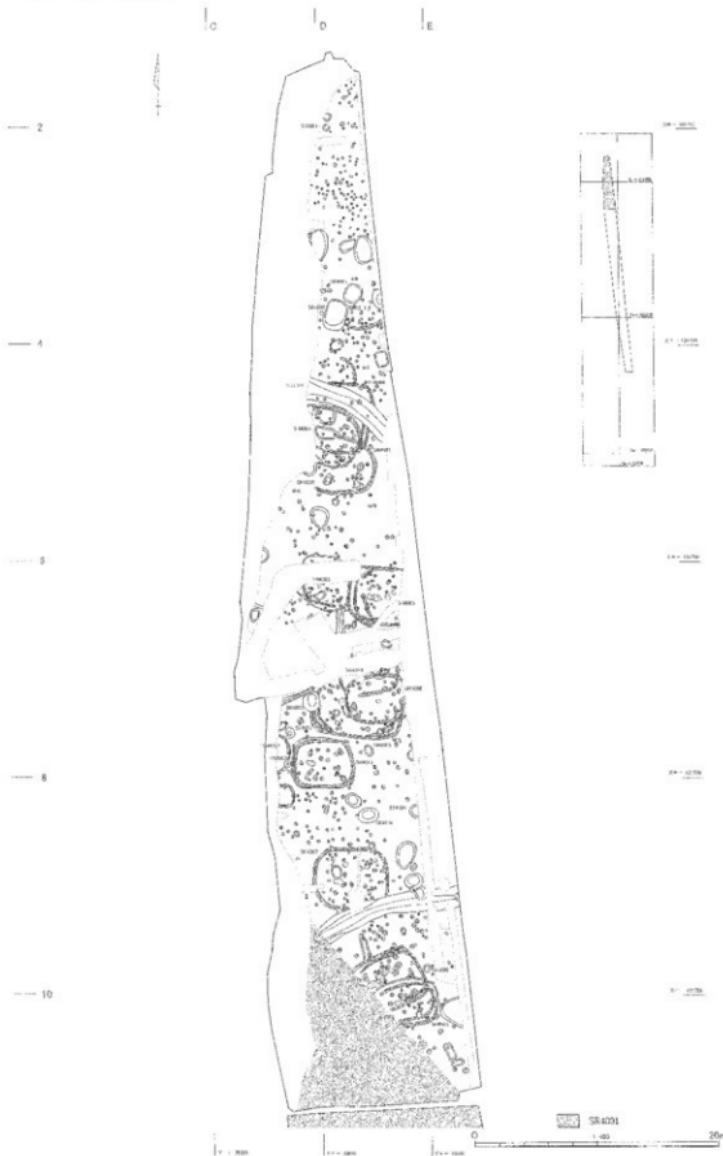
PL.2

井道遺跡 造掘図割付



調査区北部 検出遺構図

PL.3



— 34



— 36



— 38



— 40



SB-001

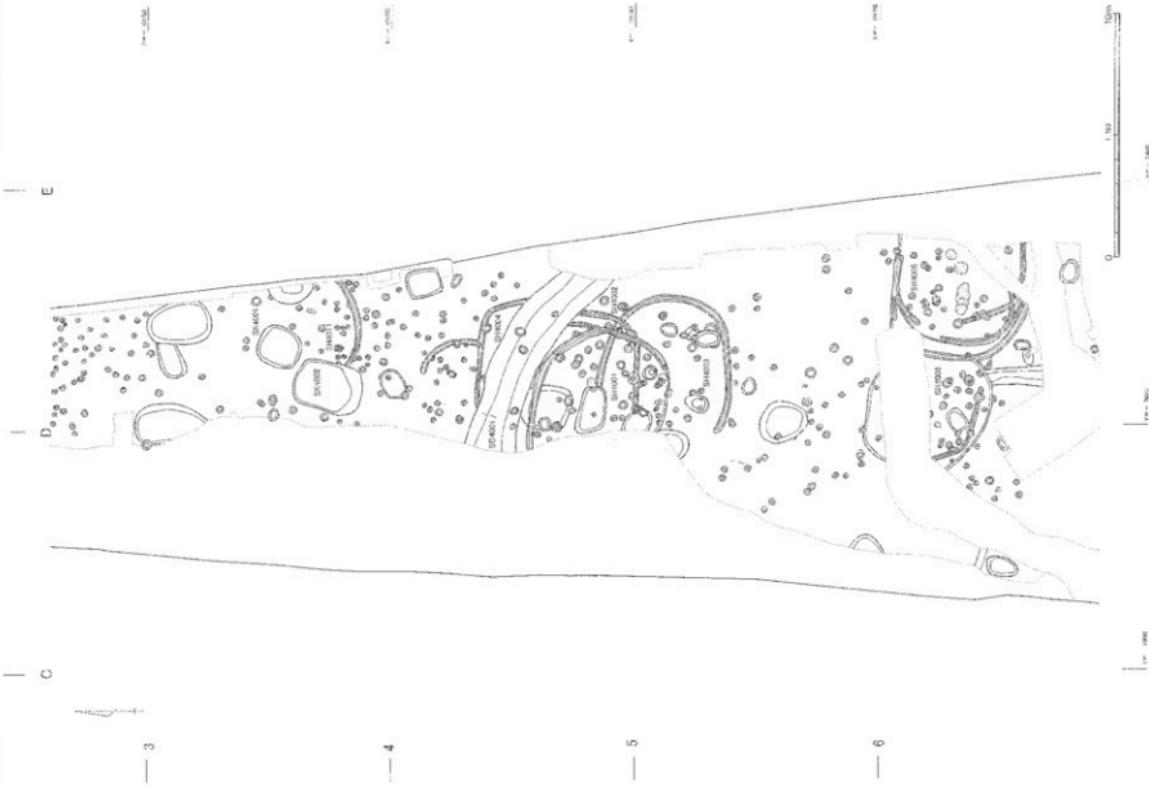
0 100 200m

EAST - 30.00

EAST - 30.00

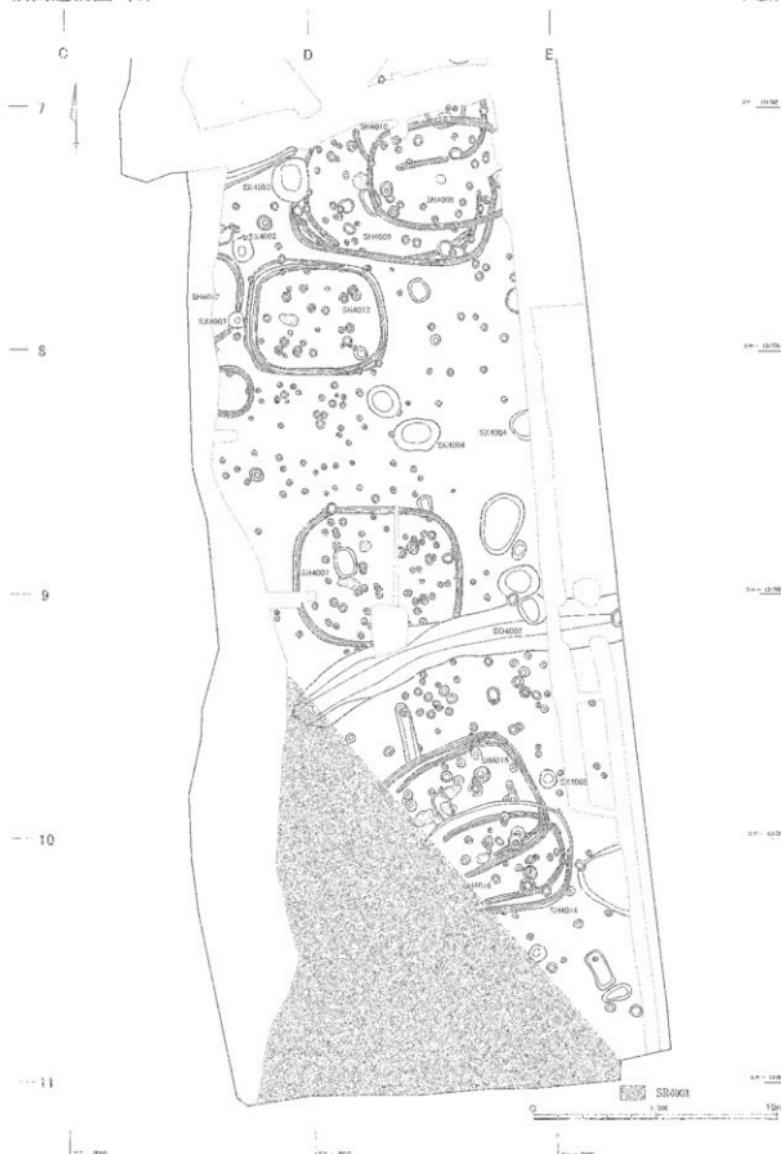
EAST - 30.00

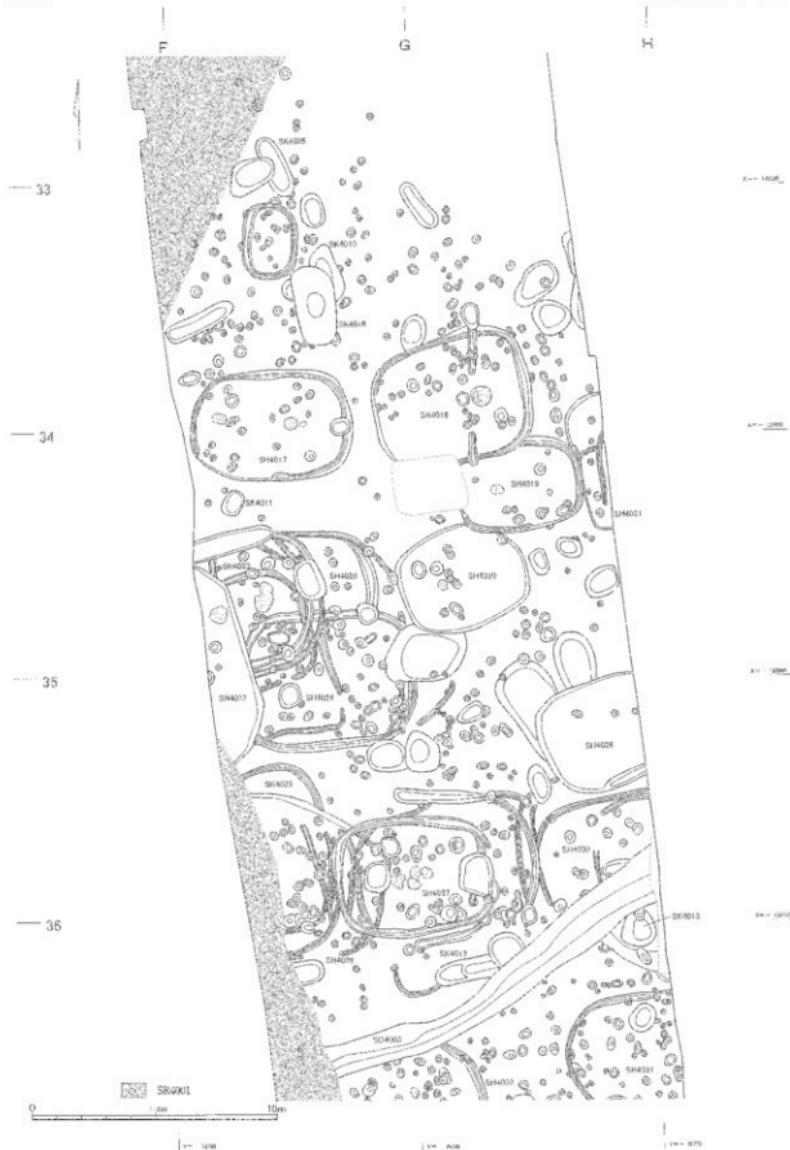




検出造構図 (3)

PL.7





検出遺構図 (5)

PL.9

— 37



— 38



— 39

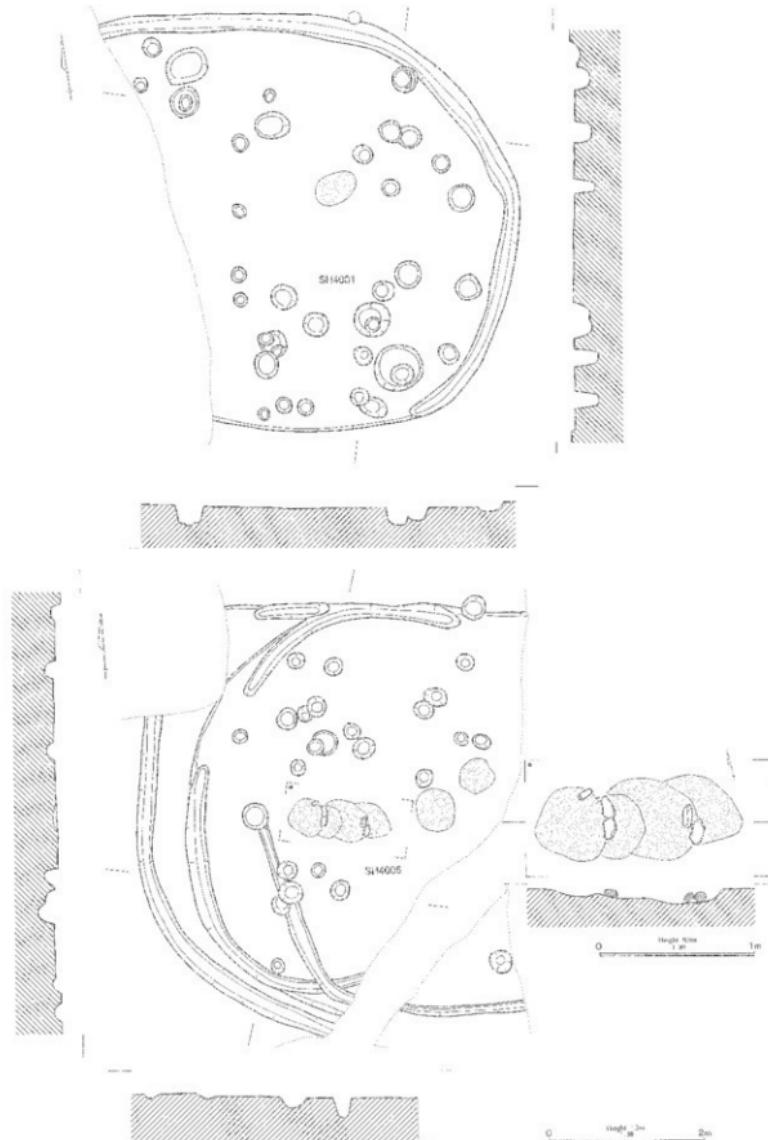


— 40

— 40

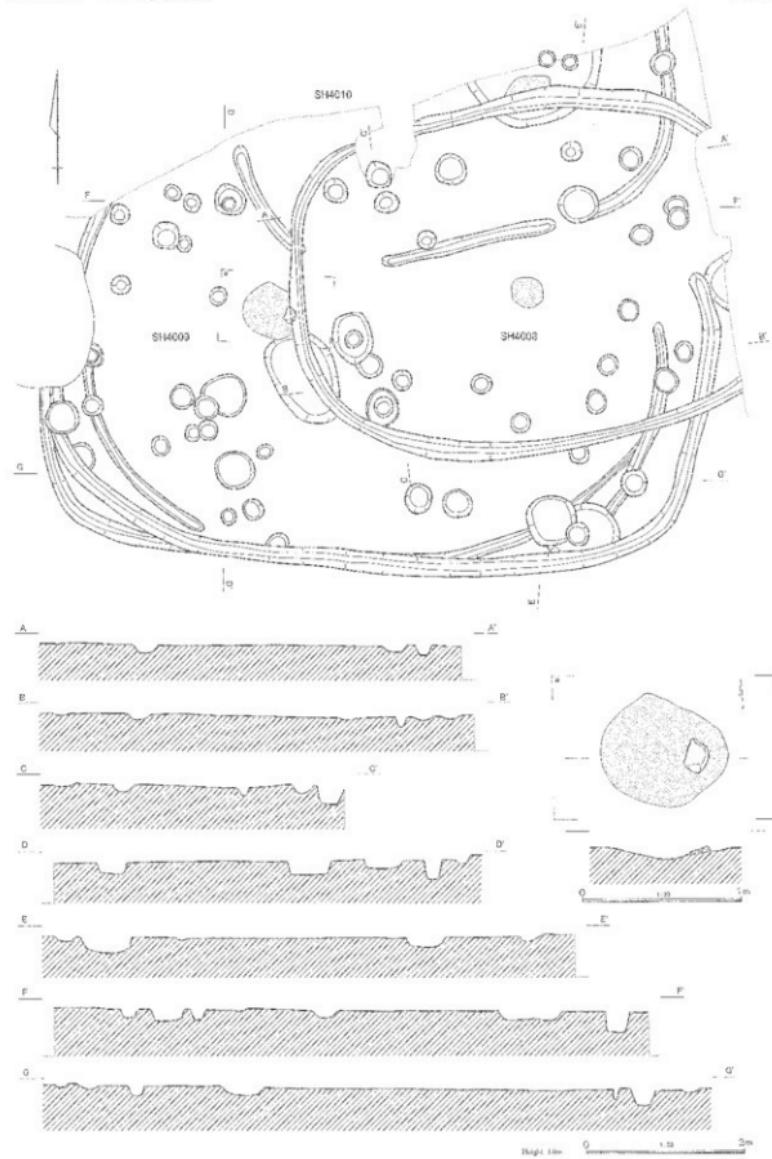
PL.10

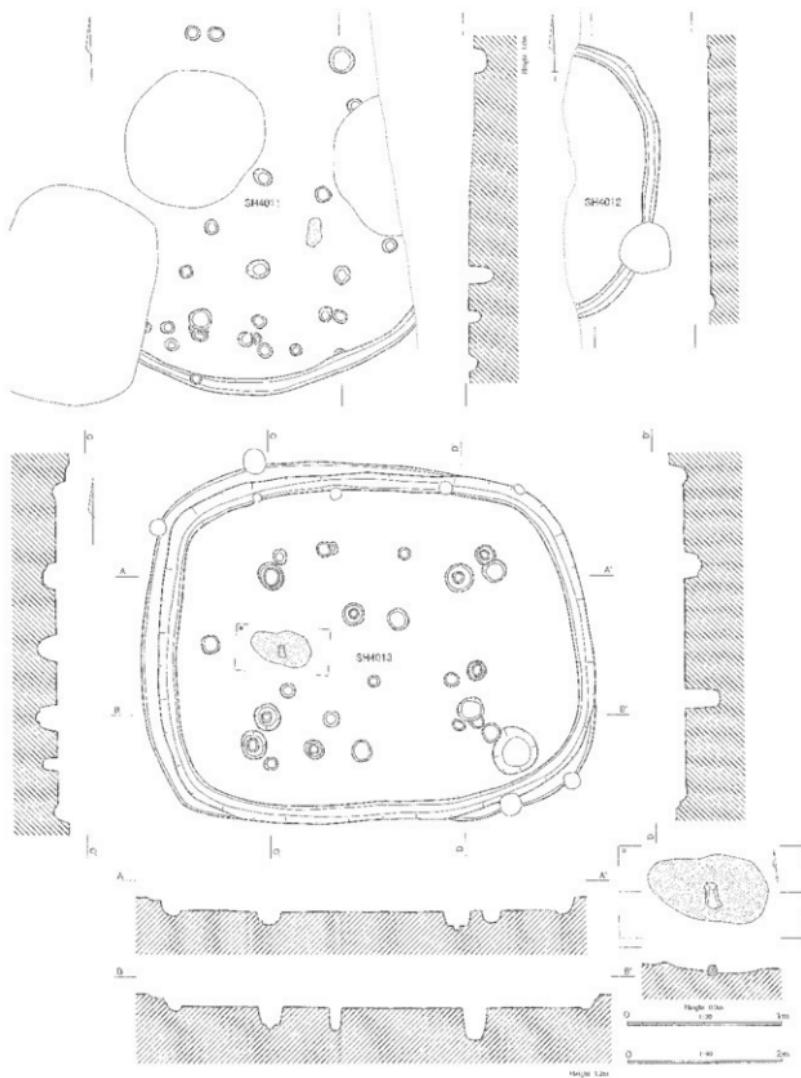
SH4001・4005実測図





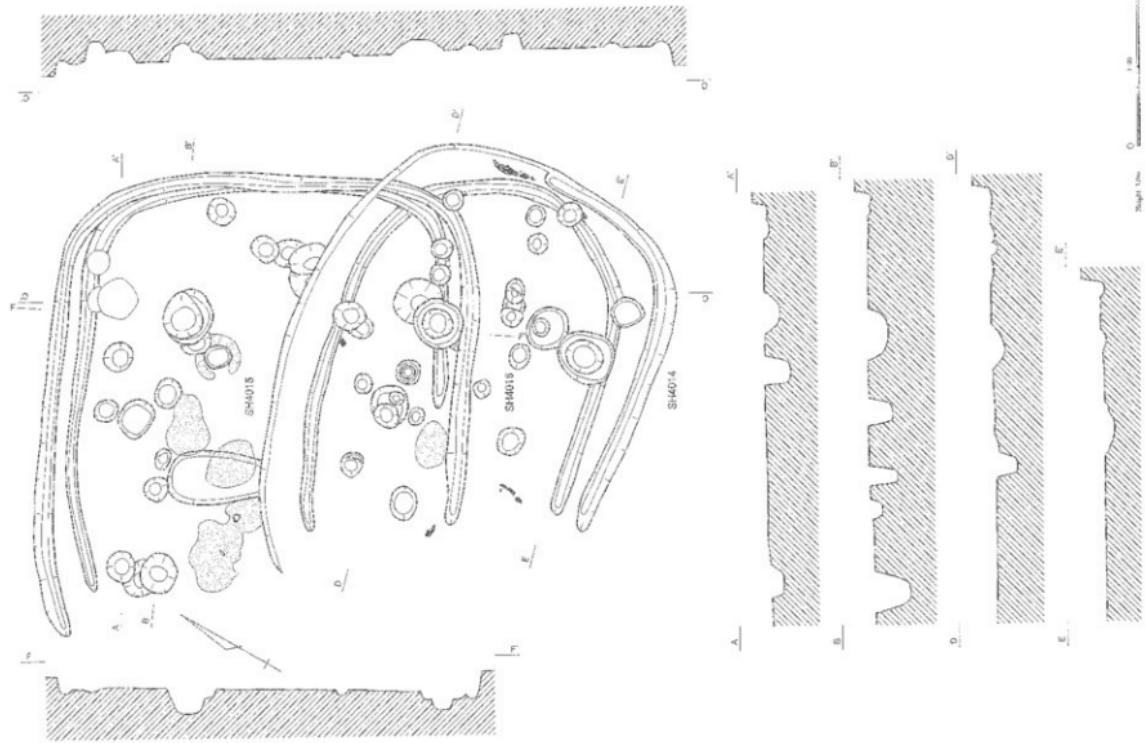


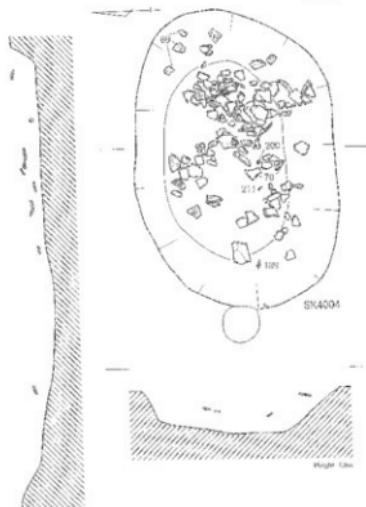
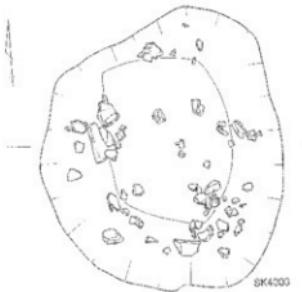
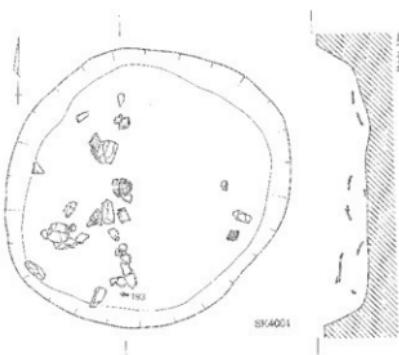




SH4014～4016実測図

PL\_15

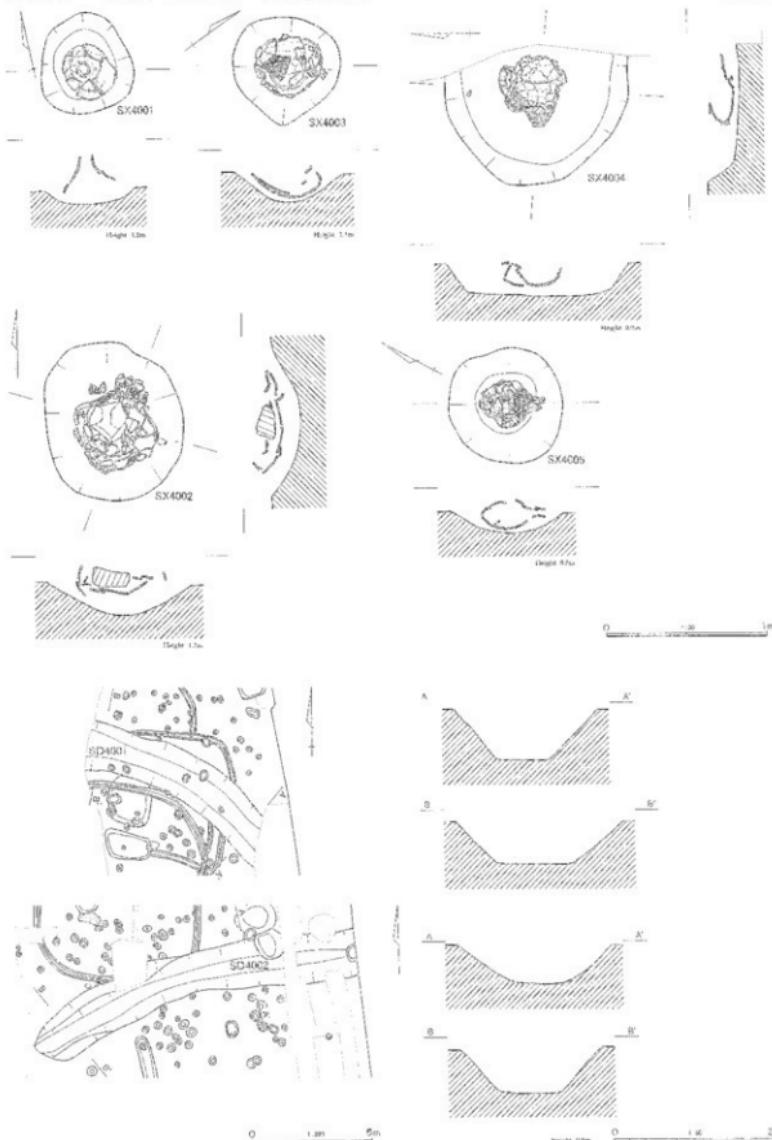


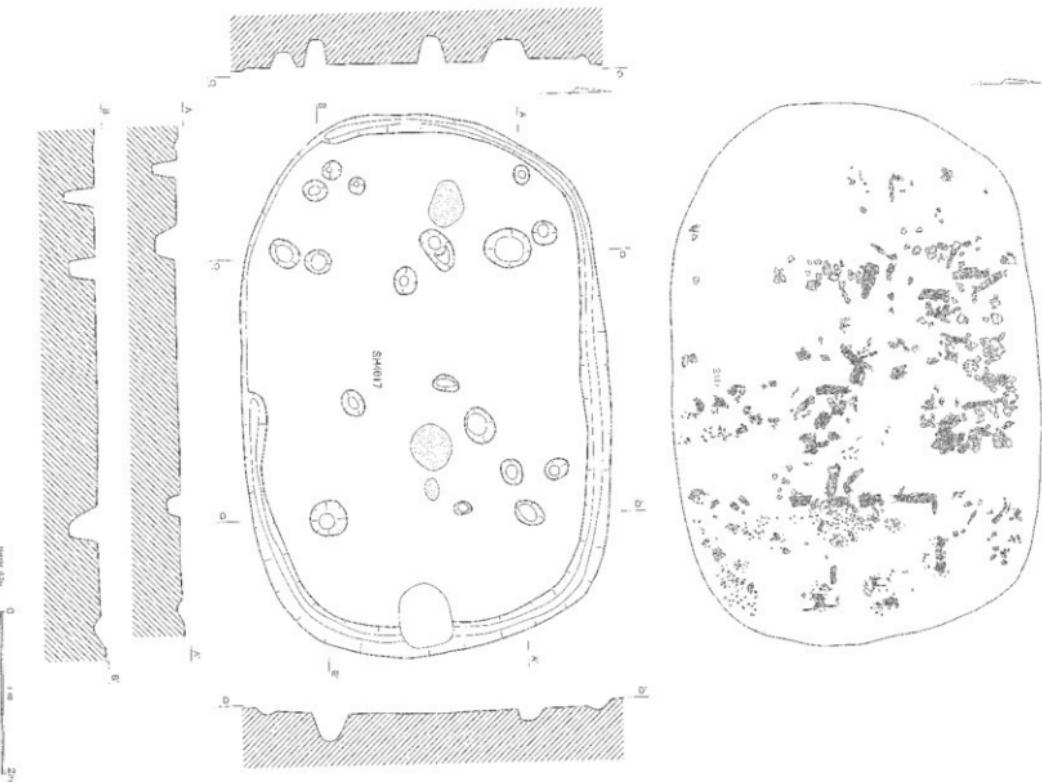


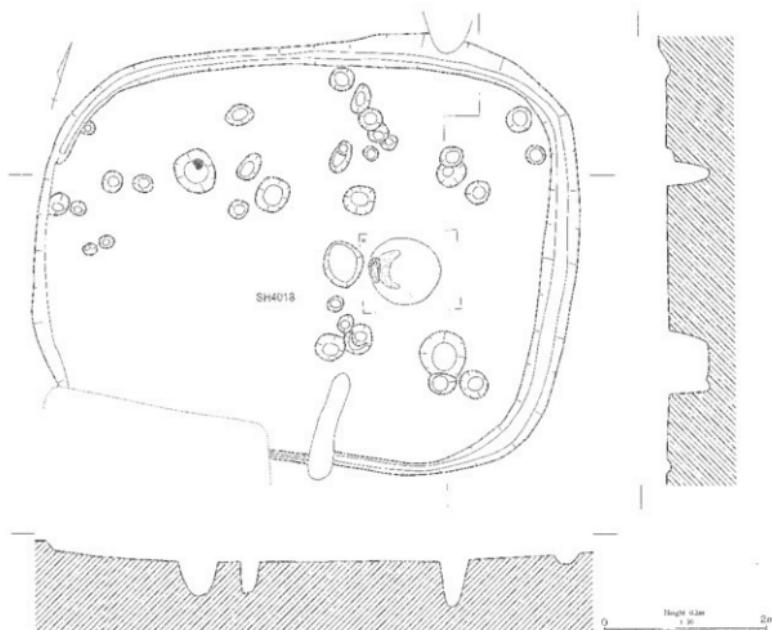
0 1m 2m

SX4001～4005、SD4001・4002実測図

PL.17

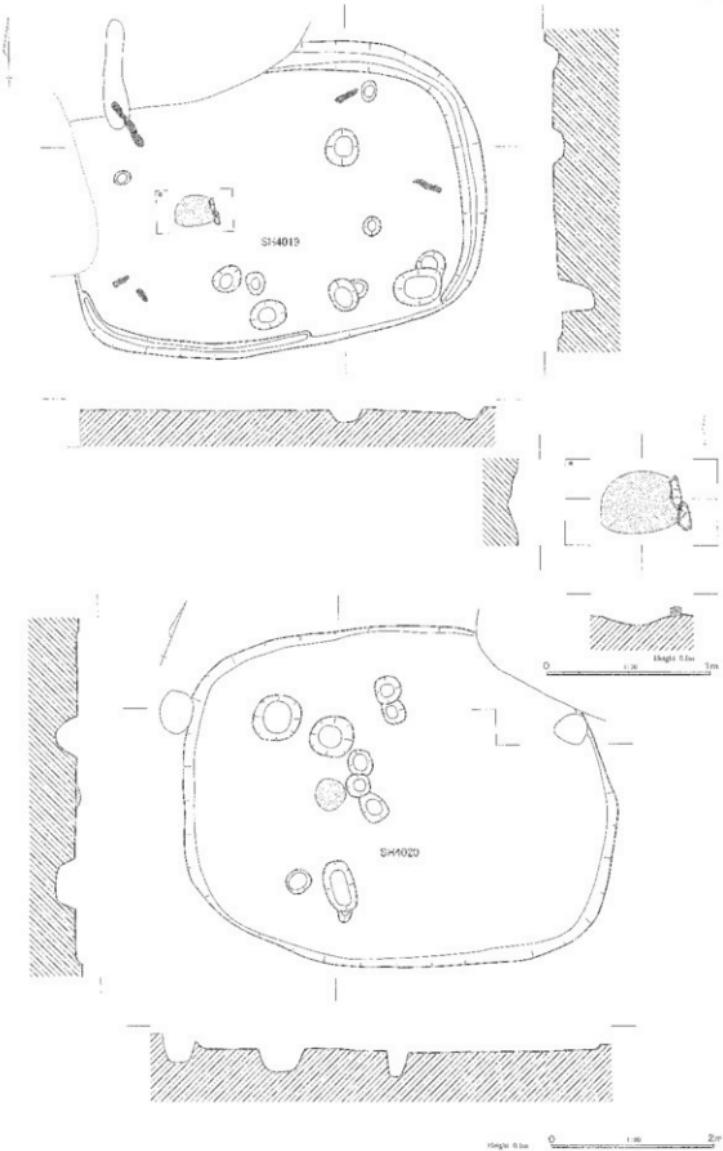


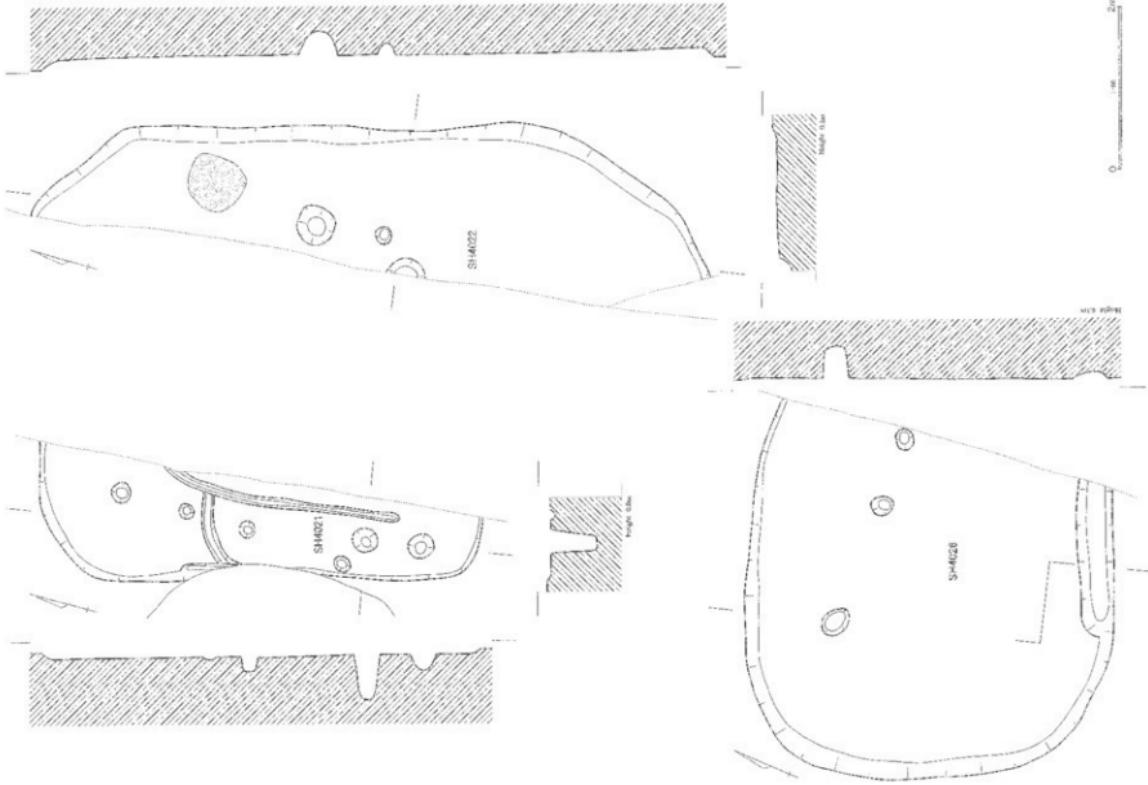




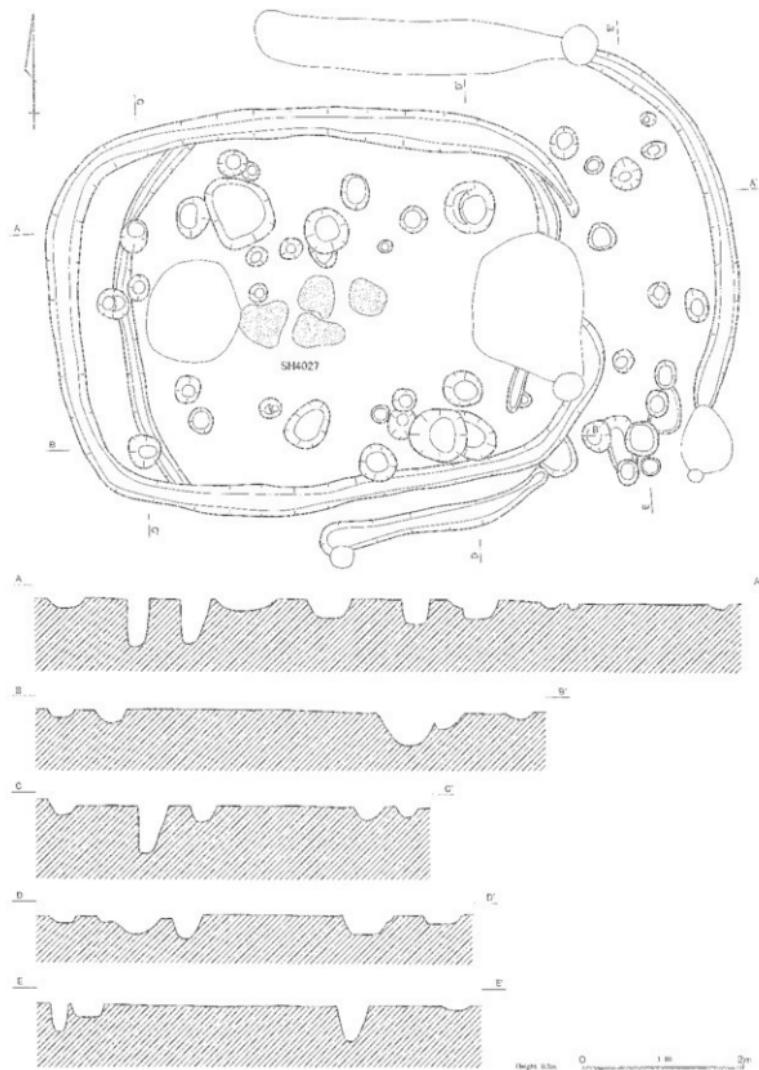
PL.20

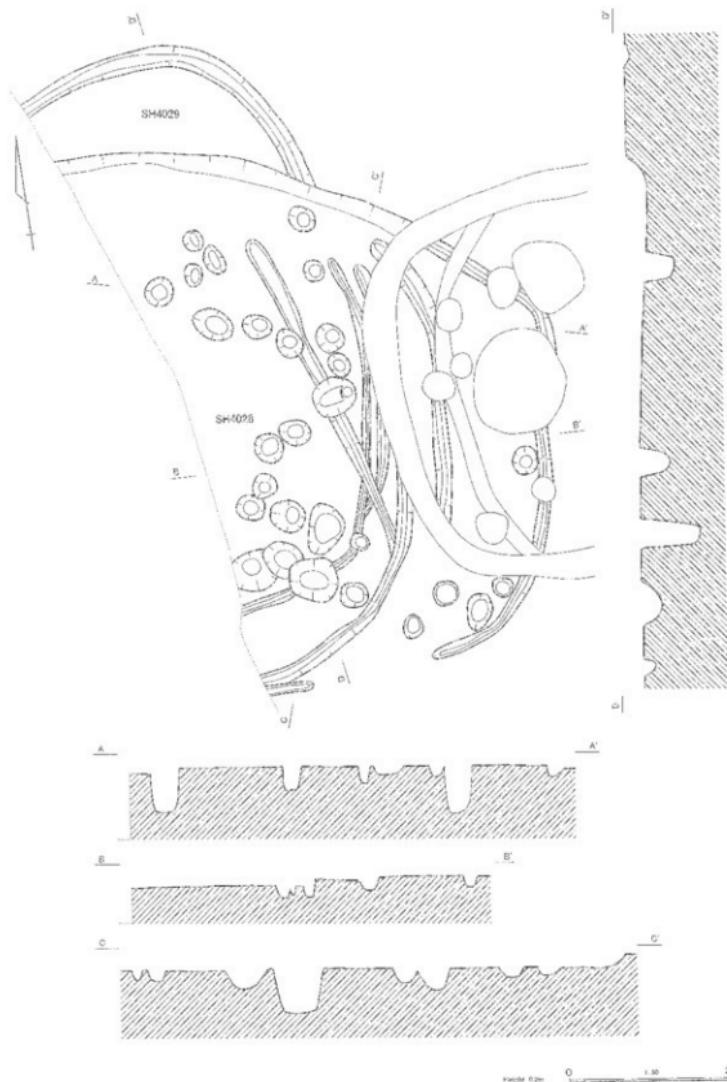
SH4019・4020実測図

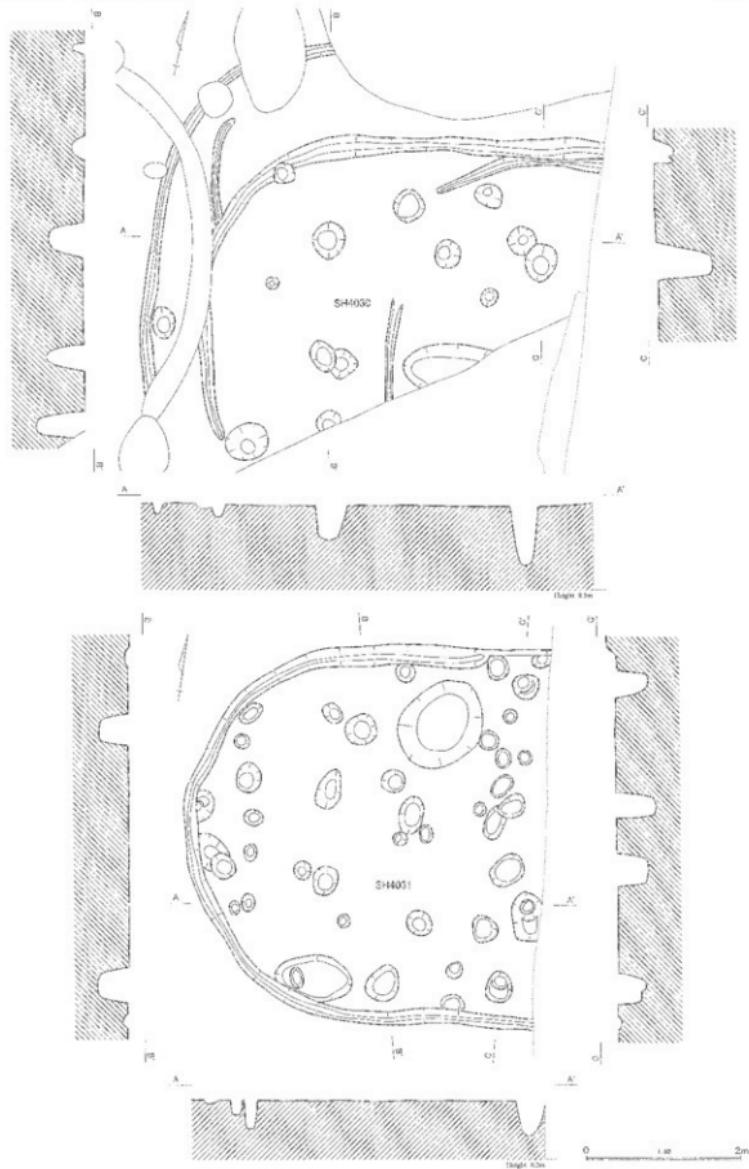






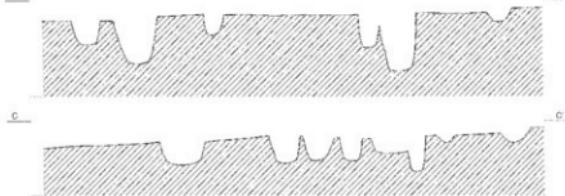
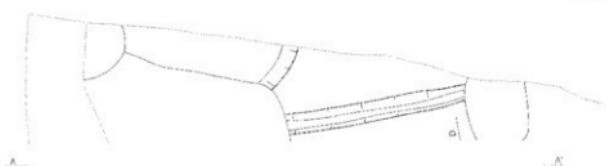
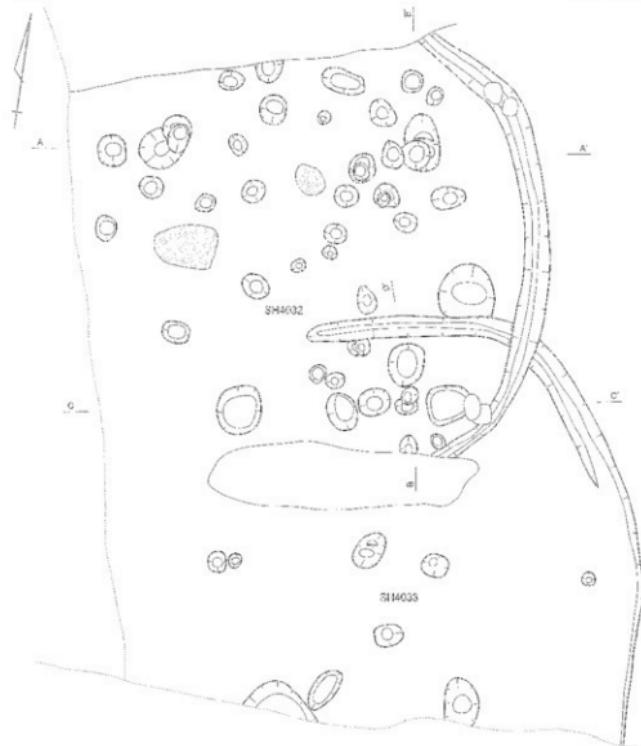




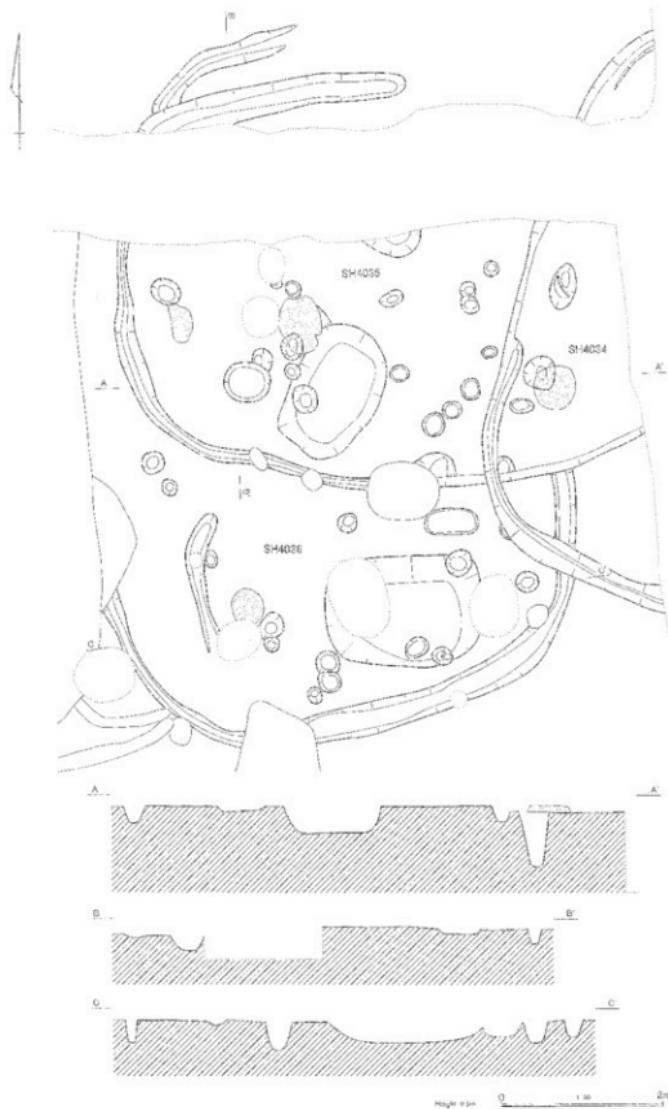


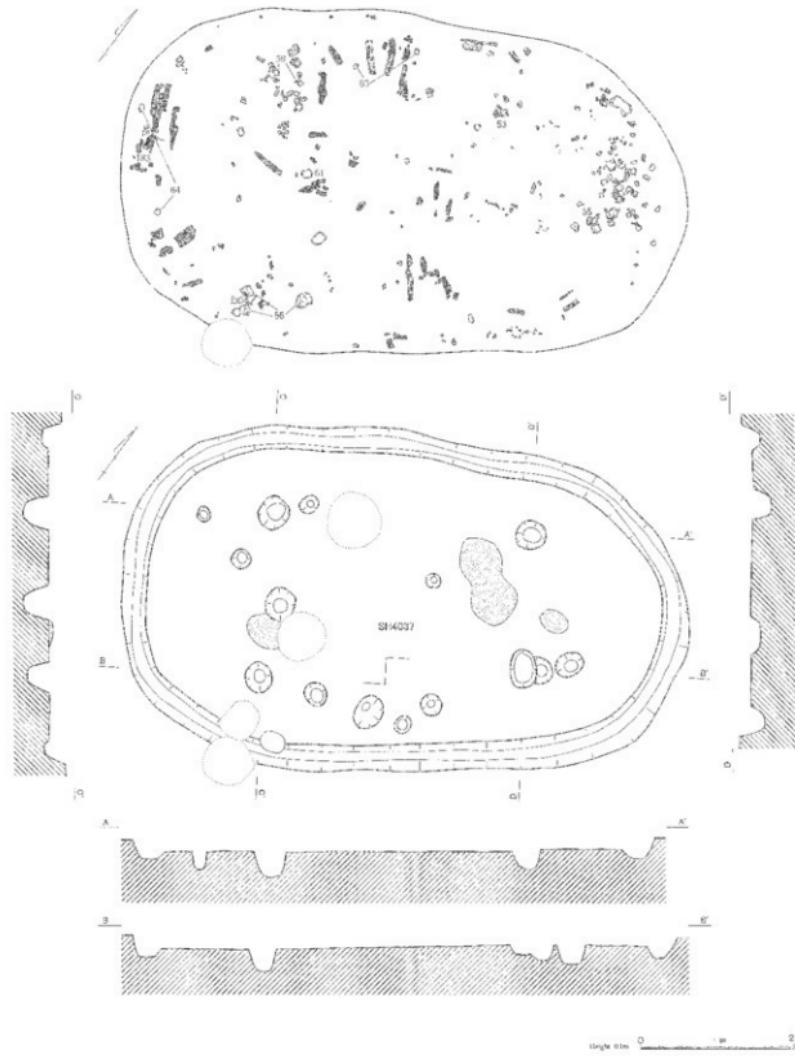
PL.26

SH4032・4033実測図



Height: 3.5m 0 1m 2m

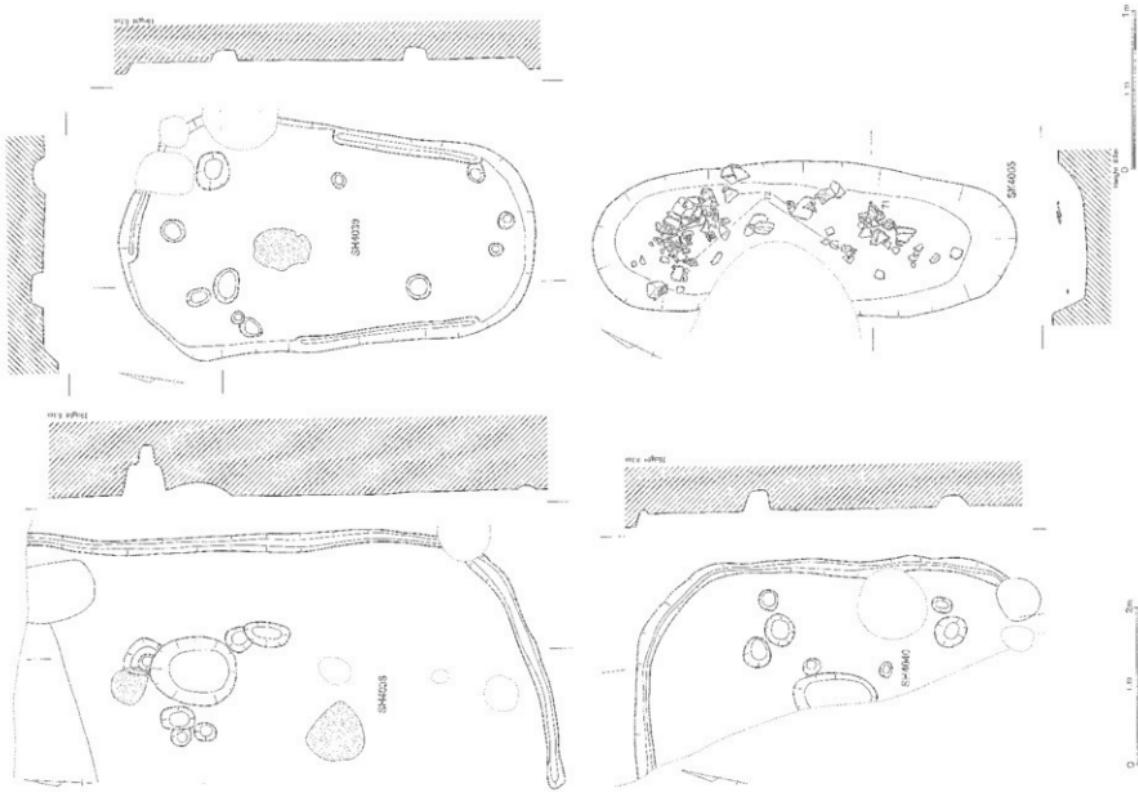




Scale 0 1m 2m

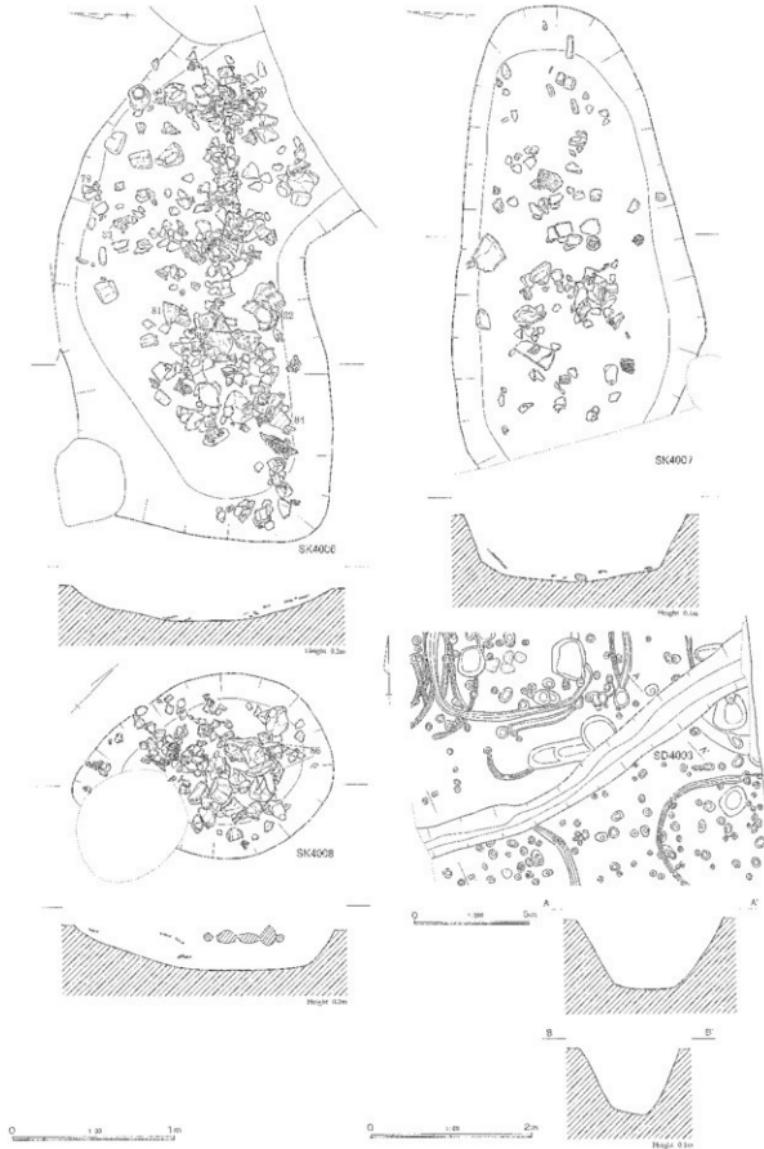
SH4038～4040、SK4005実測図

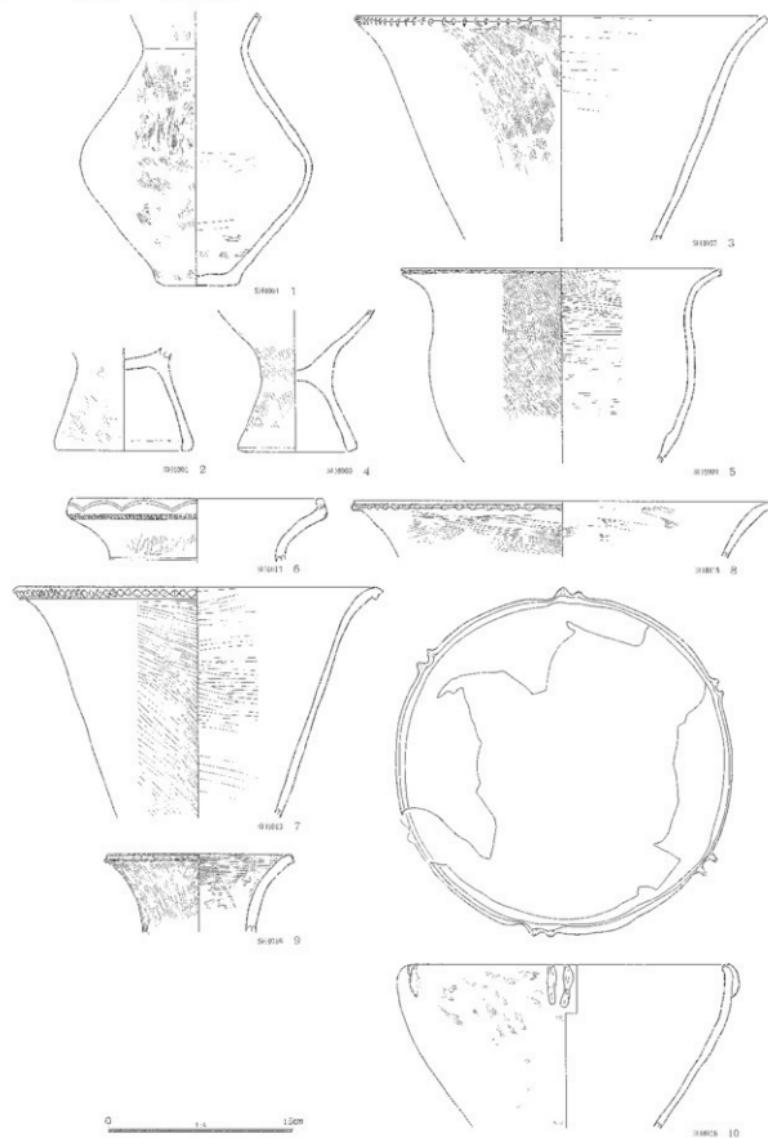
PL.29

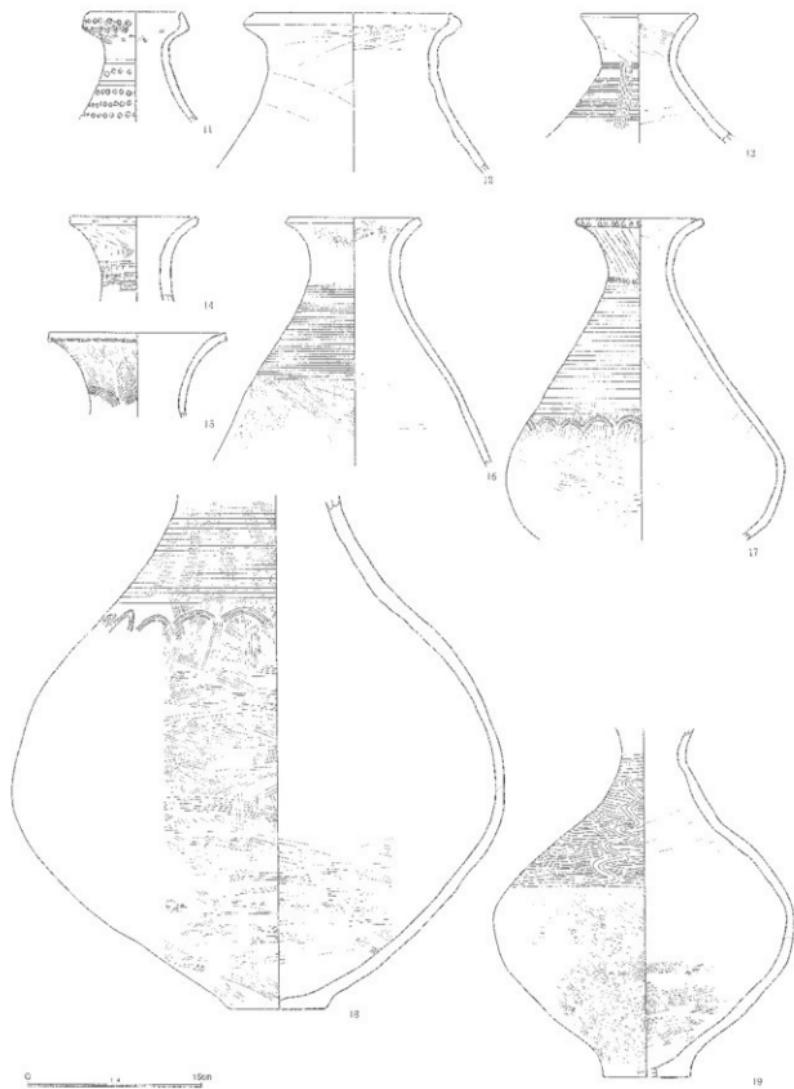


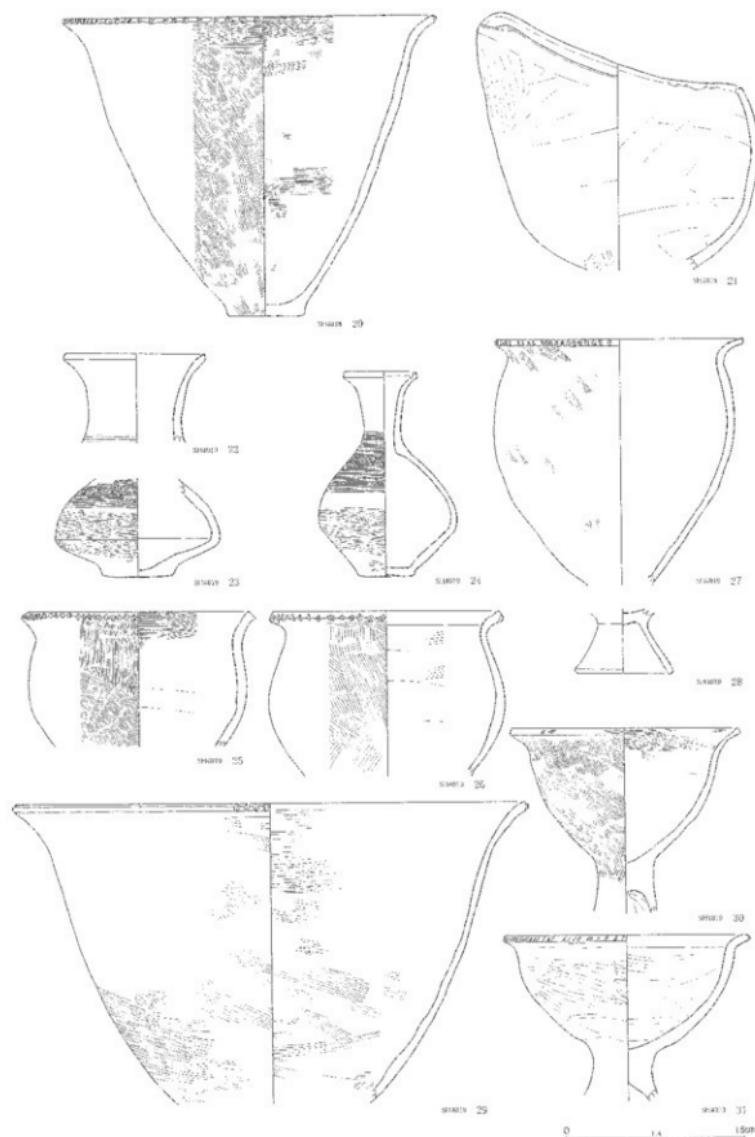
PL.30

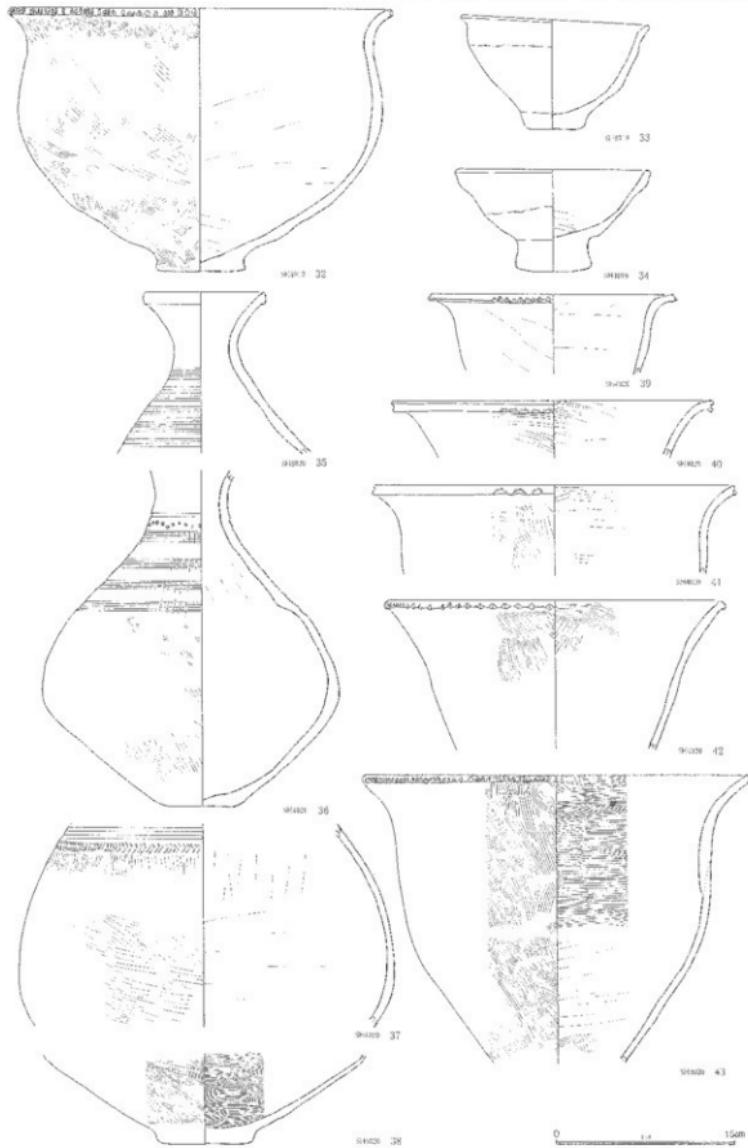
SK4006~4008、SD4003実測図



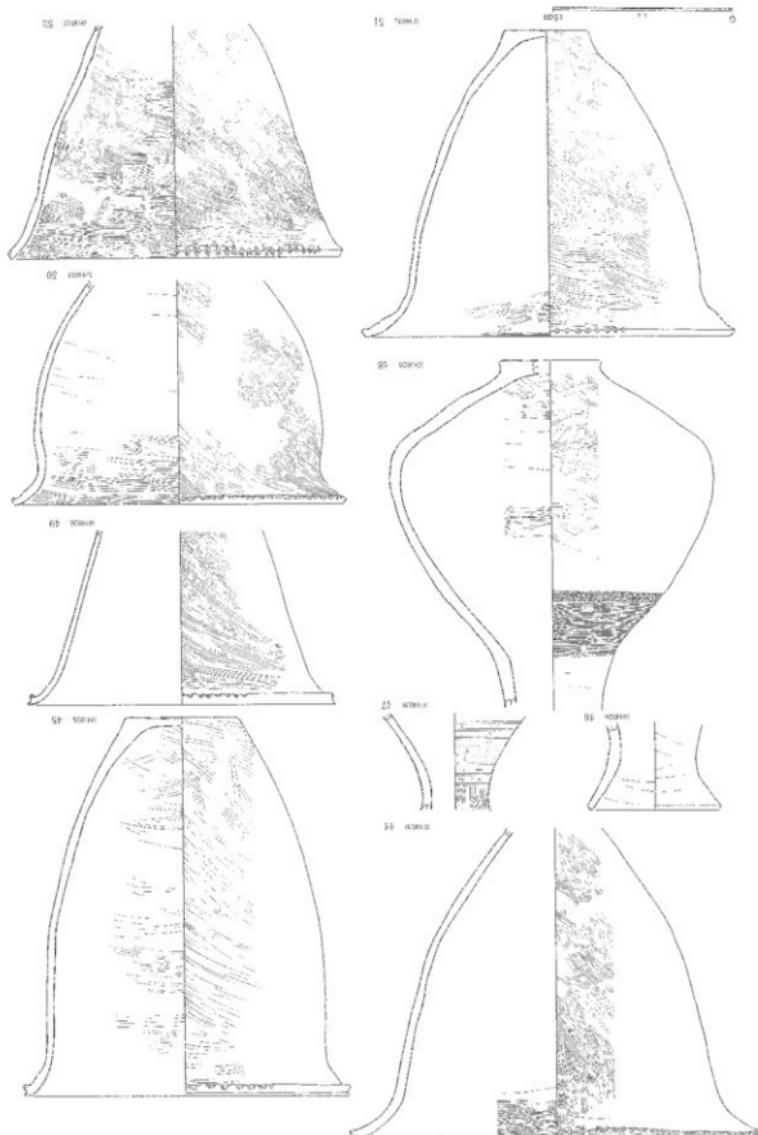


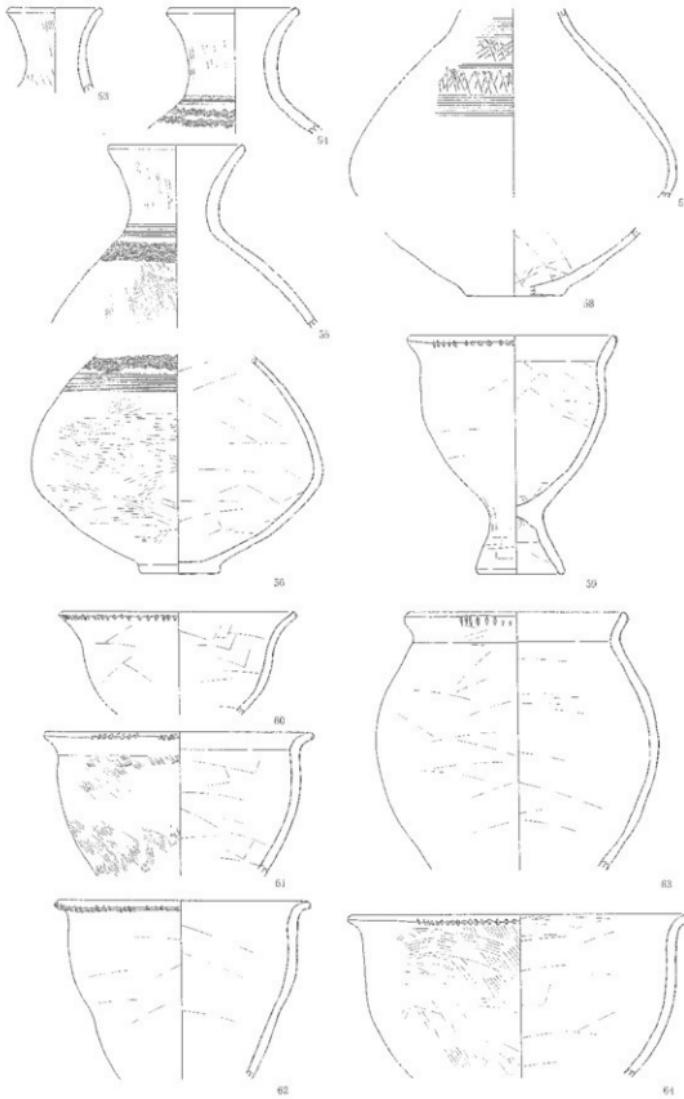


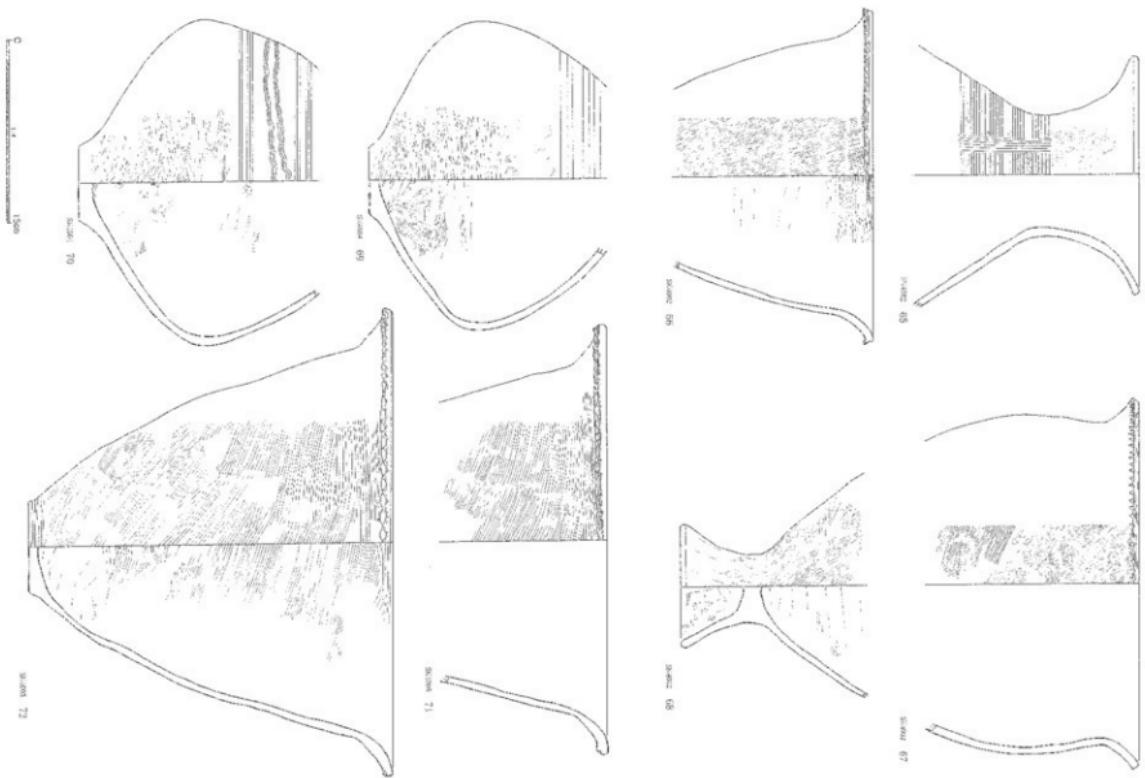


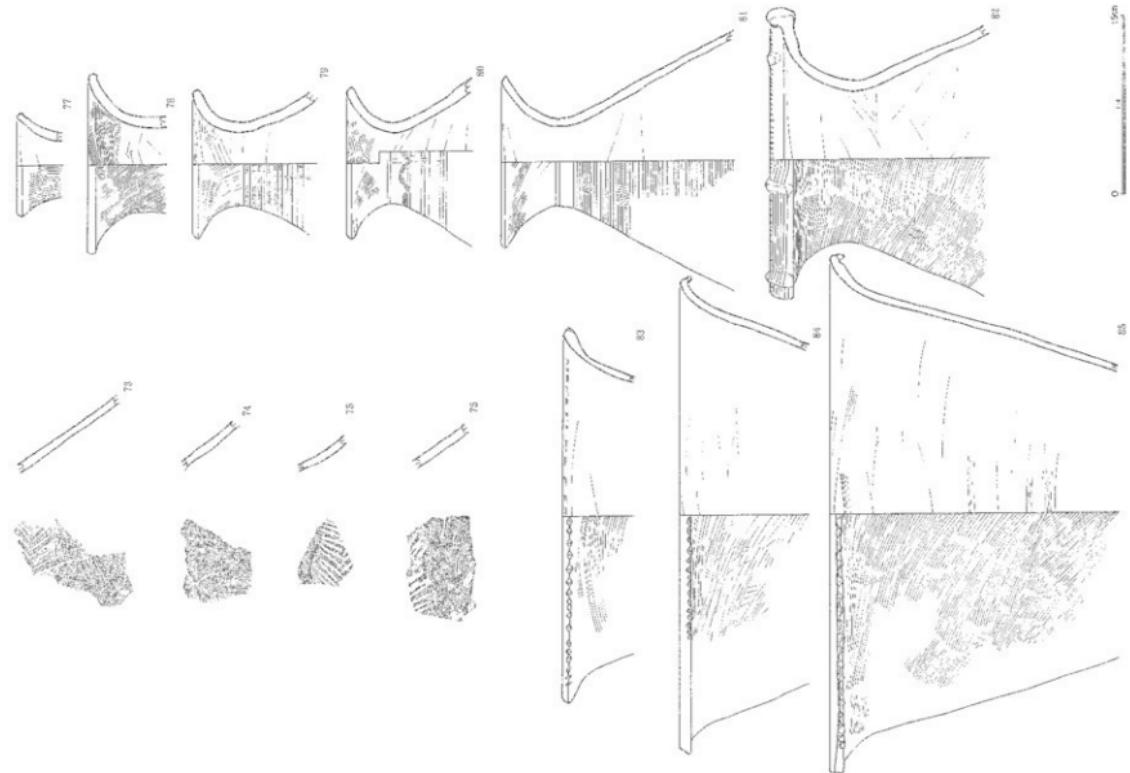


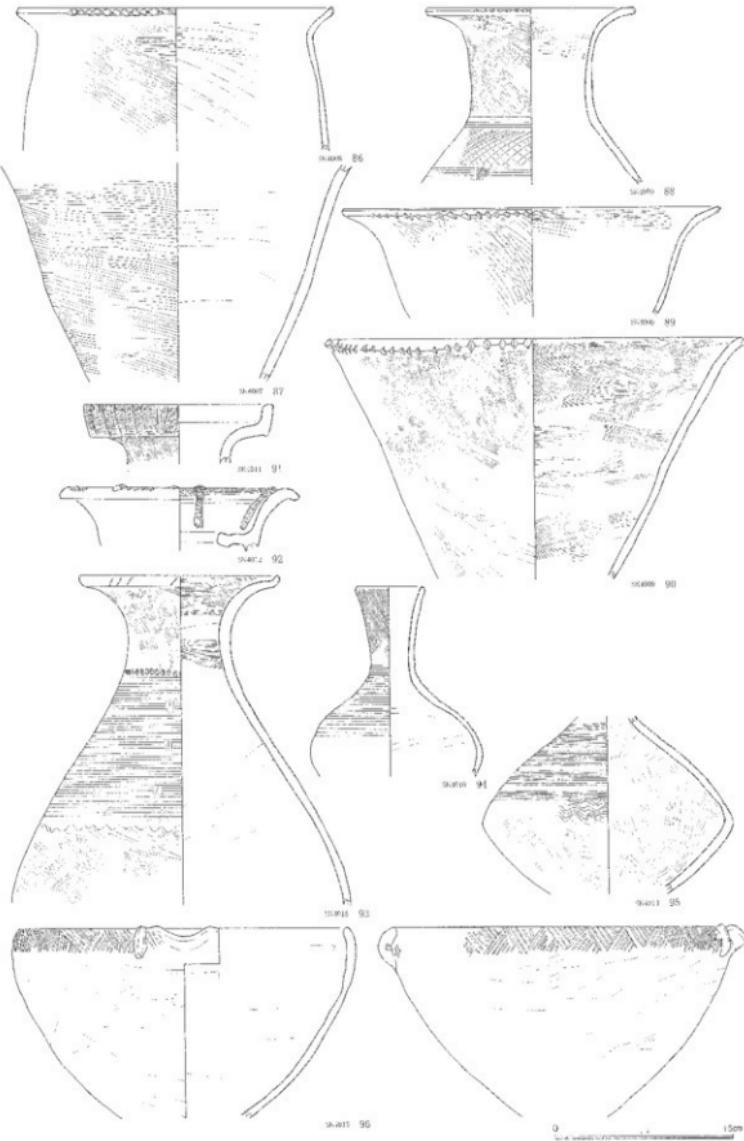
SH4020 (2) 地出土土器実測図

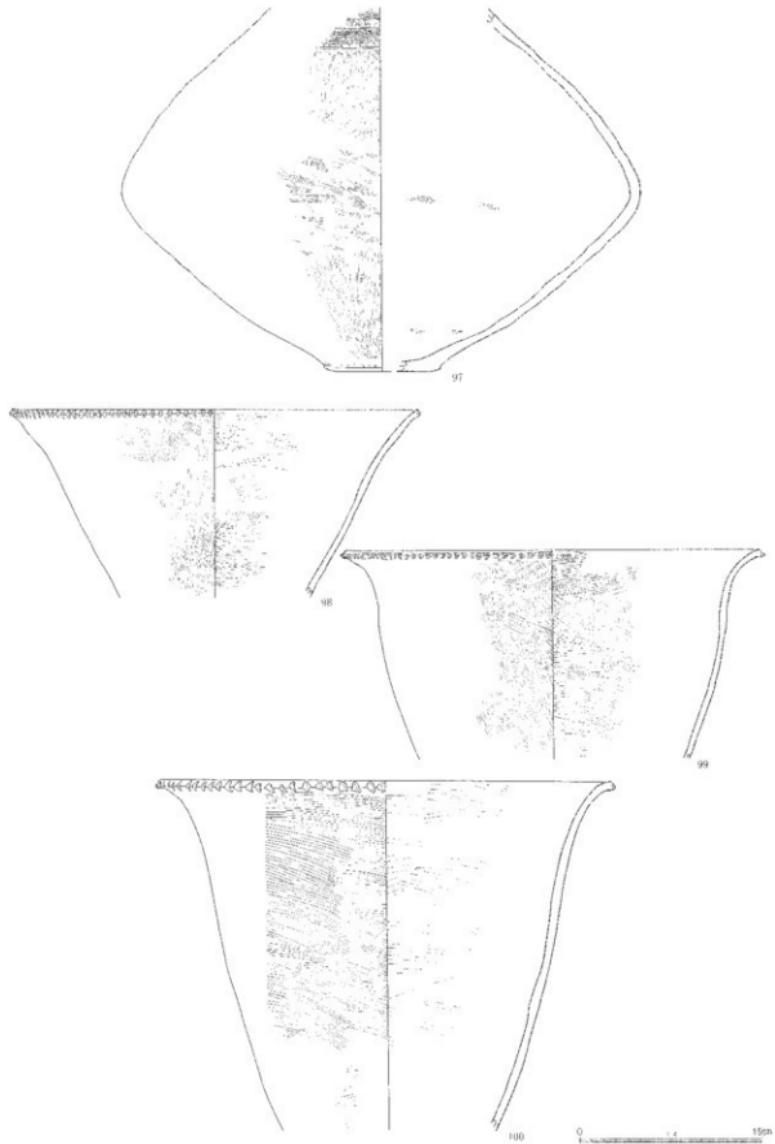


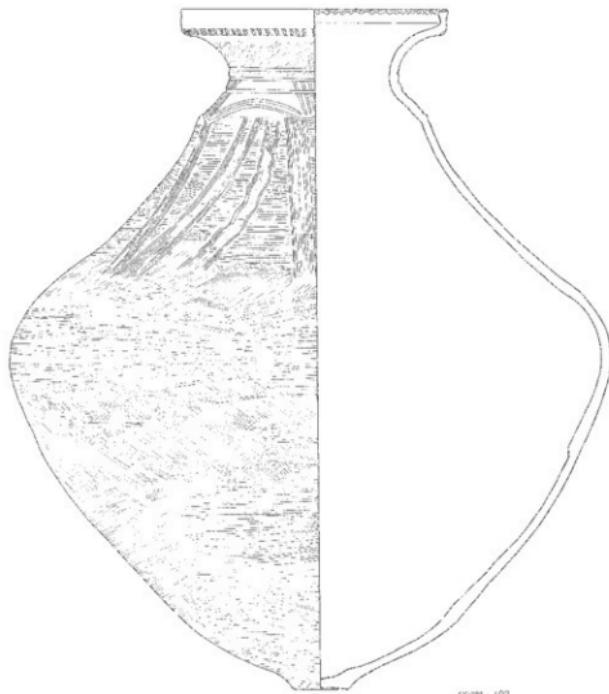
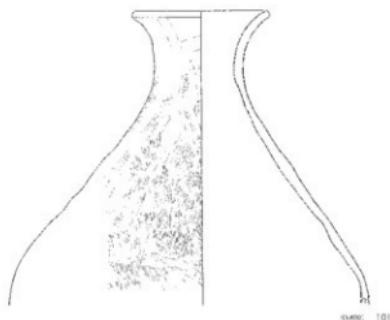




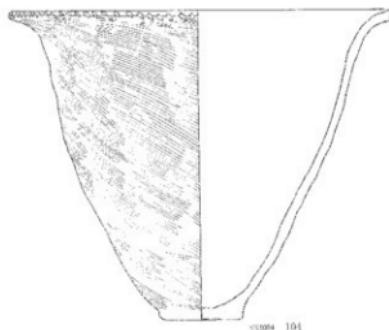
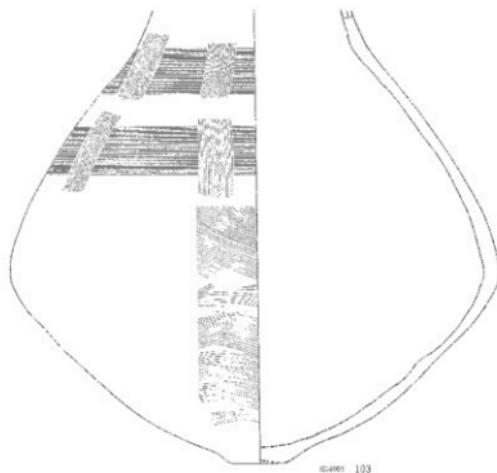




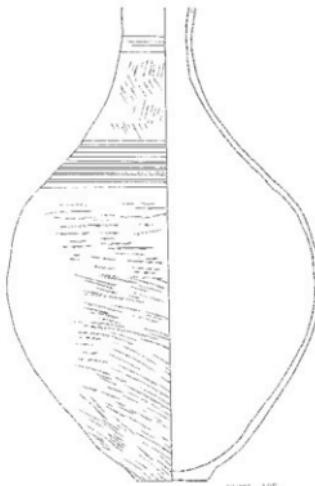




0 100 150

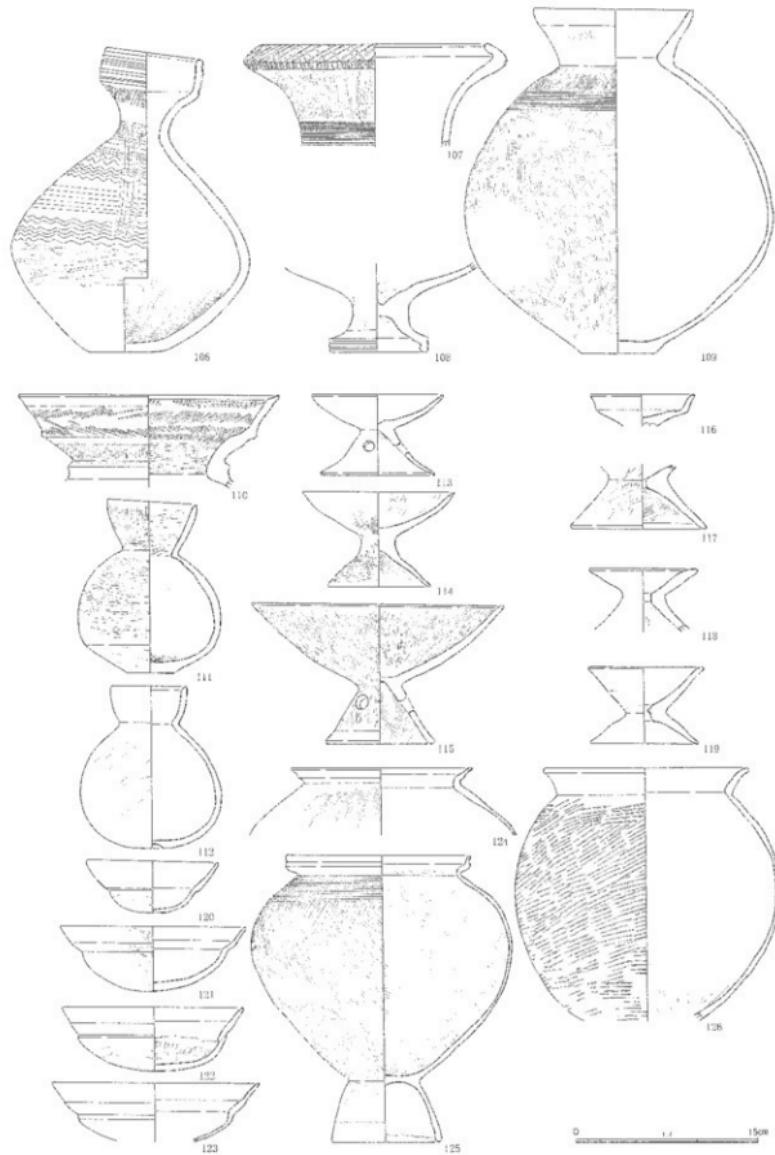


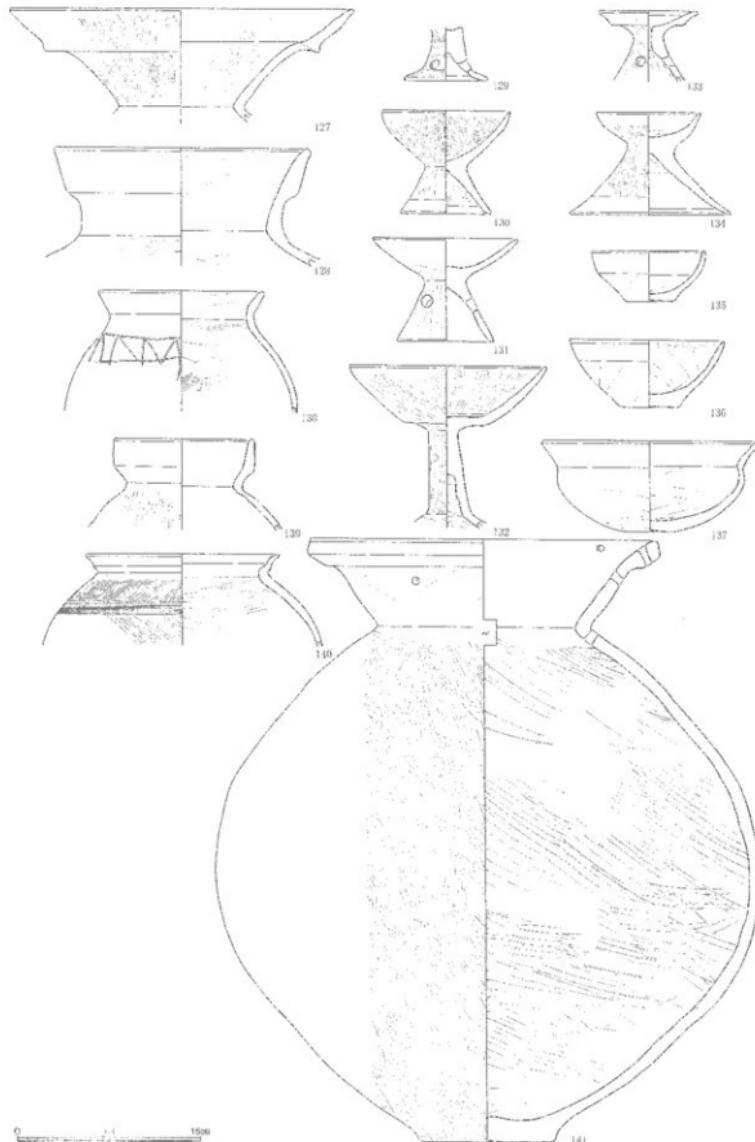
0 14 15cm



包含層出土土器実測図 (1)

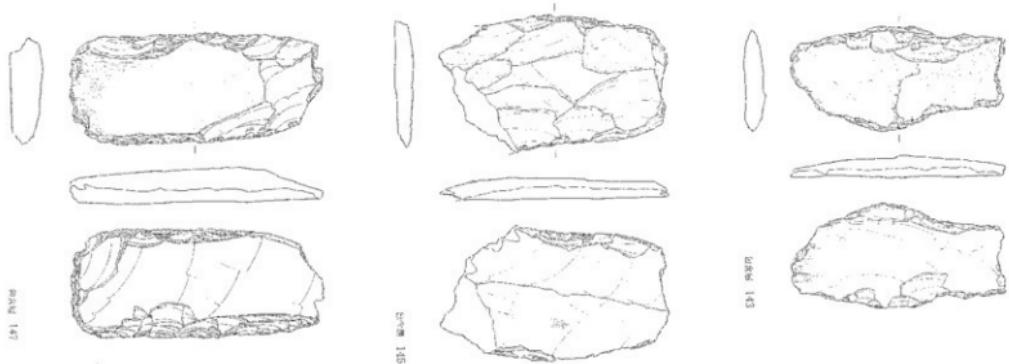
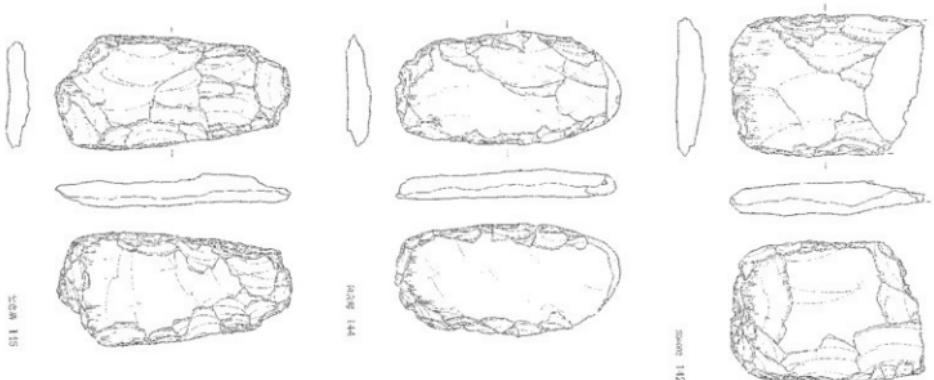
PL.43

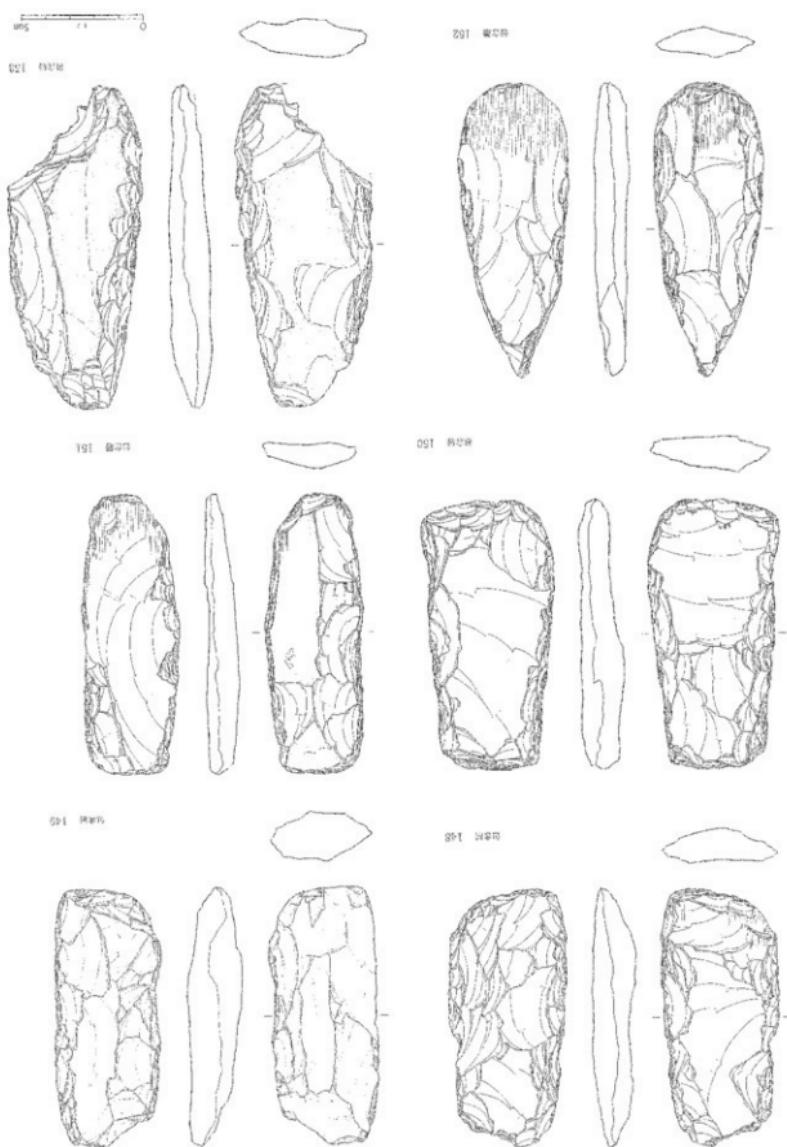




石器実測図 (1)

0  
1 cm  
2 cm

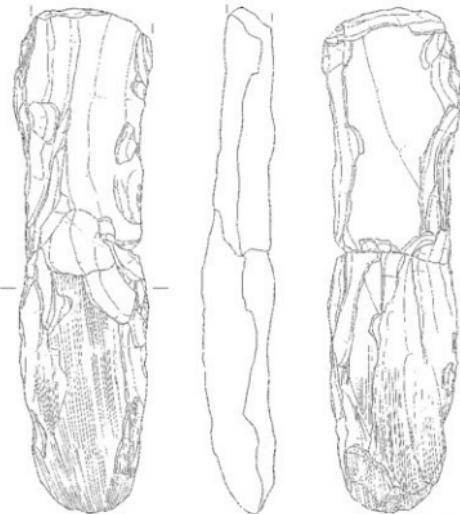




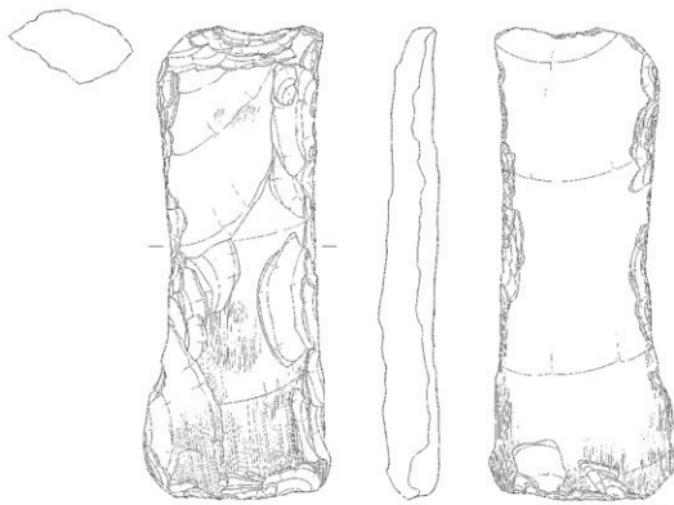
石器実測図 (2)

石器実測図 (3)

PL.47



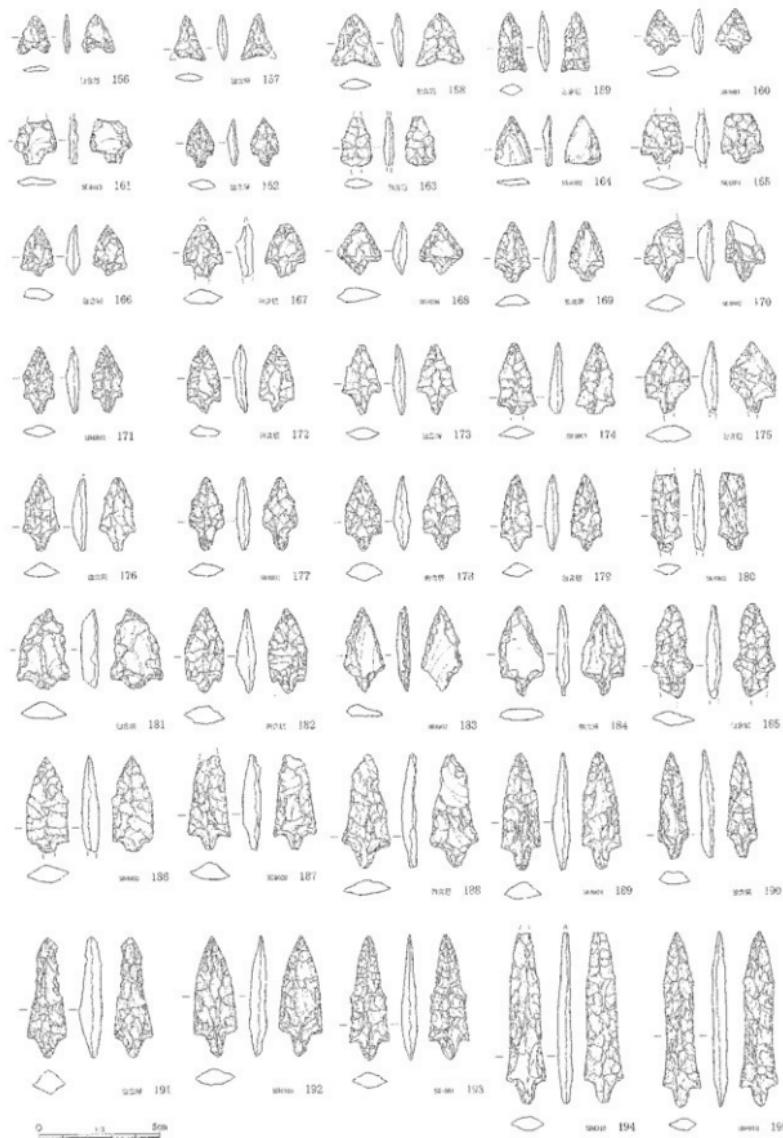
PL.47



PL.47

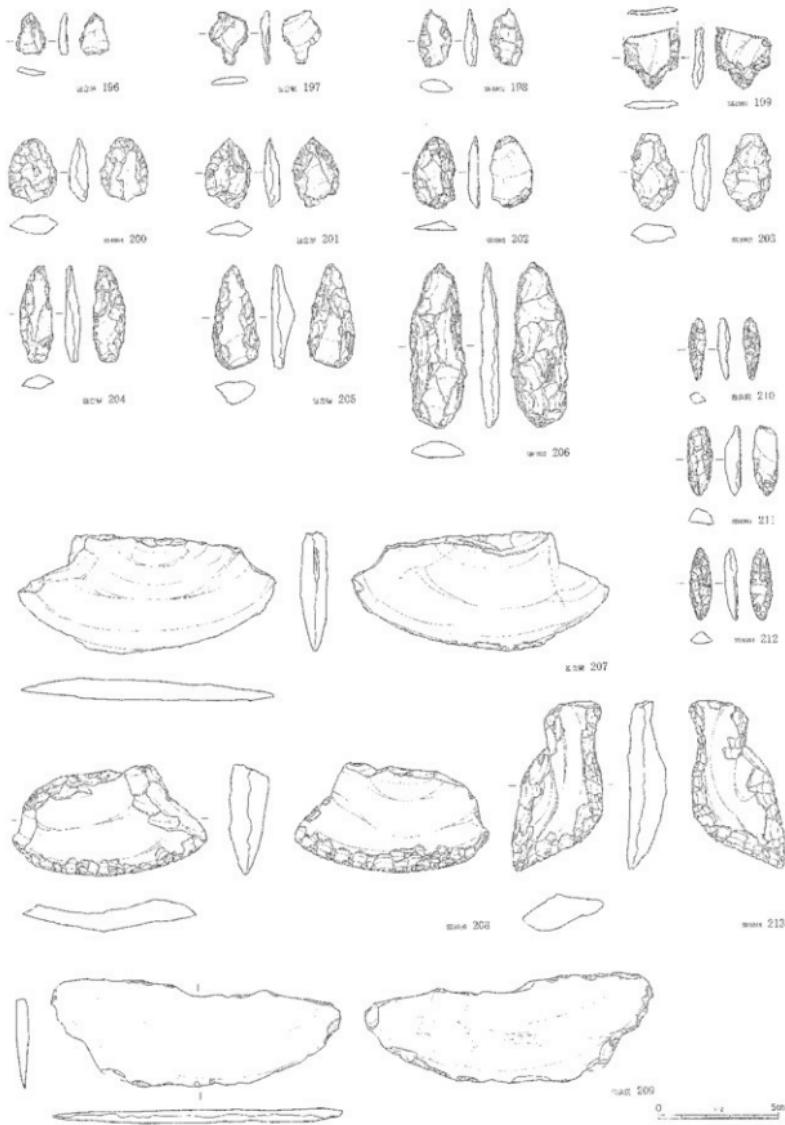


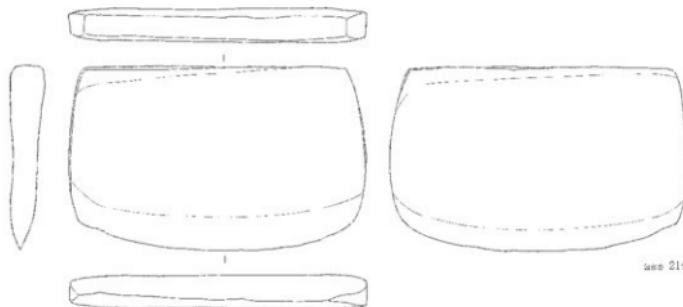
0 1 2 5cm



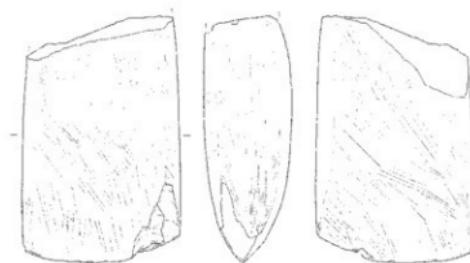
石器実測図 (5)

PL.49

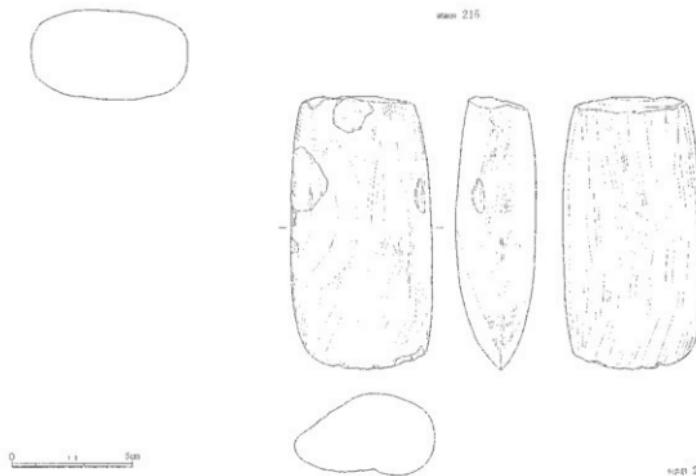




no. 211



no. 215



no. 216

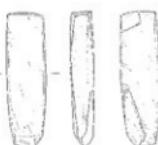
0 1 2 cm

石器実測図 (7)

PL.51



nos 217



nos 219



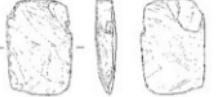
nos 220



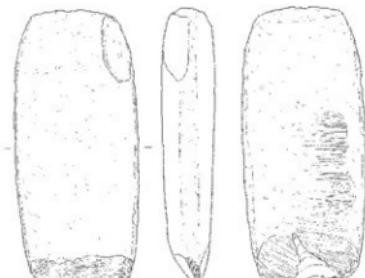
nos 218



nos 221



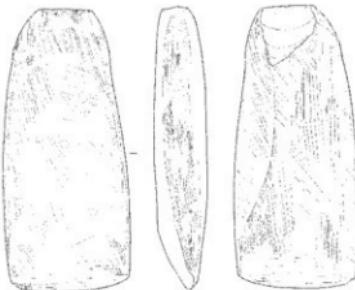
nos 222



nos 223

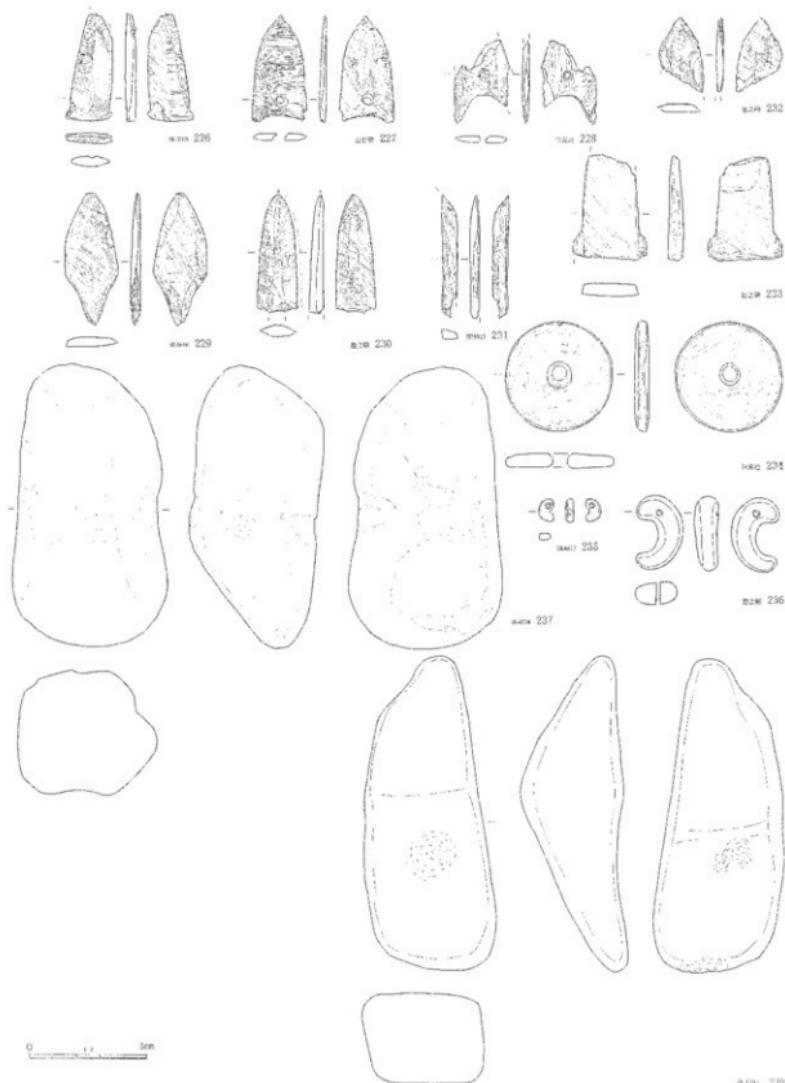


nos 224



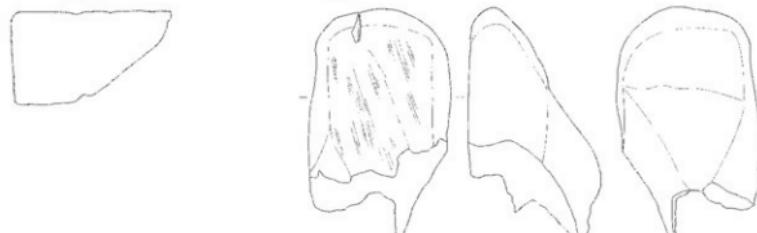
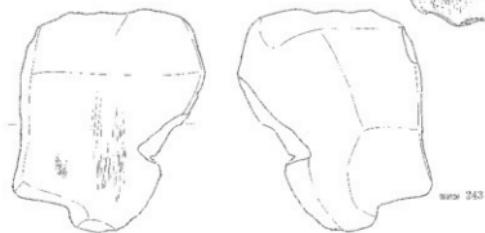
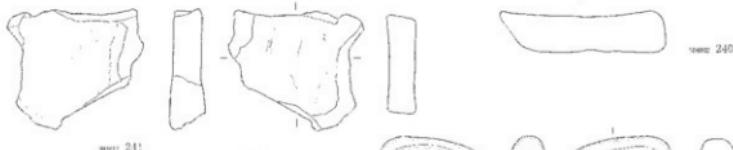
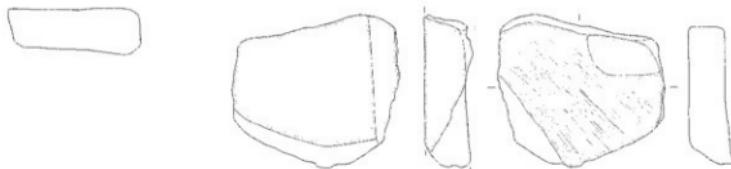
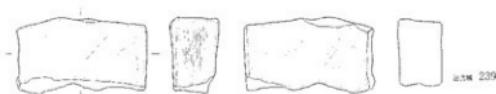
nos 225





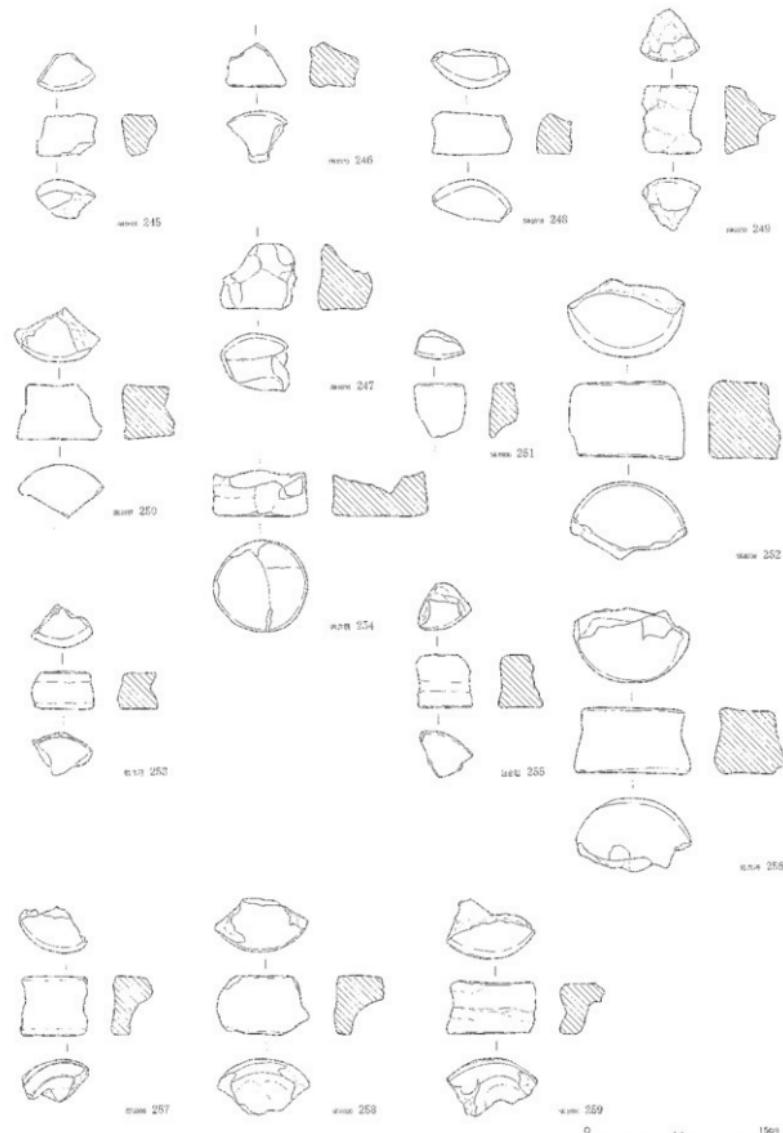
石器実測図 (9)

PL.53



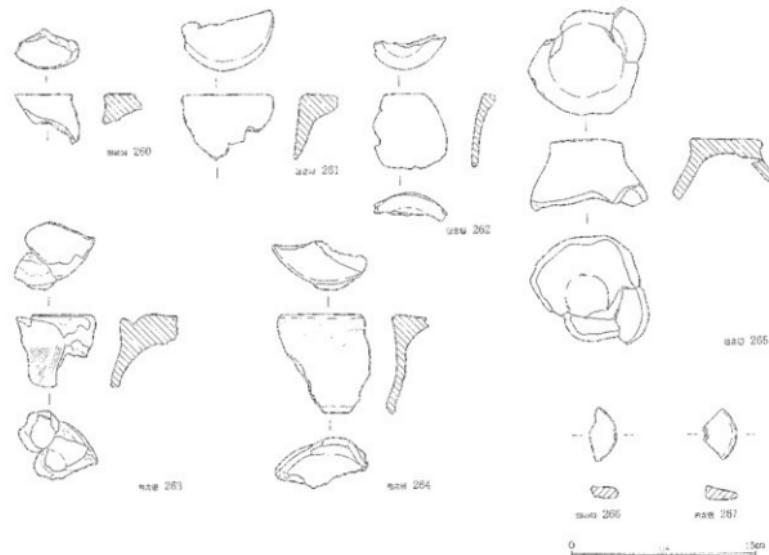
0 1 2 5mm

unu 244



土製品実測図 (2)

PL.55



写 真 図 版



1 井浦遺跡と浜名湖（南西から）



2 調査地区遠景（南から）

PH.2



1 井通遺跡 北部全景（北から）



2 井通遺跡 南部全景（北から）

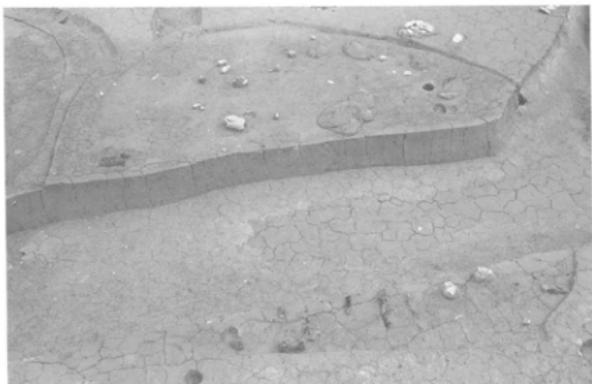
PH.3



1 SH4001・4003 (西から)

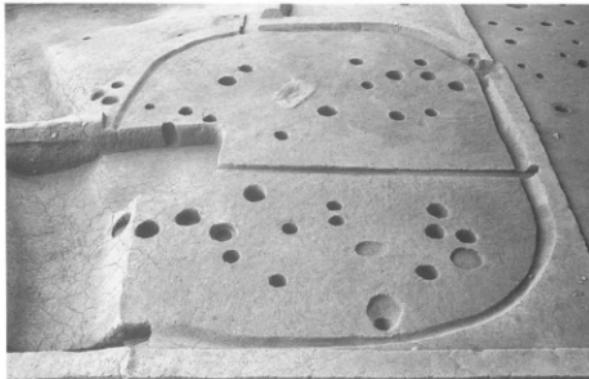


2 SH4005 (東から)



3 SH4006 (北から)

PH.4



1 SH4007 (東から)



2 SH4008 (東から)

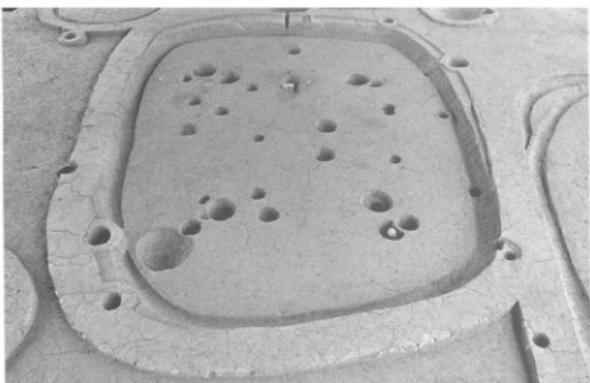


3 SH4009 (東から)

1 SH4013  
検出状況（東から）



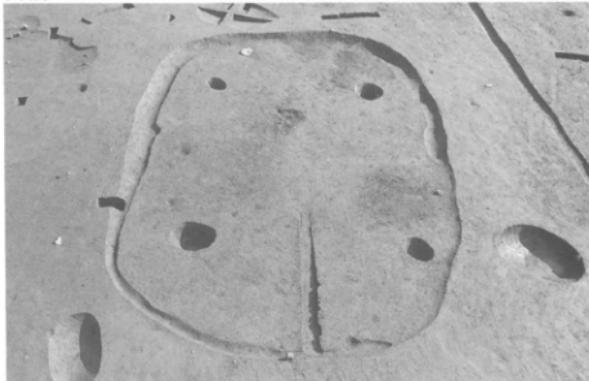
2 SH4013（東から）



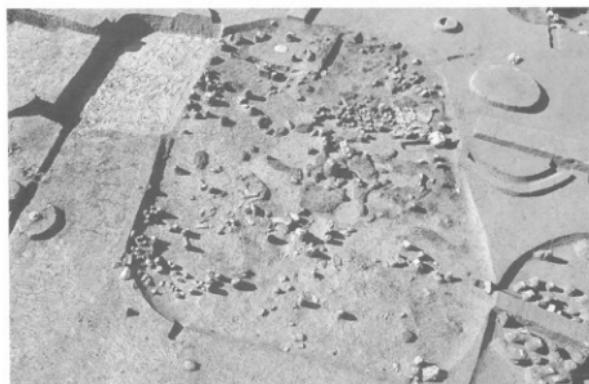
3 SH4015・4016（西から）



PH.6



1 SH4017 (西から)



2 SH4018  
検出状況 (東から)



3 SH4018 (西から)

PH.7



1 S H4019  
検出状況（東から）



2 S H4019 (東から)



3 S H4020 (西から)

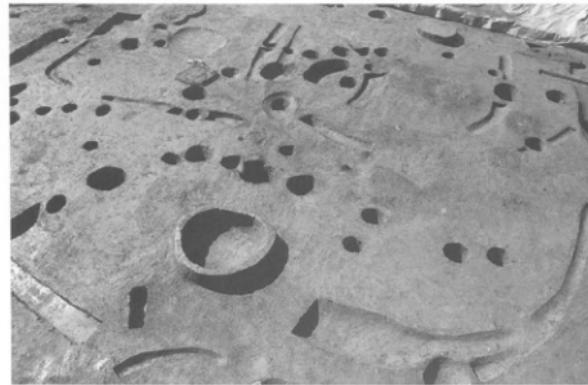
PH.8



1 S H 4022・4023 (北から)

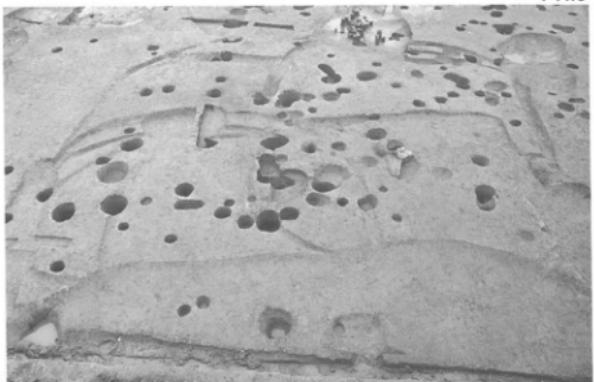


2 S H 4022～4025 (北から)



3 S H 4022～4025 (東から)

PH.9



1 S H 4022～4025 (西から)



2 S H 4026  
検出状況 (西から)



3 S H 4027 (西から)

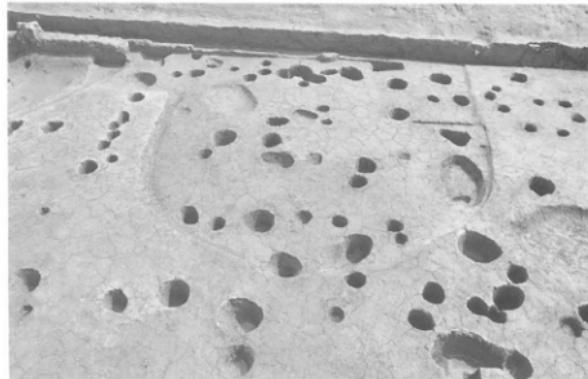
PH.10



1 S H 4027 (東から)



2 S H 4030 (西から)



3 S H 4031 (西から)



1 S II 4032 (東から)



2 SH 4033 (北東から)



3 SH 4034~4036 (北から)

PH.12



1 S H4037  
検出状況（西から）



2 S H4037（西から）



3 S H4039（北から）



1 SK 4002  
遺物出土状況（北から）



2 SK 4003  
遺物出土状況（南東から）



3 SK 4004  
遺物出土状況（東から）

PH.14



1 SK 4006  
遺物出土状況（東から）



2 SK 4008  
遺物出土状況（北東から）



3 SK 4009  
遺物出土状況（南から）



1 SD4001 (東から)



2 SD4002 (東から)



3 SD4003 (東から)

PH.16



1 S X 4003 (北東から)



2 S X 4004 (南西から)



3 S X 4005 (東から)

PH.17



10



11



12



13



21

出土土器（1）



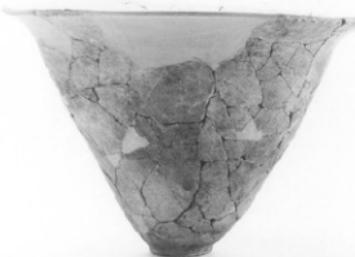
30



36



55



72



59



81



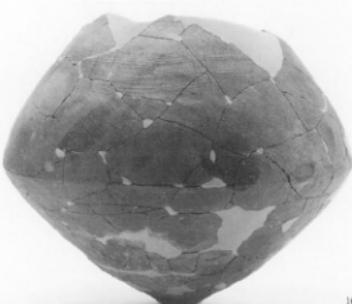
82



96



88



103



93



105

PH.20





115



141



126



139



268

PH.22



142



143



144



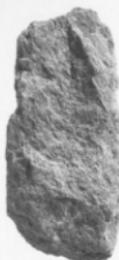
145



146



147



148



149



150



151



152



153

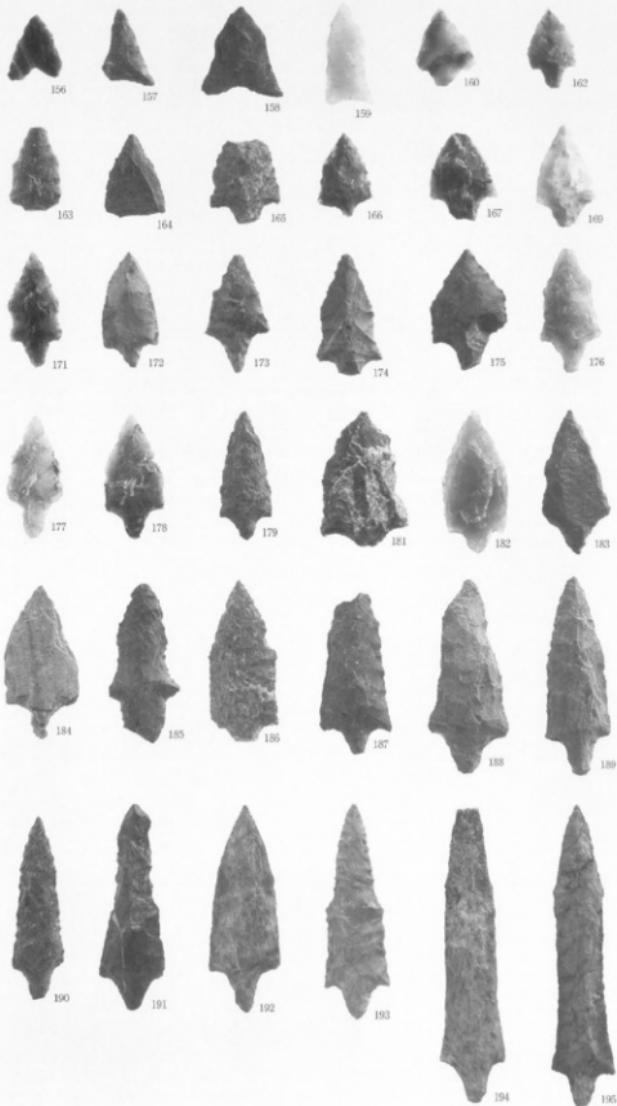


154



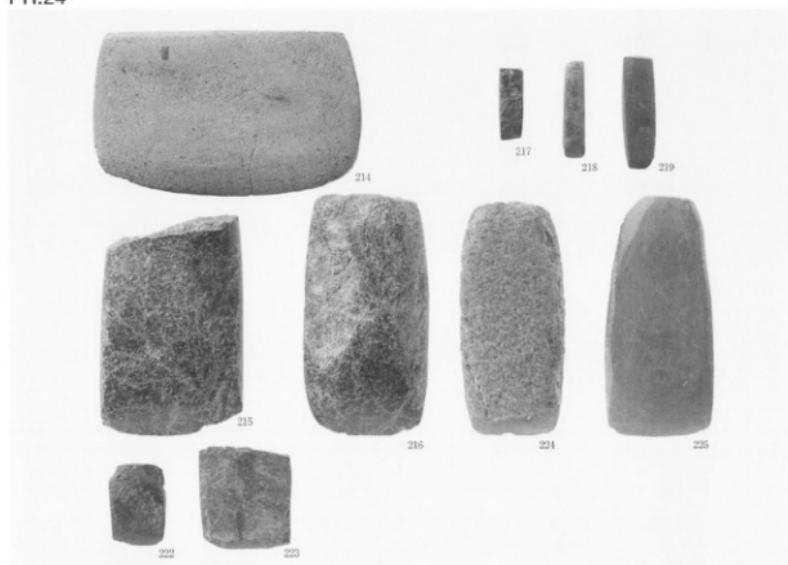
155

出土石器（1）



出土石器 (2)

PH.24



1 出土石器（3）



2 出土石器（4）

# 報告書抄録

ふりがな	いどおりいせき2						
書名	井通遺跡Ⅱ						
副書名	平成8~19年度 井伊谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第181集						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第181集						
著者名	九杉俊一郎／平塚智久						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261 (代表)						
発行年月日	2008年3月19日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
井通遺跡	静岡県 浜松市 北区 織江町 広間字 井通	22135	国界測地系		20010701~ 20020331 20020401~ 20030331	8,350m <sup>2</sup>	河川改修 (平成8~14 年度井伊谷川 河川改修)に 伴う享前調査
			34°	137°			
			48'	39'			
			36"	27"			
			旧日本測地系		20030401~ 20040329 20040401~ 20041029		
			34°	137°	20040329		
			48'	39'	20040401~		
			24"	37"	20041029		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
井通遺跡	集落	弥生中期	堅穴溝形土坑、土坑・溝・土器墓羣	弥生土器・打鍛石斧・磨製石斧・石器・有孔石器・台盤状土器品・鳥足土器	都出川流域に誕生した弥生時代中期後葉の大規模集落		
	墓	弥生後期~古墳前期	自然認定	弥生土器・古式土器群			
要約	井通遺跡は弥生時代中期～中晩にわたり集落が営まれた複合集落遺跡である。 弥生時代中期後葉に集落が形成され、都出川流域における本格的な農耕社会へ移行する様相を確認できる。 なお、井通遺跡の古墳時代中期以降の調査成果は、本書とは別に報告している。						

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第181集

## 井通遺跡Ⅱ

### 井伊谷川流域の遺跡Ⅲ

平成8~19年度 二級河川井伊谷川河川改修工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月19日

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL 054-262-4261 (代表)  
印刷所 中部印刷株式会社  
〒422-8037 静岡県静岡市駿河区下島426-1  
TEL 054-237-9133

